



Title	大泉町における外国人保育の実態
Author(s)	品川, ひろみ; 野崎, 剛毅
Citation	「調査と社会理論」・研究報告書, 23, 67-137
Issue Date	2007-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28289">https://hdl.handle.net/2115/28289</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	23_P67-137.pdf



# 大泉町における外国人保育の実態

品川ひろみ・野崎剛毅

## 第1章 問題の所在と調査の概要

### 第1節 問題の所在と先行研究

1990年以降、ニューカマーと呼ばれる外国人労働者が急激に増加する中で、労働者の家族である日系ブラジル人の子どもたちを巡る様々な教育問題が表れてきた。子どもたちの中でも、就学に達する年齢である学齢期以降の教育をめぐる問題は、それに対応するように、既に多様な角度からの先行研究が蓄積されてきた。

しかし、そのような学校教育段階の研究の豊富さに対して、就学前の子どもたちの保育を扱った研究は十分とはいえない。ただし、研究の視点を、日系ブラジル人児童に限定せず、「異文化および多文化の保育」という視点に広げれば、現在の外国人保育が置かれている問題にふれることができる。

新倉(2001)は、幼児教育の現場の性質上、日常の保育の中で、子どもの生活習慣や文化の違いがぶつかり合うことを指摘し、そこで生じた問題に対して、どのような望ましい対処の方法があるのかを検討している。このような外国人児童の入園で混乱する現場の要請に応えるような研究は多く、2003年の日本保育学会「国際交流委員会企画シンポジウム」でも、「研究の多くは、外国籍の園児が入園してきて、その保育をどうするのか、という問題を中心に議論されてきた」(箕浦2004)といわれるように、外国人保育研究においては、主流のテーマであるといえる。ここで議論された問題を整理すると、「言葉や生活習慣の問題」であり、「人との意思疎通の問題」(大場・民秋・中田・久富1998)と見ることができる。保育の場で生じる多くの問題は大きく分けるとこの二つに該当するからである。

さて、外国人保育研究では、これらのいわば問題対応型の研究から脱し、外国人児童の言語習得、行為獲得、他児との対人関係についての保育所への適応問題として検討しているものや、適応という問題から一歩進み、差異に焦点を当てた研究も見られる<sup>1)</sup>。

またそれらの研究対象を見ると、前述したような子どもを主体としたものを中心として、保育士を主体としたもの、親を主体としたもの、さらにはその相互関係に焦点が当てられている。箕浦(2004)はこれまで蓄積されてきた、多文化的背景をふまえて「保育者と子ども」「保育者と保護者」の関係について、知見を解釈するための理論的なモデルを提示する試みをしている。また新倉(2001)は、保育を行う中で生じるさまざまな軋轢を乗り越える能力を、異文化間トレランスと定義し、トレランスが高ければ負担感や疲労感を調整して、事態に対処できることを示唆している。

しかしこれらの研究は、子どもや保育者の一つひとつの行為を詳細に検討する、いわばミクロ的な研究が中心であり、保育士が現に直面している課題を克服するという実践の面では有益だが、外国人保育自体が抱える社会的な課題を明らかにするという視点が不足しているという点で共通している。

そこで本稿では、外国人保育の問題を、社会的な文脈の中、つまり特定の保育の場のみではなく、それを取り巻く周辺の状況と合わせ、検討したいと考えている<sup>2)</sup>。

その対象として国内において日系ブラジル人が多く生活する群馬県大泉町を選び、町内にある全ての保育所を対象に調査を行った。町内6園の保育所の中には、外国人児童が多く在籍する園と、ごく少数の園がある。外国人保育を検討する場合、一般的には外国人児童が多い園を対象とすることが多い。だが、外国人児童が多い園と、少ない園では、園全体の様子や、外国人児童の状況、さらにはそれに取り組む保育士たちの意識、外国人保護者の意識などは、同じとはいえないだろう。

外国人児童の比率によって異なる、保育の実態や、保育士の意識、それを受けとめる保護者の意識に着目し、さらにはその相互作用にも注目したい。それらをふまえて、①外国人が集住している町の保育の現状と、②その結果を比較し検討することを通して、外国人保育を取り巻く課題を明らかにしたいと考える。

(品川ひろみ)

## 第2節 大泉町における保育の概要

群馬県邑楽郡大泉町は、町内に三洋電機株式会社東京製作所を始めとする多くの工場を抱えている、群馬県でも有数の製造業の町である。町民の半数以上が製造業に従事しているということもあってか、14歳以下の年少人口も全国平均や群馬県と比較すると多く、「若い町」と言われてきた。しかし、表1-1からもわかるように近年になって年少人口は急激に減少している。1985年の大泉町の年少人口比率は23.0%であり、これは群馬県よりも0.9ポイント、全国からは1.5ポイントも高い水準であった。しかし、それが20年後の2005年には14.8%と8.2ポイントも低下、群馬県とほぼ同じ水準にまでなってしまう。実数でも、1985年に8,259人いた年少者は、20年後には6,157人と4分の3にまで減っている。

表1-1 大泉町の年少人口 単位：％、人

		1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
年少人口・比率	大泉町	23.0	19.9	17.8	16.4	14.8
	群馬県	22.1	18.7	16.5	15.3	14.4
	全国	21.5	18.2	16.0	14.6	13.7
年少人口・実数	大泉町	8,259	7,748	7,332	6,799	6,157
	比	1.00	0.94	0.89	0.82	0.75

資料：大泉町（2005）と平成17年国勢調査より作成。最下段は1985年を1とした時の実数比。

しかし、このような状況においても、大泉町の保育所はほぼ毎年、定員を満たしている。大泉町には6園の認可保育所があり、うち3園が公立、残り3園が私立である（表1-2）。定員は合わせて600人であり、調査時点では定員の約1.2倍にあたる709名の園児が在籍していた。なお、これでもまだ全体で24名の待機児童が存在している。

大泉町に初めてできた保育所は公立のA園であり1964年のことであった。以降、1968年に公立B園が、1971年には同じく公立のC園が設置されている。また、1973年には私立のD園が、1979年にはE園とF園が相次いで設置された。

現在では、6園全てが外国籍の園児を受け入れており、2005年12月の時点では全園児の12.1%にあたる86人の外国籍園児が入所していた。外国籍園児の国籍で最も多いのはブラジルで、51人と外

国籍園児全体の6割近くを占めている。次に多いのはペルーの27人（31.4%）で、この2カ国だけで90.7%に達する。

外国籍園児は、全ての園に均等に在籍しているわけではない。最も多いE園では、園児100人中、4分の1近い23人（23.0%）が外国籍であるのに対し、最も少ないF園では、園児106人中、外国籍の園児はわずか4人（3.8%）である。このような外国籍園児比率の差は、園の立地と関係している。外国籍園児の多いC園とE園のある地域は、三洋電機と富士重工業の工場から近く、大泉町内でも外国人住民が際立って多いことで知られている。また、同じく外国籍園児比率の高いD園は、C園やE園からは離れているものの、新興のアパートなどが多く、外国人居住率が近年高くなっている地域にある。それに対しA園やB園、F園は、大泉町でも古くから栄えてきた地域や農地の広がる地域に存在するため、外国人住民自体が周囲にあまりいないようである。

大泉町には、就学前の児童に教育・保育を行う施設として、6園の認可保育所のほか、6園の認可外保育所と5園の幼稚園が存在する。6園の認可外保育所のうち、4園は外国人対象の園である<sup>3)</sup>。また、5園の幼稚園では合わせて870人の園児を受け入れている。しかし、定員は5園で1,170人でありその充足率は74.4%と定員を大きく割り込んでいる。

表1-2 大泉町の保育所 単位：人、%

園	公私	設置	保育士	園児数	外国籍園児	外国籍園児の内訳	
						ブラジル人	ペルー人
A	公立	1964年	20	141	9( 6.4)	6(66.7)	2(22.2)
B	公立	1968年	22	158	8( 5.1)	6(75.0)	2(25.0)
C	公立	1971年	18	107	21(19.6)	15(71.4)	5(23.8)
D	私立	1973年	15	98	21(21.4)	12(57.1)	5(23.8)
E	私立	1979年	15	100	23(23.0)	11(47.8)	11(47.8)
F	私立	1979年	16	106	4( 3.8)	1(25.0)	2(50.0)
全体	—	—	106	710	86(12.1)	51(59.3)	27(31.4)

注：「外国籍園児」は「園児数」の内数で（ ）内は園児数に占める外国人園児の比率。  
「ブラジル人」「ペルー人」は「外国籍園児」の内数で（ ）内は全外国人園児に占める比率。

### 第3節 調査の概要

調査は、2005年12月に大泉町の認可保育所6園でおこなった。保育士全員、日本人父母全員、そしてブラジル人父母、ペルー人父母全員を対象とし、3種類の調査票を用いた（「保育士票」「日本人父母票」「外国人父母票」）。なお、外国人父母票はポルトガル語版とスペイン語版の2種類を用意した。

これらの調査票は、各保育所を通して保育士および父母へと配布した。調査票を受け取った保育士、父母は自宅へ持ち帰り1週間ほどで記入、再度保育所を通して回収した。それぞれの配布数、回収数並びに回収率は表1-3の通りである。回収率は対象者や園によってばらつきがある。保育士調査は、F園で回収率が68.8%とやや低いほかは概ね高く、全体でも84.9%の回収率をえた。日本人父母調査ではC園、D園、F園において回収率が低く、全体でも62.7%と3分の2を下回る回収率となった。ブラジル人父母調査はB園とF園において回収率100%を記録したもののC園とD園で低くなり、全体ではちょうど3分の2の回収率となった。ペルー人父母調査では全体的に回収は進まず、回収率は半数を切る48.1%であった。

なお、調査票を各園へ配布した際、園長に対して簡単な聞きとり調査を行っている。そこでは、各園の周辺地域の概況と外国人園児受け入れの実態、工夫などを聞いている。

表1-3 回収率

単位：人、%

	保育士		日本人父母		ブラジル人父母		ペルー人父母	
	配布	回収(回収率)	配布	回収(回収率)	配布	回収(回収率)	配布	回収(回収率)
A	20	18(90.0)	132	91(68.9)	6	4( 66.7)	2	0( 0.0)
B	22	20(90.9)	150	111(74.0)	6	6(100.0)	2	1( 50.0)
C	18	14(77.8)	86	48(55.8)	15	8( 53.3)	5	3( 60.0)
D	15	13(86.7)	77	44(57.1)	12	7( 58.3)	5	1( 20.0)
E	15	14(93.3)	77	60(77.9)	11	9( 81.8)	11	6( 64.5)
F	16	11(68.8)	102	37(36.3)	1	1(100.0)	2	2(100.0)
全体	106	90(84.9)	624	391(62.7)	51	34( 66.7)	27	13( 48.1)

(野崎剛毅)

## 注

- 1) 保育の場では、「子どもは世界中みな同じなのだから、文化的背景を異にする子どもがいても何も問題はない」「子どもの心は大人より柔軟だし、日本語もすぐに話せるようになる」というように、子どもの背景にある違いに目を向けることなく、差異を重視しない傾向がある。そのため、差異を認識することは、次のステップに進む重要なプロセスであるとの指摘がある。
- 2) ただし、最後に述べた異文化間トランスの問題では、問題を保育者の側だけの問題とするのではなく、影響を及ぼすものとして環境要因が重要であることにも言及しており、社会的な広がりを含んでいる。
- 3) 2001年11月に、認可保育所としての基準を満たしていない保育サービスに対しても市町村への届け出が義務づけられた。これらを認可外保育施設と呼んでいる。それ以前に大泉町には多くの外国人向け託児所が存在していた。大泉町の4園の外国人向け認可外保育所は、それら多くの外国人向け託児所のうち大泉町へ届け出を出したものを指すと考えられる。なお、それ以外に多数存在したブラジル人託児所が現在どのような形態になっているのかについては今回の調査では把握できていない。

## 参考文献

- J. ゴンザレスメーナ, 2004, (植田都・日浦直美共訳)『多文化共生社会の保育者』北大路書房。
- 高向山, 2005, 「「登園場面」における母親の行動特性の日中比較」『異文化間教育』21号。
- 新倉涼子, 2001, 「外国人子女の保育」2001『千葉大学教育実践研究』第8号。
- , 2002, 「外国籍児童や生徒の教育に関わる日本人保育士や教師の異文化間トランス」『異文化間教育』16号。
- 箕浦康子, 2004, 「多文化共生社会における保育の課題と展望」『保育学研究』第42巻第2号。
- 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子, 1998, 『外国人の子どもの保育』萌文書林。
- 佐藤千瀬, 2005, 「「外国人」の生成と位置付けのプロセス」『異文化間教育』21号。
- 大泉町, 2005, 『大泉町次世代育成支援行動計画 健やかにみんなの輪で育む大泉町』
- 塩野谷斉, 2004, 「浜松市における多文化保育」『浜松学院大学・浜松学院大学短期大学部研究論集』創刊号。
- 山本理絵・神田直子・中川美子, 1997, 「国際社会にふさわしい保育のあり方と課題」『愛知県立大学児童教育論集』31号。

## 第2章 保護者の基本属性

### 第1節 基本属性

はじめに、調査対象家庭の基本属性を確認しておこう。後の分析における基礎ともなる部分でもあるため、ここでは多少煩雑にはなるが保育所単位で集計を行うことにする。

本調査の対象者の子どもたちは、表2-1のように日本人の場合、男児212人、女児176人と男児の方が多くなっている。園ごとに比較してみても、比率の差こそあれ男児が若干多いという傾向に変わりはない。ブラジル人の場合は男児21人、女児12人と男児が多くなっている。逆に、ペルー人は男児5人、女児8人と女児の方が若干多い。年齢(図2-1~3)をみると、日本人とブラジル人は4歳児が多く、それに続いて日本人の場合は2歳児が、ブラジル人の場合は5歳児が多い構成となっている。ペルー人の場合はこれと異なり、2歳児が最も多くなっている。

表2-1 対象子の性別

単位：人、%

	日本人			ブラジル人			ペルー人		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計
A	46(50.5)	45(49.5)	91(100.0)	3(75.0)	1(25.0)	4(100.0)	-	-	-
B	62(55.9)	49(44.1)	111(100.0)	4(80.0)	1(20.0)	5(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
C	28(58.3)	20(41.7)	48(100.0)	4(57.1)	3(42.9)	7(100.0)	1(33.3)	2(66.7)	3(100.0)
D	23(54.8)	19(45.2)	42(100.0)	4(57.1)	3(42.9)	7(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
E	30(50.8)	29(49.2)	59(100.0)	6(66.7)	3(33.3)	9(100.0)	2(33.3)	4(66.7)	6(100.0)
F	23(62.2)	14(37.8)	37(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)	1(50.0)	2(100.0)	2(100.0)
計	212(54.6)	176(45.4)	388(100.0)	21(63.6)	12(36.4)	33(100.0)	5(38.5)	8(61.5)	13(100.0)

図2-1 対象子の年齢(日本人：N=390)

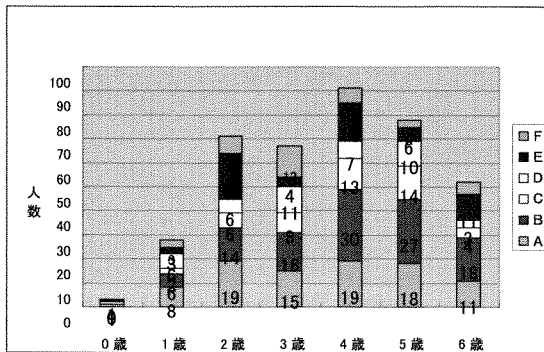


図2-2 対象子の年齢(ブラジル人：N=33)

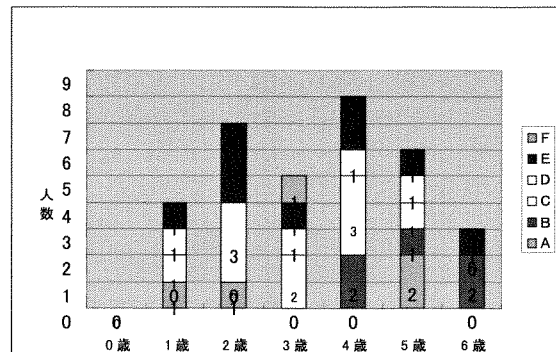
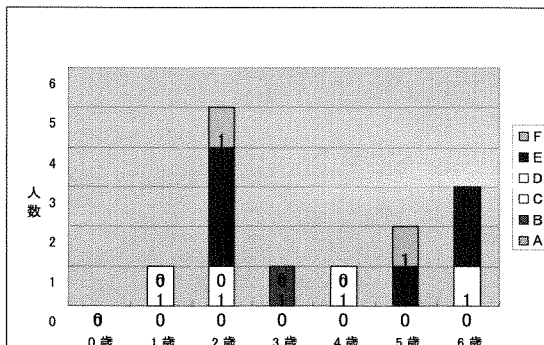


図2-3 対象子の年齢(ペルー人：N=13)



外国籍児童の基本属性についてより詳細に見ておこう。生まれた国を見てみると、表2-2にみられるように、ブラジル人では日本で生まれた子どもが25人（73.6%）と多くなっている。ペルー人も13人中8人が日本で生まれている。

なお、家で子どもとコミュニケーションを取る時は、ブラジル人、ペルー人も母語を使用する者が多い。日本語で話すことが多いという者はいずれも10%をきっており、ペルー人父親では1人もいない。逆に、日本語をほとんど使わず、「母語で話すことが多い」という者はブラジル人では父母ともに半数を超えている。ペルー人でも父親の41.7%（5人）、母親の45.5%（5人）は日本語を余り使っていないようである。これらが教育方針によるものなのか、父母の側の言語能力によるものなのかを断じることはデータの制約上できないが、帰国願望が一時期よりも弱いものとなっており（表2-21参照）、また進学先では日本の学校への進学志向が強いこと（表2-30参照）からも、この傾向は父母の日本語能力の低さを反映しているものといえるだろう。

表2-2 対象子の生まれた国 単位：人、%

	ブラジル人			ペルー人		
	ブラジル	日本	合計	ペルー	日本	合計
A	1(25.0)	3(75.0)	4(100.0)	-	-	-
B	1(20.0)	4(80.0)	5(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
C	3(37.5)	5(62.5)	8(100.0)	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)
D	1(14.3)	6(85.7)	7(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
E	3(33.3)	6(66.7)	9(100.0)	2(33.3)	4(66.7)	6(100.0)
F	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	2(100.0)	2(100.0)
合計	9(26.5)	25(73.5)	34(100.0)	5(38.5)	8(61.5)	13(100.0)

表2-3 家での使用言語（ブラジル人） 単位：人、%

	ブラジル人父親				ブラジル人母親			
	日本語で話すことが多い	ポルトガル語で話すことが多い	日本語とポルトガル語が同じくらい	合計	日本語で話すことが多い	ポルトガル語で話すことが多い	日本語とポルトガル語が同じくらい	合計
A	0(0.0)	4(100.0)	0(0.0)	4(100.0)	0(0.0)	3(75.0)	1(25.0)	4(100.0)
B	0(0.0)	2(50.0)	2(50.0)	4(100.0)	0(0.0)	2(40.0)	3(60.0)	5(100.0)
C	3(37.5)	2(25.0)	3(37.5)	8(100.0)	2(28.6)	3(42.9)	2(28.6)	7(100.0)
D	0(0.0)	3(42.9)	4(57.1)	7(100.0)	0(0.0)	3(42.9)	4(57.1)	7(100.0)
E	0(0.0)	4(57.1)	3(42.9)	7(100.0)	0(0.0)	7(77.8)	2(22.2)	9(100.0)
F	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
合計	3(9.7)	16(51.6)	12(38.7)	31(100.0)	2(6.1)	19(57.6)	12(36.4)	33(100.0)

表2-4 家での使用言語（ペルー人） 単位：人、%

	ペルー人父親				ペルー人母親			
	日本語で話すことが多い	スペイン語で話すことが多い	日本語とスペイン語が同じくらい	合計	日本語で話すことが多い	スペイン語で話すことが多い	日本語とスペイン語が同じくらい	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-
B	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
C	0(0.0)	2(100.0)	0(0.0)	2(100.0)	0(0.0)	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)
D	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
E	0(0.0)	1(16.7)	5(83.3)	6(100.0)	0(0.0)	1(25.0)	3(75.0)	4(100.0)
F	0(0.0)	1(50.0)	1(50.0)	2(100.0)	0(0.0)	2(100.0)	0(0.0)	2(100.0)
合計	0(0.0)	5(41.7)	7(58.3)	12(100.0)	1(9.1)	5(45.5)	5(45.5)	11(100.0)

家族数は日本人よりもブラジル人、ペルー人のほうが多い傾向が見られる（表2-5）。日本人の平均家族数は4.16人である。最も少ないのは2人（15家族）であり、最も多いのは9人（2家族）であった。形態としては4人家族が全体の44.8%（175家族）と全体の半数近くになっている。ブラジル人の平均家族数は4.58人で、最も少ないのは2人（1家族）、最も多いのは9人（2家族）である。日本人家族と同様、4人家族が最も多く36.4%にあたる12家族となっている。ペルー人は、平均家族数が5.15人と、日本人家族よりもおよそ1人、多くなっている。13家族のうち11家族までが2人家族から6人家族の間に入るが、2家族が11人という大所帯となっている。

表2-5 同居家族数の平均 単位：人

	日本人	ブラジル人	ペルー人
A	4.34	5.00	-
B	4.43	3.80	4.00
C	4.13	4.25	8.00
D	3.75	3.67	5.00
E	3.90	5.67	4.50
F	3.86	5.00	3.50
全体	4.16	4.58	5.15

## 第2節 保育所の利用状況

現在の保育所を利用し始めた時期は、日本人の場合、最近になればなるほど度数は多くなっており、2005年から、つまり調査当時で保育所利用歴1年未満の家庭が20.2%と最も多い（表2-6）。ただ、2003年だけは19.7%と翌年よりも人数が多くなっている。延長保育を利用していないのは全体の4分の1ほどである27.1%（106家族）に過ぎず（表2-7）、半数以上の家庭は週に5日以上利用している。また、40.4%にあたる158家族は週当たりの延長保育時間が7時間を超えており（表2-8）、延長保育が大泉町の家族にとってなくてはならない制度となっていることがうかがえる。

外国籍家庭の場合、表2-9のように利用歴が1年に満たないケースが日系ブラジル人家庭で58.8%（10家族）、ペルー人家庭でも40.0%（4家族）と圧倒的に多くなっている。また、日系ブラジル人家庭の半数（17家族）、ペルー人家庭の41.7%（5家族）は、現在の保育所の前にブラジル人託児所を利用していた経験をもっている（表2-10）。

延長保育に関しては、外国籍家庭においては日本人家庭ほど利用されておらず、ブラジル人家庭では45.0%、ペルー人家庭においては実に83.3%（5家族）が延長保育を全く利用していない（表2-11、12）。また、利用しているとしても、その利用時間は日本人家庭と比べて少なく、7時間以上という家庭も1家族しかない。

表2-6 保育所入所（日本人）

	度数	パーセント
2000年	29	7.4
2001年	33	8.4
2002年	54	13.8
2003年	77	19.7
2004年	68	17.4
2005年	79	20.2
無回答	51	13.0
合計	391	100.0

表2-7 延長保育回数（日本人）

	度数	パーセント
なし	106	27.1
1日	10	2.6
2日	5	1.3
3日	18	4.6
4日	16	4.1
5日	210	53.7
6日	3	0.8
無回答	23	5.9
合計	391	100.0

表2-8 延長保育時間（日本人）

	度数	パーセント
なし	106	27.1
～1時間	7	1.8
～2時間	14	3.6
～3時間	16	4.1
～4時間	4	1.0
～5時間	32	8.2
～6時間	8	2.0
～7時間	8	2.0
7時間～	158	40.4
無回答	38	9.7
合計	391	100.0

表2-9 この保育所にいつから預けていますか

単位：人、%

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	合計
ブラジル人	0(0.0)	1(5.9)	1(5.9)	0(0.0)	5(29.4)	10(58.8)	17(100.0)
ペルー人	2(20.0)	1(10.0)	1(10.0)	0(0.0)	2(20.0)	4(40.0)	10(100.0)

表2-10 この保育所の前はどこに預けていましたか 単位：人、%

	ブラジル人 託児所	日本の別の 保育所	そ の 他	通わせてい ない	合 計
ブラジル人	0(0.0)	1(5.9)	1(5.9)	0(0.0)	17(100.0)
ペルー人	2(20.0)	1(10.0)	1(10.0)	0(0.0)	10(100.0)

表2-11 延長保育を週に何日利用していますか 単位：人、%

	利用してい ない	4 日	5 日	6 日	合 計
ブラジル人	9(45.0)	1(5.0)	9(45.0)	1(5.0)	20(100.0)
ペルー人	5(83.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(16.7)	6(100.0)

表2-12 延長保育を週に何時間利用していますか

単位：人、%

	利用してい ない	～ 3 時間	～ 4 時間	～ 5 時間	7 時間～	合 計
ブラジル人	9(56.3)	2(12.5)	1(6.3)	3(18.8)	1(6.3)	16(100.0)
ペルー人	5(83.3)	1(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(100.0)

### 第3節 来日時期と在大泉歴

ブラジル人の父母たちの多くは、初めて来日してから既に10年以上になる（表2-13）。初めて日本に来た時期で最も多いのは、入国管理法が改正された直後である14年前で、父親6人（20.0%）、母親5人（15.2%）がこの時期に日本へ来ている。ペルー人父母は、平均をとると父親が8.50年、母親が6.79年とブラジル人父母よりも3年から4年ほど来日時期が遅れている。ただし、初来日が6～9年前という者は少なく、14～15年前（父親4人、母親1人）と4～5年前（父親5人、母親4人）を2つのピークとするフタコブになっている（来日時期の詳細な表は省略）。

そんな外国人父母たちは、初来日してから3年ほどで大泉町に来ているようである（表2-14）。ブラジル人父母の大泉在住年数は平均で8.60年と7.89年、ペルー人父母の場合は5.50年、5.54年である。

一方で、日本人父母に目を向けてみると平均在住年数は父親が19.30年、母親が16.07年である。だが、これも先のペルー人父母の来日時期と同様に、2つのピークを持つフタコブ型の分布となっている。1つのピークは25～39年ほどの間であり、大泉町で生まれ育った者を中心としていると考えられる。父親の102人（29.6%）、母親の101人（26.7%）がこの期間に含まれる。もう1つのピークは0～14年の間であり、就職や結婚などによって大泉町に移り住んできた者たちと考えられる。父親の178人（51.6%）、母親の221人（58.5%）がこの期間である。

このように、最近になってからの移住者が多い調査対象者ではあるが、大泉町への愛着は強いようであり、表2-15からわかるように父親の62.9%（212人）、母親も57.4%（217人）はこれからも大泉町に住み続けたいと考えている。また、別の場所に移りたい、あるいは移らなければいけないと考える者は父親で39人（11.5%）、母親で57人（15.1%）だけである。なお、その理由を見てみると、

表2-16からわかるように最も多いのは父母ともに「土地や家屋があるから」（父親50.5%、母親40.9%）であるが、2番目は「生活環境がよいから」（父親19.1%、母親22.0%）であり、多くが大泉町での生活に満足している様子がうかがえる。

表2-13 初来日 単位：年前

	ブラジル人		ペルー人	
	父親	母親	父親	母親
A	12.25	11.50	-	-
B	13.25	11.40	15.00	12.00
C	12.43	11.50	2.50	1.50
D	9.67	10.00	15.00	15.00
E	11.13	8.38	8.17	7.00
F	14.00	14.00	9.00	7.50
全体	11.67	10.48	8.50	6.79

表2-14 大泉町の平均在住年数 単位：年

	日本人		ブラジル人		ペルー人	
	父親	母親	父親	母親	父親	母親
A	21.06	14.96	10.50	10.50	-	-
B	19.14	18.72	8.50	8.40	8.00	8.00
C	19.30	14.13	11.20	8.83	0.75	1.17
D	16.26	15.89	7.25	7.75	-	6.00
E	20.51	13.87	7.43	6.14	6.17	6.80
F	17.56	16.39	2.00	2.00	7.00	7.50
全体	19.30	16.07	8.60	7.89	5.50	5.54

表2-15 大泉に住み続けたいですか(日本人父親) 単位：人、%

	住みたいと思う	別の場所に 移りたい	必ず別の場 所に移らな ければなら ない	わからない	合計
A	58(72.5)	4(5.0)	0(0.0)	18(22.5)	80(100.0)
B	66(66.0)	5(5.0)	3(3.0)	26(26.0)	100(100.0)
C	19(46.3)	4(9.8)	4(9.8)	14(34.1)	41(100.0)
D	24(68.6)	1(2.9)	7(20.0)	3(8.6)	35(100.0)
E	27(54.0)	5(10.0)	4(8.0)	14(28.0)	50(100.0)
F	18(58.1)	0(0.0)	2(6.5)	11(35.5)	31(100.0)
全体	212(62.9)	19(5.6)	20(5.9)	86(25.5)	337(100.0)

表2-16 大泉に住み続けたいですか(日本人母親) 単位：人、%

	住みたいと思う	別の場所に 移りたい	必ず別の場 所に移らな ければなら ない	わからない	合計
A	57(64.0)	8(9.0)	0(0.0)	24(27.0)	89(100.0)
B	74(69.2)	7(6.5)	3(2.8)	23(21.5)	107(100.0)
C	14(30.4)	6(13.0)	6(13.0)	20(43.5)	46(100.0)
D	25(58.1)	5(11.6)	7(16.3)	6(14.0)	43(100.0)
E	25(43.1)	9(15.5)	4(6.9)	20(34.5)	58(100.0)
F	22(62.9)	1(2.9)	1(2.9)	11(31.4)	35(100.0)
全体	217(57.4)	36(9.5)	21(5.6)	104(27.5)	378(100.0)

ブラジル人、ペルー人父母においても、定住志向の高さは変わらず、ブラジル人父親の75.9%、母親の82.4%（表2-18）、ペルー人も父親で81.8%、母親では100.0%（表2-19）が、今後も大泉町に住みたいと考えている。表2-20からわかるように、その理由では、外国人にとっての生活のしやすさを挙げる者が多く、また、ブラジル人では、同じブラジル人が多く住んでいることもまた、大

きな理由となっているようである。マイナス面を挙げる者はほとんどいない。しかし、外国人にとって働きやすい町であるという者は余りおらず、生活面での満足度の高さに比して、労働面での満足度はさほど高くないこともまたうかがえる。

なお、ブラジル人、ペルー人に関しては、大泉町に住み続けるかどうかということ以前に、日本に住み続けるか、または母国に帰るのかという大きな問題が存在している。この点についてみると、表2-21にあるようにブラジル人父母については、母国の経済状態が改善したら（父親29.6%、母親32.3%）、あるいはお金が貯まったら（父親29.6%、母親35.5%）帰国したいと考える者が多くなっている。しかし、その一方で日本に残りたいと考える者もまた、2割前後ではあるが現れ始めている。2001年に行った調査では「とにかく日本に残りたい」と答えるものは父親で12人中1人（8.3%）、母親では18人中1人（5.6%）に過ぎなかった。それに対し、本調査では父親で27人中4人（14.8%）、母親で31人中4人（12.9%）と増えている<sup>1)</sup>。ペルー人父母に関してはブラジル人父母と異なり、「とにかく日本に残りたいと思っている」が父親で45.5%（5人）、母親では60.0%（6人）と最も多くなっている。

表2-17 大泉町に住み続けたい・住み続けたくない理由（日本人父母）

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
生活環境がよいから	57	14.6	74	18.9
人間環境がよいから	17	4.3	25	6.4
親の面倒をみるため	49	12.5	59	15.1
土地や家屋があるから	151	38.6	138	35.3
移るためのよい場所がない	17	4.3	23	5.9
別の場所に土地や家があるから	19	4.9	21	5.4
生活環境が悪いから	11	2.8	15	3.8
人間環境が悪いから	1	0.3	2	0.5
転勤があるから	4	1.0	7	1.8
よい職場がないから	2	0.5	1	0.3
外国人が多いから	14	3.6	11	2.8
その他	30	7.7	52	13.3
無回答など	92	23.5	54	13.8
合 計	391	100.0	391	100.0

表2-18 大泉に住み続けたいですか

単位：人、%

	ブラジル人父親					ブラジル人母親				
	住みたいと思う	別の場所に 移りたい	必ず移らな ければなら ない	わからない	合 計	住みたいと 思う	別の場所に 移りたい	必ず移らな ければなら ない	わからない	合 計
A	3( 75.0)	1(25.0)	0(0.0)	0( 0.0)	4(100.0)	3( 75.0)	1(25.0)	0(0.0)	0( 0.0)	4(100.0)
B	1( 25.0)	2(50.0)	0(0.0)	1(25.0)	4(100.0)	3( 60.0)	1(20.0)	0(0.0)	1(20.0)	5(100.0)
C	7(100.0)	0( 0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	7(100.0)	8(100.0)	0( 0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	8(100.0)
D	4( 66.7)	0( 0.0)	0(0.0)	2(33.3)	6(100.0)	5( 71.4)	1(14.3)	0(0.0)	1(14.3)	7(100.0)
E	6( 85.7)	0( 0.0)	0(0.0)	1(14.3)	7(100.0)	8( 88.9)	0( 0.0)	0(0.0)	1(11.1)	9(100.0)
F	1(100.0)	0( 0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
計	22( 75.9)	3(10.3)	0(0.0)	4(13.8)	29(100.0)	28( 82.4)	3( 8.8)	0(0.0)	3( 8.8)	34(100.0)

表2-19 大泉に住み続けたいですか

単位：人、%

	ペルー人父親					ペルー人母親				
	住みたいと思う	別の場所に 移りたい	必ず移らなければなら ない	わからない	合計	住みたいと思う	別の場所に 移りたい	必ず移らなければなら ない	わからない	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	-	-	-	-	-
C	1(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)	2(100.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
D	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
E	5(83.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(16.7)	6(100.0)	5(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(100.0)
F	2(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)	2(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)
計	9(81.8)	0(0.0)	0(0.0)	2(18.2)	11(100.0)	10(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	10(100.0)

表2-20 大泉町に住み続けたい・住み続けたくない理由（外国人父母）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
外国人にとって働きやすい町だから	3	12.0	4	12.9	1	12.5	2	22.2
外国人にとって生活しやすい町だから	10	40.0	17	54.8	7	87.5	7	77.8
日系人が多く情報をえやすいから	11	44.0	13	41.9	1	12.5	1	11.1
日本人が外国人に親切だから	3	12.0	3	9.7	3	37.5	3	33.3
家を建てたから	2	8.0	3	9.7	2	25.0	2	22.2
外国人にとって働きにくい町だから	1	4.0	2	6.5	0	0.0	0	0.0
外国人にとって生活しにくい町だから	2	8.0	1	3.2	0	0.0	0	0.0
日本人が外国人に親切でないから	1	4.0	1	3.2	0	0.0	0	0.0
その他	5	20.0	5	16.1	1	12.5	1	11.1
合計	25	100.0	31	100.0	8	100.0	9	100.0

表2-21-1 日本にとどまりたいと思いますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
何があってもとにかく帰国	2	7.4	3	9.7	1	9.1	1	10.0
母国の経済状況が改善したら帰国	8	29.6	10	32.3	3	27.3	1	10.0
母国の治安が安定したら帰国	4	14.8	7	22.6	1	9.1	0	0.0
お金が貯まったら帰国	8	29.6	11	35.5	3	27.3	2	20.0
高齢になったら帰国	6	22.2	5	16.1	1	9.1	0	0.0
とにかく日本に残りたい	4	14.8	4	12.9	5	45.5	6	60.0
よい仕事があったら残りたい	5	18.5	7	22.6	2	18.2	0	0.0
家族を連れて来られたら残りたい	2	7.4	3	9.7	0	0.0	0	0.0
日本の習慣に慣れたら残りたい	2	7.4	2	6.5	0	0.0	1	10.0
その他	1	3.7	0	0.0	1	9.1	1	10.0
合計	27	100.0	31	100.0	11	100.0	10	100.0

表2-21-2 参考：日本にとどまりたいと思いますか（2001年調査）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
何があってもとにかく帰国	3	25.0	6	33.3
母国の経済状況が改善したら帰国	7	58.3	9	50.0
母国の治安が安定したら帰国	4	33.3	5	27.8
お金が貯まったら帰国	7	58.3	10	55.6
高齢になったら帰国	1	8.3	1	5.6
とにかく日本に残りたい	1	8.3	1	5.6
よい仕事があったら残りたい	2	16.7	2	11.1
家族を連れて来られたら残りたい	0	0.0	1	5.6
日本の習慣に慣れたら残りたい	2	16.7	1	5.6
その他	0	0.0	1	5.6
合計	12	100.0	18	100.0

#### 第4節 調査対象家庭の社会階層

調査対象家庭の社会階層をみてみると、まず学歴は、日本人に関しては父母とも約半数（父親49.0%、母親45.7%）が高校卒である（表2-22）。父親は大学卒が26.4%（91人）で2番目に多くなっている。母親は専門学校卒が20.5%（78人）と多いのが特徴的であり、ついで短大卒が17.8%で続いている。大学卒は36人（9.4%）と1割に満たない。次に職業をみてみると、父親では生産工程にかかわる職業が124人（36.6%）と際立って多くなっている（表2-23）。母親の場合では、事務職が85人（22.4%）とやや多くなっているほかは、特に多い職業というのは存在しないようである。

外国人家庭の場合はどうであろうか。ブラジル人父母の最終学歴は、父親の40.7%（11人）、母親の45.5%（15人）が高校卒となっている（表2-24）。次いで、父親では専門学校卒が29.6%（8人）となっており、大学卒は11.1%（3人）であった。母親では大学卒が30.3%（10人）と多くなっている。ブラジル時代の職業は実に多様であり、特に多いものは存在しない（表2-25）。それに対し、現在は父親の77.8%（21人）、母親の75.0%（24人）が工員である（表2-26）。

ペルー人父母の場合、学歴水準は最も高くなっており、父母ともに半数（6人）は大学卒である（表2-24）。ペルーでの職業は多様であるが（表2-27）、現在の職業はブラジル人同様、工員が圧倒的に多く、父親の実に90.9%（10人）、母親でも87.5%（7人）となっている（表2-28）。

子どもに対する教育期待は表2-29からわかるように日本人と比較してブラジル人父母、ペルー人父母の方が遥かに高くなっている。まず、日本人の教育期待を見てみると大学までという者が父親で56.7%（187人）、母親で53.8%（204人）と最も多く、次に父親では「高校まで」（17.3%）が、母親では「専門学校まで」（16.4%）が多くなっている。「大学院まで」を挙げる者は父親の3.6%（12人）、母親の1.6%（6人）と、「短大まで」よりも少ない。それに対し、ブラジル人父母では、「大学まで」という者は父親の56.7%（17人）、母親の51.5%（17人）で日本人と大差はないが、それについて「大学院まで」とする者が父母ともに33.3%（父親10人、母親11人）もおり、結果としては8割から9割の親が、大学以上の学歴を子どもに期待している。この傾向はペルー人父母も同様であり、父親は全員が大学以上の学歴（「大学まで」54.5%、「大学院まで」45.5%）を子どもに期待し、母親でも「大学まで」が45.5%（5人）、「大学院まで」が36.4%（4人）と多くなっている。

では、このような高い学歴を目指す彼らは、どの国での進学を考えているのであろうか。保育所を出た後、どこの学校へ進学させたいかを聞くと、ブラジル人父母もペルー人父母も、日本の公立小学校を挙げる者が圧倒的に多かった（表2-30）。理由としては、日本の文化を身につけられるから（ブラジル人父48.1%母35.5%、ペルー人父54.5%母40.0%）や、日本語を身につけられるから（ブラジル人父40.7%母41.9%、ペルー人父45.5%母30.0%）のように、今後日本で暮らして行く上での基礎を付けたいという理由が強くなっている（表2-31）。日本に定住したいからと断言する者もブラジル人父母で3割～4割、ペルー人では父親54.5%（6人）、母親70.0%（7人）と多い。また、ペルー人父母では「進学に有利だから」という、高い教育期待を実現させるための理由も父親で54.5%（6人）、母親で50.0%（5人）と多く挙げられていた。反面、日本人の友だちができるからという、学校を通しての日本人との交流を目指す理由は3割弱しか選ばれておらず、また、学費の問題を挙げる親も少なかった。

表2-22-1 学歴（日本人父親）

	中 学 校	高 校	専 門 学 校	短 大	大 学	大 学 院	そ の 他	合 計
A	2( 2.5)	39(48.1)	18(22.2)	3(3.7)	17(21.0)	2(2.5)	0(0.0)	81(100.0)
B	5( 5.0)	46(46.0)	15(15.0)	2(2.0)	32(32.0)	0(0.0)	0(0.0)	100(100.0)
C	2( 5.0)	18(45.0)	9(22.5)	0(0.0)	10(25.0)	0(0.0)	1(2.5)	40(100.0)
D	4( 9.8)	24(58.5)	2( 4.9)	0(0.0)	11(26.8)	0(0.0)	0(0.0)	41(100.0)
E	3( 5.8)	28(53.8)	3( 5.8)	3(5.8)	12(23.1)	2(3.8)	1(1.9)	52(100.0)
F	4(12.9)	14(45.2)	1( 3.2)	2(6.5)	9(29.0)	0(0.0)	1(3.2)	31(100.0)
合計	20( 5.8)	169(49.0)	48(13.9)	10(2.9)	91(26.4)	4(1.2)	3(0.9)	345(100.0)

表2-22-2 学歴（日本人母親）

	中 学 校	高 校	専 門 学 校	短 大	大 学	大 学 院	そ の 他	合 計
A	3(3.3)	46(51.1)	16(17.8)	15(16.7)	10(11.1)	0(0.0)	0(0.0)	90(100.0)
B	7(6.5)	46(43.0)	22(20.6)	19(17.8)	13(12.1)	0(0.0)	0(0.0)	107(100.0)
C	2(4.3)	25(54.3)	9(19.6)	7(15.2)	2( 4.3)	0(0.0)	1(2.2)	46(100.0)
D	4(9.1)	19(43.2)	8(18.2)	8(18.2)	3( 6.8)	1(2.3)	1(2.3)	44(100.0)
E	4(6.8)	24(40.7)	12(20.3)	14(23.7)	4( 6.8)	1(1.7)	0(0.0)	59(100.0)
F	1(2.9)	14(40.0)	11(31.4)	5(14.3)	4(11.4)	0(0.0)	0(0.0)	35(100.0)
合計	21(5.5)	174(45.7)	78(20.5)	68(17.8)	36( 9.4)	2(0.5)	2(0.5)	381(100.0)

表2-23-1 職業（日本人父親）

	事 務 職	保 安 職	販 売 職	生 産	運 輸 ・ 通 信 職	専 門 ・ 技 術 職	管 理 的 業 職	サ ー ビ ス	無 職（専 業主 夫）	そ の 他	合 計
A	14 17.7%	0 0.0%	1 1.3%	33 41.8%	5 6.3%	2 2.5%	13 16.5%	1 1.3%	0 0.0%	10 12.7%	79 100.0%
B	12 12.4%	1 1.0%	11 11.3%	24 24.7%	6 6.2%	4 4.1%	27 27.8%	1 1.0%	0 0.0%	11 11.3%	97 100.0%
C	5 12.8%	0 0.0%	1 2.6%	19 48.7%	1 2.6%	1 2.6%	8 20.5%	0 0.0%	0 0.0%	4 10.3%	39 100.0%
D	4 9.8%	0 0.0%	2 4.9%	19 46.3%	3 7.3%	1 2.4%	7 17.1%	1 2.4%	0 0.0%	4 9.8%	41 100.0%
E	10 19.2%	0 0.0%	0 0.0%	19 36.5%	1 1.9%	0 0.0%	17 32.7%	0 0.0%	0 0.0%	5 9.6%	52 100.0%
F	6 19.4%	1 3.2%	3 9.7%	10 32.3%	0 0.0%	0 0.0%	4 12.9%	2 6.5%	1 3.2%	4 12.9%	31 100.0%
合計	51 15.0%	2 0.6%	18 5.3%	124 36.6%	16 4.7%	8 2.4%	76 22.4%	5 1.5%	1 0.3%	38 11.2%	339 100.0%

表2-23-2 職業（日本人母親）

	事 務 職	保 安 職	販 売 職	生 産	運 輸 ・ 通 信 職	専 門 ・ 技 術 職	管 理 的 業 職	サ ー ビ ス	無 職（専 業主 婦）	そ の 他	合 計
A	18 20.0%	0 0.0%	1 1.1%	15 16.7%	0 0.0%	10 11.1%	4 4.4%	2 2.2%	4 4.4%	36 40.0%	90 100.0%
B	17 16.2%	0 0.0%	4 3.8%	6 5.7%	1 1.0%	14 13.3%	4 3.8%	0 0.0%	14 13.3%	45 42.9%	105 100.0%
C	11 23.4%	0 0.0%	2 4.3%	7 14.9%	0 0.0%	2 4.3%	2 4.3%	0 0.0%	4 8.5%	19 40.4%	47 100.0%
D	12 27.3%	0 0.0%	1 2.3%	5 11.4%	0 0.0%	8 18.2%	2 4.5%	1 2.3%	5 11.4%	10 22.7%	44 100.0%
E	16 27.1%	0 0.0%	3 5.1%	10 16.9%	0 0.0%	4 6.8%	7 11.9%	0 0.0%	2 3.4%	17 28.8%	59 100.0%
F	11 31.4%	0 0.0%	0 0.0%	3 8.6%	0 0.0%	7 20.0%	2 5.7%	1 2.9%	0 0.0%	11 31.4%	35 100.0%
合計	85 22.4%	0 0.0%	11 2.9%	46 12.1%	1 0.3%	45 11.8%	21 5.5%	4 1.1%	29 7.6%	138 36.3%	380 100.0%

表2-24-1 学歴（ブラジル人父親）

単位：人、%

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	合計
A	0(0.0)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	3(100.0)
B	0(0.0)	0(0.0)	2(50.0)	1(25.0)	0(0.0)	1(25.0)	4(100.0)
C	1(16.7)	4(66.7)	1(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(100.0)
D	1(16.7)	2(33.3)	2(33.3)	0(0.0)	1(16.7)	0(0.0)	6(100.0)
E	0(0.0)	4(57.1)	2(26.6)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)	7(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
合計	2(7.4)	11(40.7)	8(29.6)	2(7.4)	3(11.1)	1(3.7)	27(100.0)

表2-24-2 学歴（ブラジル人母親）

単位：人、%

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	合計
A	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	3(100.0)
B	0(0.0)	2(40.0)	1(20.0)	1(20.0)	1(20.0)	0(0.0)	5(100.0)
C	1(12.5)	5(62.5)	1(12.5)	0(0.0)	1(12.5)	0(0.0)	8(100.0)
D	1(14.3)	4(57.1)	0(0.0)	0(0.0)	2(28.6)	0(0.0)	7(100.0)
E	0(0.0)	3(33.3)	1(11.1)	1(11.1)	4(44.4)	0(0.0)	9(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
合計	3(9.1)	15(45.5)	3(9.1)	2(6.1)	10(30.3)	0(0.0)	33(100.0)

表2-24-3 学歴（ペルー人父親）

単位：人、%

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	合計
A	-	-	-	-	-	-	-
B	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
C	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)
D	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
E	0(0.0)	0(0.0)	2(33.3)	0(0.0)	4(66.7)	0(0.0)	6(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(100.0)	0(0.0)	2(100.0)
合計	1(8.3)	1(8.3)	4(33.3)	0(0.0)	6(50.0)	0(0.0)	12(100.0)

表2-24-4 学歴（ペルー人母親）

単位：人、%

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	合計
A	-	-	-	-	-	-	-
B	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
C	0(0.0)	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
D	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
E	0(0.0)	1(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(80.0)	0(0.0)	5(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)
合計	0(0.0)	3(25.0)	3(25.0)	0(0.0)	6(50.0)	0(0.0)	12(100.0)

表2-25-1 ブラジルでの職業（ブラジル人父親）

	公務員	教員	事務・ 営業	工場労働 者	銀行員	看護師	研究職	店員・ 販売員	自営業	主夫	学生・ 生徒	その他	合計
A	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3
	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	66.7%	100.0%
B	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4
	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%	100.0%
C	2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	2	0	7
	28.6%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	14.3%	28.6%	0.0%	100.0%
D	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
E	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	3	1	7
	0.0%	0.0%	14.3%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	42.9%	14.3%	100.0%
F	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	4	0	5	3	0	0	0	0	4	1	5	5	27
	14.8%	0.0%	18.5%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.8%	3.7%	18.5%	18.5%	100.0%

表2-25-2 ブラジルでの職業（ブラジル人母親）

	公務員	教員	事務・ 営業	工場労働 者	銀行員	看護師	研究職	店員・ 販売員	自営業	主婦	学生・ 生徒	その他	合計
A	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	100.0%
B	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	5
	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	40.0%	0.0%	100.0%
C	0	0	2	1	0	0	1	0	1	1	2	0	8
	0.0%	0.0%	25.0%	12.5%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	12.5%	12.5%	25.0%	0.0%	100.0%
D	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	1	0	5
	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	20.0%	0.0%	100.0%
E	0	2	1	0	0	1	0	1	0	0	3	1	9
	0.0%	22.2%	11.1%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	33.3%	11.1%	100.0%
F	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	0	4	6	1	0	1	1	2	2	5	8	1	31
	0.0%	12.9%	19.4%	3.2%	0.0%	3.2%	3.2%	6.5%	6.5%	16.1%	25.8%	3.2%	100.0%

表2-26-1 現在の職業（ブラジル人父親）

	建築・土 木作業員	工員	販売員	事務員	運送・ 荷役	エンジニア	通訳・ 翻訳	無職 (主夫)	その他	合計
A	0	2	0	0	0	0	0	0	1	3
	0.0%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	100.0%
B	0	3	0	1	0	0	0	0	0	4
	0.0%	75.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
C	1	3	0	0	1	1	1	0	0	7
	14.3%	42.9%	0.0%	0.0%	14.3%	14.3%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%
D	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
E	0	7	0	0	0	0	0	0	0	7
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
F	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	1	21	0	1	1	1	1	0	1	27
	3.7%	77.8%	0.0%	3.7%	3.7%	3.7%	3.7%	0.0%	3.7%	100.0%

表2-26-2 現在の職業（ブラジル人母親）

	建築・土 木作業員	工員	販売員	事務員	運送・ 荷役	エンジニア	通訳・ 翻訳	無職 (主婦)	その他	合計
A	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
B	0	4	0	0	0	0	0	0	1	5
	0.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	100.0%
C	0	6	1	1	0	0	0	0	0	8
	0.0%	75.0%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
D	0	3	0	1	0	0	0	2	0	6
	0.0%	50.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	100.0%
E	0	7	1	0	0	0	0	1	0	9
	0.0%	77.8%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	100.0%
F	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	0	24	2	2	0	0	0	3	1	32
	0.0%	75.0%	6.3%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	9.4%	3.1%	100.0%

2-27-1 ペルーでの職業（ペルー人父親）

	公務員	教員	事務・営業	工場労働者	銀行員	看護師	研究職	店員・販売員	自営業	主夫	学生	その他	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
C	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
D	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
E	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
F	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	2	0	4	0	0	0	0	1	3	0	0	0	10
	20.0%	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	30.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

表2-27-2 ペルーでの職業（ペルー人母親）

	公務員	教員	事務・営業	工場労働者	銀行員	看護師	研究職	店員・販売員	自営業	主婦	学生	その他	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	3
D	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
E	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	1	5
F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	1	0	2	0	1	1	0	0	0	3	0	1	9
	11.1%	0.0%	22.2%	0.0%	11.1%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	11.1%	100.0%

表2-28-1 現在の職業（ペルー人父親）

	建築・土木作業員	工員	販売員	事務員	運送・荷役	エンジニア	通訳・翻訳	無職（主夫）	その他	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
C	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
D	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
E	0	5	0	0	0	0	0	0	1	6
F	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	0	10	0	0	0	0	0	0	1	11
	0.0%	90.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	100.0%

表2-28-2 現在の職業（ペルー人母親）

	建築・土木作業員	工員	販売員	事務員	運送・荷役	エンジニア	通訳・翻訳	無職（主婦）	その他	合計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
D	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
E	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
F	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	0	7	0	0	0	0	1	0	0	8
	0.0%	87.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	100.0%

表2-29-1 教育期待（日本人父親）

	中学校	高校	専門学校	短大	大 学	大学院	その他	合計
A	0(0.0)	16(21.3)	7( 9.3)	6( 8.0)	41(54.7)	3(4.0)	2( 2.7)	75(100.0)
B	0(0.0)	18(18.6)	10(10.3)	5( 5.2)	53(54.6)	6(6.2)	5( 5.2)	97(100.0)
C	0(0.0)	5(12.5)	6(15.0)	3( 7.5)	24(60.0)	1(2.5)	1( 2.5)	40(100.0)
D	1(2.6)	5(12.8)	7(17.9)	4(10.3)	20(51.3)	0(0.0)	2( 5.1)	39(100.0)
E	0(0.0)	9(18.8)	4( 8.3)	2( 4.2)	26(54.2)	1(2.1)	6(12.5)	48(100.0)
F	0(0.0)	4(12.9)	2( 6.5)	1( 3.2)	23(74.2)	1(3.2)	0( 0.0)	31(100.0)
合計	1(0.3)	57(17.3)	36(10.9)	21( 6.4)	187(56.7)	12(3.6)	16( 4.8)	330(100.0)

表2-29-2 教育期待（日本人母親）

	中学校	高校	専門学校	短大	大 学	大学院	その他	合計
A	0(0.0)	14(15.7)	17(19.1)	9(10.1)	46(51.7)	2(2.2)	1( 1.1)	89(100.0)
B	0(0.0)	13(12.4)	14(13.3)	6( 5.7)	64(61.0)	1(1.0)	7( 6.7)	105(100.0)
C	0(0.0)	7(14.9)	9(19.1)	5(10.6)	25(53.2)	0(0.0)	1( 2.1)	47(100.0)
D	1(2.3)	7(15.9)	11(25.0)	5(11.4)	19(43.2)	0(0.0)	1( 2.3)	44(100.0)
E	0(0.0)	12(20.3)	8(13.6)	5( 8.5)	25(42.4)	3(5.1)	6(10.2)	59(100.0)
F	0(0.0)	4(11.4)	3( 8.6)	2( 5.7)	25(71.4)	0(0.0)	1( 2.9)	35(100.0)
合計	1(0.3)	57(15.0)	62(16.4)	32( 8.4)	204(53.8)	6(1.6)	17( 4.5)	379(100.0)

表2-29-3 教育期待（ブラジル人父親）

	中学校	高校	専門学校	短大	大 学	大学院	その他	合計
A	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1( 33.3)	2(66.7)	0( 0.0)	3(100.0)
B	0(0.0)	0( 0.0)	1(25.0)	0(0.0)	3( 75.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	4(100.0)
C	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	5( 62.5)	2(25.0)	1(12.5)	8(100.0)
D	0(0.0)	1(16.7)	0( 0.0)	0(0.0)	3( 50.0)	2(33.3)	0( 0.0)	6(100.0)
E	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	4( 50.0)	4(50.0)	0( 0.0)	8(100.0)
F	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
合計	0(0.0)	1( 3.3)	1( 3.3)	0(0.0)	17( 56.7)	10(33.3)	1( 3.3)	30(100.0)

表2-29-4 教育期待（ブラジル人母親）

	中学校	高校	専門学校	短大	大 学	大学院	その他	合計
A	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1( 33.3)	2(66.7)	0( 0.0)	3(100.0)
B	0(0.0)	1(20.0)	1(20.0)	0(0.0)	3( 60.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	5(100.0)
C	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	5( 62.5)	2(25.0)	1(12.5)	8(100.0)
D	0(0.0)	1(14.3)	1(14.3)	0(0.0)	3( 42.9)	2(28.6)	0( 0.0)	7(100.0)
E	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	4( 44.4)	5(55.6)	0( 0.0)	9(100.0)
F	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
合計	0(0.0)	2( 6.1)	2( 6.1)	0(0.0)	17( 51.5)	11(33.3)	1( 3.0)	33(100.0)

表2-29-5 教育期待（ペルー人父親）

	中 学 校	高 校	専 門 学 校	短 大	大 学	大 学 院	そ の 他	合 計
A	-	-	-	-	-	-	-	-
B	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
C	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)	1( 50.0)	0(0.0)	2(100.0)
D	-	-	-	-	-	-	-	-
E	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(66.7)	2( 33.3)	0(0.0)	6(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)	1( 50.0)	0(0.0)	2(100.0)
合計	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(54.5)	5( 45.5)	0(0.0)	11(100.0)

表2-29-6 教育期待（ペルー人母親）

	中 学 校	高 校	専 門 学 校	短 大	大 学	大 学 院	そ の 他	合 計
A	-	-	-	-	-	-	-	-
B	-	-	-	-	-	-	-	-
C	0(0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	3(100.0)
D	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)
E	0(0.0)	0(0.0)	1( 20.0)	0(0.0)	3(60.0)	1(20.0)	0(0.0)	5(100.0)
F	0(0.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(50.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)
合計	0(0.0)	0(0.0)	2( 18.2)	0(0.0)	5(45.5)	4(36.4)	0(0.0)	11(100.0)

表2-30-1 どの学校に進学させたいですか（ブラジル人）

単位：人、%

	ブラジル人父親					ブラジル人母親				
	日本の小学校	日本にあるブラジル人学校	ブラジルの小学校	そ の 他	合 計	日本の小学校	日本にあるブラジル人学校	ブラジルの小学校	そ の 他	合 計
A	3( 75.0)	1(25.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	4(100.0)	2( 66.7)	1(33.3)	0( 0.0)	0(0.0)	3(100.0)
B	3( 75.0)	0( 0.0)	1(25.0)	0( 0.0)	4(100.0)	3( 60.0)	1(20.0)	1(20.0)	0(0.0)	5(100.0)
C	4( 57.1)	0( 0.0)	2(28.6)	1(14.3)	7(100.0)	5( 62.5)	1(12.5)	2(25.0)	0(0.0)	8(100.0)
D	6(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	6(100.0)	7(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	7(100.0)
E	7(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	7(100.0)	7( 77.8)	0( 0.0)	2(22.2)	0(0.0)	9(100.0)
F	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)
計	24( 82.8)	1( 3.4)	3(10.3)	1( 3.4)	29(100.0)	25( 75.8)	3( 9.1)	5(15.2)	0(0.0)	33(100.0)

表2-30-2 どの学校に進学させたいですか（ペルー人）

単位：人、%

	ペルー人父親					ペルー人母親				
	日本の小学校	日本にあるブラジル人学校	ブラジルの小学校	そ の 他	合 計	日本の小学校	日本にあるブラジル人学校	ブラジルの小学校	そ の 他	合 計
A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B	1(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)	-	-	-	-	-
C	1( 50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)
D	1(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	1(100.0)	-	-	-	-	-
E	5( 83.3)	0(0.0)	1(16.7)	0(0.0)	6(100.0)	5(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	5(100.0)
F	2(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	2(100.0)	2(100.0)	0(0.0)	0( 0.0)	0(0.0)	2(100.0)
計	10( 83.3)	0(0.0)	2(16.7)	0(0.0)	12(100.0)	8( 88.9)	0(0.0)	1(11.1)	0(0.0)	9(100.0)

表2-31 その学校を希望する理由は何ですか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
日本に定住したいから	0	0.0	0	0.0	2	40.0	1	25.0
将来帰国したいから	1	25.0	1	25.0	0	0.0	1	25.0
職業につながりやすいから	0	0.0	0	0.0	1	20.0	1	25.0
進学に有利だから	2	50.0	2	50.0	2	40.0	1	25.0
文化を身につけられるから	3	75.0	2	50.0	3	60.0	1	25.0
言葉を身につけられるから	2	50.0	2	50.0	2	40.0	1	25.0
日本人の友達ができるから	2	50.0	1	25.0	2	40.0	1	25.0
同じ国の友達ができるから	0	0.0	1	25.0	0	0.0	0	0.0
学費の問題があるから	1	25.0	1	25.0	2	40.0	0	0.0
規則が子どもに合うから	0	0.0	0	0.0	1	20.0	0	0.0
学習のレベルがあっているから	1	25.0	2	50.0	2	40.0	2	50.0
その他	0	0.0	0	0.0	1	20.0	0	0.0
	4	100.0	4	100.0	5	55.6	4	100.0

現在の住居をみると、日本人では「一戸建て持ち家（土地も所有）」が最も多く56.7%（220家族）と半数を超えている（表2-32）。民間の借家やアパートに住んでいる家族がそれについて22.9%（89家族）となっている。それに対し、ブラジル人やペルー人では民間の借家、アパート等が多くなっている（ブラジル人64.7%、ペルー人53.8%）。しかし、「一戸建て持ち家（土地も所有）」に住んでいる者も、ブラジル人で3家族（8.8%）、ペルー人で1家族（7.7%）と少数ながら現れてきている。

世帯年収は、表2-33-1と表2-33-2を比較するとわかるように日本人と外国人との違いが明確に現れている。日本人家族の平均が562.5万円であるのに対し、ブラジル人家族は285.2万円、ペルー人家族も263.6万円と、日本人家族の半分程度の水準となっている。また、600万円以上の家族も日本人では39.2%（129家族）いるのに対し、ブラジル人家族とペルー人家族では0であった。

表2-32-1 現在の住居（日本人）

単位：人、%

	一戸建て持ち家 （土地も所有）	一戸建て持ち家 （借家）	民間の借家・ア パート・マンシ ョン	社 宅 ・ 官 舎	公 営 ・ 公 団 住 宅	間 借 り	そ の 他	合 計
A	57(63.3)	3( 3.3)	17(18.9)	6( 6.7)	6( 6.7)	0(0.0)	1(1.1)	90(100.0)
B	68(62.4)	3( 2.8)	22(20.2)	4( 3.7)	12(11.0)	0(0.0)	0(0.0)	109(100.0)
C	20(41.7)	5(10.4)	15(31.3)	6(12.5)	1( 2.1)	0(0.0)	1(2.1)	48(100.0)
D	22(50.0)	1( 2.3)	10(22.7)	6(13.6)	2( 4.5)	1(2.3)	2(4.5)	44(100.0)
E	31(51.7)	3( 5.0)	16(26.7)	6(10.0)	4( 6.7)	0(0.0)	0(0.0)	60(100.0)
F	22(59.5)	4(10.8)	9(24.3)	0( 0.0)	2( 5.4)	0(0.0)	0(0.0)	37(100.0)
合計	220(56.7)	19( 4.9)	89(22.9)	28( 7.2)	27( 7.0)	1(0.3)	4(1.0)	388(100.0)

表2-32-2 現在の住居（ブラジル人）

単位：人、%

	一戸建て持ち家 （土地も所有）	民間の借家・ア パート・マンシ ョン	社 宅 ・ 官 舎	公 営 ・ 公 団 住 宅	そ の 他	合 計
A	0( 0.0)	1( 25.0)	0( 0.0)	2(50.0)	1(25.0)	4(100.0)
B	0( 0.0)	3( 60.0)	0( 0.0)	1(20.0)	1(20.0)	5(100.0)
C	1(12.5)	5( 62.5)	0( 0.0)	2(25.0)	0( 0.0)	8(100.0)
D	1(14.3)	4( 57.1)	1(14.3)	1(14.3)	0( 0.0)	7(100.0)
E	1(11.1)	8( 88.9)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	9(100.0)
F	0( 0.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
合計	3( 8.8)	22( 64.7)	1( 2.9)	6(17.6)	2( 5.9)	34(100.0)

表2-32-3 現在の住居（ペルー人）

単位：人、%

	一戸建て持ち家 （土地も所有）	民間の借家・ア パート・マンシ ョン	社 宅 ・ 官 舎	公 営 ・ 公 団 住 宅	そ の 他	合 計
A	-	-	-	-	-	-
B	0( 0.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
C	0( 0.0)	1( 33.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	2(66.7)	3(100.0)
D	0( 0.0)	1(100.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(100.0)
E	0( 0.0)	4( 66.7)	2(33.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	6(100.0)
F	1(50.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(50.0)	0( 0.0)	2(100.0)
合計	1( 7.7)	7( 53.8)	2(15.4)	1( 7.7)	2(15.4)	13(100.0)

表2-33-1 世帯収入（日本人）

	200万円未満	200～400万円未満	400～600万円未満	600～800万円未満	800～1000万円未満	1000～1500万円未満	1500～2000万円未満	2000万円以上	合計	平均(万円)
A	8 10.5%	18 23.7%	22 28.9%	10 13.2%	16 21.1%	1 1.3%	1 1.3%	0 0.0%	76 100.0%	547.4
B	4 4.6%	19 21.8%	27 31.0%	14 16.1%	22 25.3%	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	87 100.0%	579.9
C	4 10.0%	11 27.5%	11 27.5%	6 15.0%	6 15.0%	1 2.5%	1 2.5%	0 0.0%	40 100.0%	545.0
D	2 5.7%	7 20.0%	12 34.3%	8 22.9%	5 14.3%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	35 100.0%	561.4
E	3 5.2%	18 31.0%	17 29.3%	16 27.6%	4 6.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	58 100.0%	500.0
F	2 6.1%	7 21.2%	8 24.2%	7 21.2%	4 12.1%	3 9.1%	1 3.0%	1 3.0%	33 100.0%	683.3
計	23 7.0%	80 24.3%	97 29.5%	61 18.5%	57 17.3%	7 2.1%	3 0.9%	1 0.3%	329 100.0%	562.5

表2-33-2 世帯収入（外国人）

	日系ブラジル人					日系ペルー人				
	200万円未満	200～400万円	400～600万円	合計	平均(万円)	200万円未満	200～400万円	400～600万円	合計	平均(万円)
A	0 0.0%	2 66.7%	1 33.3%	3 100.0%	366.7	- -	- -	- -	- -	- -
B	0 0.0%	2 66.7%	1 33.3%	3 100.0%	366.7	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%	500.0
C	4 57.1%	2 28.6%	1 14.3%	7 100.0%	214.3	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	100.0
D	3 50.0%	3 50.0%	0 0.0%	6 100.0%	200.0	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%	300.0
E	1 14.3%	3 42.9%	3 42.9%	7 100.0%	357.1	2 33.3%	4 66.7%	0 0.0%	6 100.0%	233.3
F	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%	300.0	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	2 100.0%	300.0
合計	8 29.6%	13 48.1%	6 22.2%	27 100.0%	285.2	3 27.3%	7 63.6%	1 9.1%	11 100.0%	263.6

## 第5節 親子のコミュニケーション

ここまで、各家族の基本属性をみてきた。では、このような親子において、どのようなコミュニケーションがとられているのであろうか。表2-34は「平日と一緒に遊ぶ」「休日と一緒に遊ぶ」「夕食を一緒に食べる」「保育所のことを話す」のそれぞれについて「よくする」「ときどきする」と答えた者の割合をまとめたものである。これをみると、日本人父親において「平日一緒に遊ぶ」が64.4%となっているほかは、どの項目も、国籍に関わりなく8割を超える高い数字となっている。特に、ペルー人父母は「平日一緒に遊ぶ」以外の3項目が全て100.0%であり、密なコミュニケーションをとっている様子がうかがえる。また、日本人ではどの項目も母親の方が選択者が多くなっているのに対し、ブラジル人では「平日と一緒に遊ぶ」と「夕食を一緒に食べる」では母親の方が、「休日と一緒に遊ぶ」「保育所のことを話す」では父親の方が、それぞれ10ポイント前後多くなっている。

表2-34 対象子とのコミュニケーション

	平日と一緒に遊ぶ		休日と一緒に遊ぶ		夕食を一緒に食べる		保育所のできごとを聞く	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
日本人父親	226	64.4	329	92.7	286	81.0	287	82.7
日本人母親	328	86.3	381	99.2	374	97.9	371	98.7
ブラジル人父親	22	84.6	20	95.2	23	85.2	27	100.0
ブラジル人母親	31	96.9	22	88.0	31	96.9	28	93.3
ペルー人父親	10	90.9	10	100.0	11	100.0	9	100.0
ペルー人母親	9	90.0	10	100.0	11	100.0	10	100.0

注

1) 2001年の調査については小内透「混成保育に関する外国人の父母の意識」(『調査と社会理論 19 外国人多住地域の教育と国際交流活動』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2002)を参照。ただし、2001年調査の対象者はE園のブラジル人父母に限定されている。

### 第3章 日本人父母と外国人父母の意識と交流の実態

前章で調査対象家庭の基本的な属性をやや細かくみてきた。ここからは、日本人父母、外国人父母それぞれの意識を詳細にみていくことにする。まず本章では、日本人父母と外国人父母が、それぞれお互いをどのように捉えているのか、その意識と実態を考察する。

#### 第1節 日本人父母の外国人父母に対する意識

保育所が外国人を受け入れていることに対する、日本人父母の意識は極めて好意的である。表3-1のように、外国人受け入れに「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた者が父親で74.4% (291人)、母親では86.4% (338人) に達する一方で、「反対」「どちらかといえば反対」と答えた者は父親で3.0% (10人)、母親で3.4% (13人) しかいなかった。このような、外国人児童に対する好意的な態度の背景には、彼らとの交流が自分の子どもたちにより影響を与えることへの期待がある。

まず、「自分の子どもには外国人の子どもと積極的に交流してほしい」と考えている保護者をみると、父親の69.5% (228人)、母親の72.5% (272人) にも達する(表3-2)。その一方で「あまり付き合ってほしくない」と答えたのは父親では12.0% (40人)、母親では9.2% (35人) だけである。父親の61.0% (205人)、母親の64.9% (250人) は、子ども同士の交流によって「国際的な視野が広がる」と考えており、この考え方が先の高い交流期待に結びついているといえよう。

では、実際に子どもたちの交流は進んでいるのだろうか。子どもに外国人の友だちがいるかどうかを聞くと、61.4%にあたる240人は「いる」と答えており、「いない」(16.9%、66人)を大きく上回っている(表3-3)。その友人は、ブラジル人が56.0% (136人)と最も多く、ペルー人は4.5% (11人)であった(表3-4)。ただ、外国人の友だちについては21.2%にあたる83人が「わからない」と答えている。また、友だちの国籍についても30人は「わからない」と答えている。

子どもたちの交流に対する様々な期待は、保護者同士の関係の改善、ひいては大泉町に住む外国人一般への好印象へと結びつく可能性を秘めている。

表3-1 保育所が外国人を受け入れていることについてどう思いますか

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
賛成	199	50.9	244	62.4
どちらかといえば賛成	92	23.5	94	24.0
どちらかといえば反対	8	2.0	10	2.6
反対	4	1.0	3	0.8
わからない	37	9.5	30	7.7
無回答など	51	13.0	10	2.6
合計	391	100.0	391	100.0

表3-2 次のような意見についてどう思いますか（そう思う＋どちらかといえばそう思う）

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもの国際的な視野が広がる	205	61.0	250	64.9
自分たちの子どもは日本人だと強く感じる	63	18.9	67	17.6
外国人の子どもも日本の保育所では日本語を使うべき	192	57.4	214	56.0
日本の保育所でも母国語を使うのは当然	161	48.3	189	49.8
日本の保育所でも母国の文化を教育すべき	95	28.5	108	28.4
外国人は外国人だけの保育所に通った方がよい	37	11.1	39	10.2
自分の子どもには外国人の子どもと積極的に交流して欲しい	228	69.5	272	72.5
外国人の子どもとはあまり深くつきあって欲しくない	40	12.0	35	9.2

表3-3 外国人の友達はいますか

	度数	パーセント
いる	20	61.4
いない	66	16.9
わからない	83	21.2
無回答など	2	0.5
合計	391	100.0

表3-4 その友達はどこ国の国の人ですか

	度数	パーセント
ブラジル	136	56.0
ペルー	11	4.5
その他	37	15.2
わからない	30	12.3
無回答など	29	11.9
合計	243	100.0

2005年におこなった大泉町の住民調査では、外国人労働者に対する住民の厳しい視線が明らかになった<sup>1)</sup>。また、大泉町は外国人比率が全国で一番高い町でありながら、日本人と外国人の交流はあまり進んでいないという側面も指摘されており、本調査の対象者でも、職場に外国人がいるという者は父親で24.0%（81人）、母親でも27.5%（105人）しかいない（表3-5）。一緒に食事に行ったりする者、外国人を家に招待したことのある者、外国人とレジャーを楽しむ者にいたっては、それよりもさらに低い数字となっている。

このような実態を反映してか、外国人父母との交流も余りおこなわれていない。外国人父母との関係で最も多いのは、「あいさつする程度」であり、父親の40.2%（157人）、母親の63.9%（250人）にあたる（表3-6）。母親では、「必要な時だけ話す」という人も23.3%（91人）いるものの、父親では「全然話さない」が27.9%（109人）と2番目に多くなっている。「家の行き来がある」にいたっては、父母ともに2%を切っている。

また、先に見たように、240人の父母が、子どもには外国人の友だちがいると答えている。だが、その子どもの友だちの親との付き合いを聞いても、父親では44.2%（106人）が「あまりない」「まったくない」であり、母親でもよくしゃべるという者は8.8%（21人）に留まった（表3-7）。保育所へ行くようになって変わったことを聞いた設問でも、父親の39.6%（132人）、母親の48.0%（183人）が「子どもに外国人の子どもができた」ことを挙げているにもかかわらず、それによって外国人の親とつきあいができた者は父親ではわずか2.1%（7人）、母親でも6.3%（24人）に留まっている（表3-8）。

しかし、今後外国人父母とどうしていききたいかを聞いてみると「あいさつする程度でいい」という者は父親ではまだ35.0%（137人）いるものの、母親では27.9%（109人）まで少なくなっている（表3-9）。また、「あまりつきあいたくない」「つきあわなくていい」という者も父親の6.4%（27人）、母親の2.8%（11人）に過ぎず、現状以上の付き合いを望んでいる様子が伺える。さらに、子どもに外国人の友だちがいるかどうかと、今後外国人父母とどうしていききたいかのクロス集計をしてみると、父母ともに子どもに外国人の友だちがいる者の方が、いない者よりも今後の積極的な交流を

望んでいることが明らかになった（表3-10）。子ども同士の交流が、今後の親レベルでの交流を生んでいく可能性を秘めているといえる。

表3-5 外国人との日常での交流

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
同じ職場で働いている	81	24.0	105	27.5
一緒に食事をしたりのみに行ったりすることがある	55	16.3	55	14.3
家に招いたことがある	37	11.0	50	13.0
一緒にレジャーを楽しんだことがある	53	15.9	70	18.3

表3-6 外国人保護者との付き合いはありますか

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来がある	5	1.3	7	1.8
必要な時だけ話す	31	7.9	91	23.3
あいさつする程度	157	40.2	250	63.9
ほとんど話さない	35	9.0	11	2.8
全然話さない	109	27.9	24	6.1
無回答など	54	13.8	8	2.0
合計	391	100.0	391	100.0

表3-7 外国人の友だちの親と付き合いはありますか

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
よくしゃべる	8	3.3	21	8.8
あいさつ程度	91	37.9	165	68.8
あまりない	33	13.8	21	8.8
まったくない	73	30.4	26	10.8
無回答など	35	14.6	7	2.9
合計	240	100.0	240	100.0

表3-8 保育所へ行って変わったこと（複数回答）

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもに外国人の友だちができた	132	39.6	183	48.0
保育所を通じ外国人と親同士のつきあいをするようになった	7	2.1	24	6.3
文化の違いに戸惑うことが多くなった	4	1.2	7	1.8
家庭でも外国人のことが話題になるようになった	52	15.6	80	21.0
何もかわらない	175	52.6	156	40.9
その他	14	4.2	20	5.2
無回答	58	14.8	10	2.6
合計	391	100.0	391	100.0

表3-9 外国人保護者との付き合い：今後

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来ができるほど仲良くしたい	28	7.2	37	9.5
必要な時だけつきあいたい	132	33.8	217	55.5
あいさつする程度でいい	137	35.0	109	27.9
あまりつきあいたくない	9	2.3	4	1.0
つきあわなくていい	16	4.1	7	1.8
無回答など	69	17.6	17	4.3
合計	391	100.0	391	100.0

表3-10 外国人の友だち×外国人父母とは今後どうしていきたいですか

単位：人、%

			外国人父母とは今後どうしていきたいですか					合 計
			家の行き来ができる程仲良くしたい	必要な時だけつきあいたい	あいさつする程度でいい	あまりつきあいたくない	つきあわなくていい	
父	お子さんに外国人の友だちはいますか	い る	22(11.1)	93(46.7)	70(35.2)	6(6.0)	8(4.0)	199(100.0)
		い な い	2( 3.4)	16(27.6)	34(58.6)	2(3.4)	4(6.9)	58(100.0)
		わからない	4( 6.2)	23(35.4)	33(50.8)	1(1.5)	4(6.2)	65(100.0)
	合 計		28( 8.7)	132(41.0)	137(42.5)	9(2.8)	16(5.0)	322(100.0)
母	お子さんに外国人の友だちはいますか	い る	29(12.6)	147(63.9)	48(20.9)	3(1.3)	3(1.3)	230(100.0)
		い な い	1( 1.6)	24(38.7)	34(54.8)	1(1.6)	2(3.2)	62(100.0)
		わからない	7( 8.6)	45(55.6)	27(33.3)	0(0.0)	2(2.5)	81(100.0)
	合 計		37( 9.9)	216(57.9)	109(29.2)	4(1.1)	7(1.9)	373(100.0)

※父親：p=.032 母親：p=.000 (χ<sup>2</sup>検定)

表3-11 外国人父母の教育に対する姿勢をどう感じていますか

	日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
教育熱心だ	29	7.4	40	10.2
どちらかといえば熱心だ	123	31.5	146	37.3
どちらかといえば無関心	95	24.3	107	27.4
無関心	35	9.0	25	6.4
無回答など	109	27.9	73	18.7
合 計	391	100.0	391	100.0

## 第2節 外国人父母の意識

次に、外国人父母の日本人に対する意識と、ブラジル人父母、ペルー人父母がお互いをどう捉えているかを見ていこう。

大泉町には認可保育所のほか、ブラジル人が経営する託児所やブラジル人学校の幼児クラスをはじめとする、外国人に開かれた幼児教育施設、幼児保育施設が多数存在する。認可保育所に子どもを預けている父母は、これらの選択肢の中から認可保育所を選択している。では、外国人父母たちはなぜ子どもを預ける先として認可保育所を選んだのだろうか。

表3-12からわかるように、保育料の安さは大きな理由の一つである。ペルー人母親は2人(22.2%)にすぎないが、ブラジル人父母やペルー人父親は4割～5割が保育料の安さを理由に挙げている。しかし、保育料の安さだけが理由ではない。そして、その理由はブラジル人とペルー人で大きく異なっている。

まず、ブラジル人では保育料の安さ以上に「園の保育内容が気に入ったから」「行事が楽しいから」といった園の内容に関する理由や、「日本語を覚えさせたいから」「子どものうちに日本文化に触れさせたいから」といった日本への順応性を育てるための理由を挙げる者が多い。それに対し、ペルー人では「日本語を覚えさせたいから」「子どものうちから日本文化に触れさせたいから」という理由はそれぞれ6割を超えているが、園の内容に関する理由は「保育内容が気に入った」が父親10.0%(1人)、母親33.3%(3人)、「行事が楽しいから」が父親10.0%(1人)、母親22.2%(2人)とブラジル人と比較して大きく減っている。その代わりに、ブラジル人では父母ともに1割前後しか挙げていなかった「日本にずっと住むつもりだから」が父親60.0%(6人)、母親55.6%(5人)と多くなっている。

このように、外国人父母は日本社会へ積極的に溶け込んで行くためという意義を保育所に見出し

ている。そのような意識は日本人と外国人と一緒に保育する混成保育に対する考え方にも現れている。表3-13にあるように、ブラジル人、ペルー人とも、ほぼ全員が日本人の子どもたちとの積極的な交流を望んでいるほか、混成保育によって子どもの国際的な視野が広がることを期待している。また、半数が日本の保育所でも母語を使うことを当然と考えている一方で、ほぼ全員が日本語を使うべきであるとも考えている。このような期待は、子どもレベルでは実現しており、ブラジル人父母の78.1% (25人)、ペルー人父母の84.6% (11人) は、子どもには日本人の友だちがいると答えている (表3-14)。

では、大人たちの交流はどうなっているのでしょうか。ほとんどの外国人父母が職場において日本人と一緒に働いている (表3-15)。そして、ブラジル人父母の7割弱、ペルー人父母でも半数近くが日本人と一緒に食事をしたり、あるいは日本人を家に招いたりしたことがある。外国人父母の側から見れば、日本人とはそれなりに活発な交流がなされているといえることができる。

しかし、保育所はこのような交流の場にはなっていないようである。日本人父母と家の行き来がある者は、ブラジル人の父親で7.1% (2人)、母親で12.1% (4人) しかおらず、ペルー人父母に関しては一人もいない (表3-16)。最も多いのは日本人父母と同様に「あいさつする程度」であり、ブラジル人父母では半数にやや満たない程度、ペルー人では父親の45.5% (5人)、母親の22.2% (2人) である。また、「ほとんど話さない」「全く話さない」がブラジル人父親の25.0% (7人)、母親の15.2% (5人)、ペルー人の場合は父親で18.2% (2人)、母親で33.3% (3人) となっている。

表3-12 なぜ日本の保育所を選んだのですか (複数回答)

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
保育料が安いから	11	42.3	14	45.2	5	50.0	2	22.2
保育時間が長いから	4	15.4	7	22.6	1	10.0	1	11.1
保育士が親切だから	8	30.8	13	41.9	4	40.0	6	66.7
園の保育内容が気に入ったから	16	61.5	17	54.8	1	10.0	3	33.3
日本語を覚えさせたいから	16	61.5	22	71.0	6	60.0	5	55.6
行事が楽しいから	16	61.5	19	61.3	1	10.0	2	22.2
自分も日本人と仲良くしたいから	10	38.5	13	41.9	2	20.0	3	33.3
家の近所だから	6	23.1	12	38.7	1	10.0	2	22.2
日本にずっと住むつもりだから	2	7.7	4	12.9	6	60.0	5	55.6
子どものうちから日本文化にふれさせたいから	16	61.5	18	58.1	6	60.0	7	77.8
子どもに日本人の友だちを作らせたいから	8	30.8	13	41.9	1	10.0	1	11.1
その他	1	3.8	1	3.2	0	0.0	0	0.0
合計	26	100.0	31	100.0	10	100.0	9	100.0

表3-13 混成保育について (「そう思う」「どちらかといえばそう思う」) 単位: 人、%

	日本人の子どもと遊ぶことで国際的な視野が広がる	自分たちの子どもはブラジル人・ペルー人だと強く感じる	ブラジル人・ペルー人の子どもも日本の保育所では日本語を使うべき	日本の保育所でも母国語を使うのは当然だ	ブラジル人・ペルー人のためには日本の保育所でも母国語の教育をすべきだ	自分の子どもには日本人の子どもと積極的に交流して欲しい	日本人の子どもとあまり深く付き合っていない
ブラジル父	26( 89.7)	15(55.6)	27(93.1)	15(51.7)	16(55.2)	28( 96.6)	3(10.3)
ブラジル母	31( 93.9)	19(61.3)	30(90.9)	17(51.5)	17(51.5)	32( 97.0)	3( 9.1)
ペルー父	11(100.0)	7(63.6)	10(90.9)	6(54.5)	9(81.8)	11(100.0)	0( 0.0)
ペルー母	9(100.0)	7(70.0)	9(90.0)	4(40.0)	7(63.6)	11(100.0)	1( 9.1)

表3-14 お子さんに日本人の友だちはいますか

	ブラジル人		ペルー人	
	度数	パーセント	度数	パーセント
いる	25	78.1	11	84.6
いない	2	6.3	1	7.7
わからない	5	15.6	1	7.7
合計	32	100.0	13	100.0

表3-15 日本人との日常での交流

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
同じ職場で働いている	26	89.7	29	90.6	11	100.0	9	90.0
食事をしたりのみに行ったりする	20	69.0	22	66.7	6	50.0	4	44.4
家に招いたことがある	17	63.0	19	59.4	5	45.5	4	50.0
一緒にレジャーを楽しんだことがある	18	64.3	15	63.3	3	27.3	3	37.5
日本人から日本語を習っている	6	25.0	7	26.9	2	18.2	3	37.5

表3-16 日本人父母とのコミュニケーション：現在

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来がある	2	7.1	4	12.1	0	0.0	0	0.0
必要なときだけ話す	6	21.4	8	24.2	4	36.4	4	44.4
あいさつする程度	13	46.4	16	48.5	5	45.5	2	22.2
ほとんど話さない	5	17.9	2	6.1	1	9.1	3	33.3
全然話さない	2	7.1	3	9.1	1	9.1	0	0.0
合計	28	100.0	33	100.0	11	100.0	9	100.0

保育所入所後の変化を聞いても、子どもの日本語力の向上や、特にペルー人において家庭における日本語の重要性が高まったという意見（「親自身が日本語習得の必要性を感じる」ペルー人父親81.8%、母親77.8%、「家庭でも日本語を使うようになった」ペルー人父親63.6%、母親44.4%）が目立つ中で、保育所を通して日本人の父母とつきあうようになったと答える者は、ブラジル人、ペルー人とも2割から3割程度しかいない（表3-17）。

これは、決して外国人父母が子ども同士の交流だけで満足していることを示すものではない。日本人父母と今後どうして行きたいかをきくと、表3-18に表れているように「家の行き来ができるほど仲良くしたい」という者がブラジル人の父親の42.3%（11人）、母親の53.1%（17人）、ペルー人では父親の63.6%（7人）、母親の70.0%（7人）に達している。一方、「あまり付き合いたくない」「付き合わなくていい」という者はブラジル人父親で7.7%（2人）、母親で9.4%（3人）、ペルー人に関しては一人もいない。

なお、子どもの友だちの父母との付き合いについては、ブラジル人とペルー人で差が表れている（表3-19）。ブラジル人では、「よくしゃべる」という者も父親で26.1%（6人）、母親で24.0%（6人）いるが、「あまりない」「まったくない」という者も、父親で43.5%（10人）、母親でも36.0%（9人）いる。それに対し、ペルー人父母では「あまりない」「まったくない」という者は父母ともに一人もいなかった。

表3-17 保育所入所後の変化（複数回答）

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもの日本語が上手になった	13	52.0	13	45.3	6	54.5	4	44.4
親自身が日本語の必要性を感じるようになった	9	36.0	18	60.0	9	81.8	7	77.8
子どもに日本人の友だちができた	11	44.0	14	46.7	7	63.6	3	33.3
保育所を通じ日本人の親とつきあうようになった	6	24.0	10	33.3	3	27.3	2	22.2
文化の違いに戸惑うことが多くなった	2	8.0	2	6.7	0	0.0	1	11.1
家庭でも日本語を使うようになった	5	20.0	8	26.7	7	63.6	4	44.4
家庭でも日本の習慣を取り入れるようになった	5	20.0	7	23.3	2	18.2	3	33.3
母国の文化を伝えられるよう心がけるようになった	3	12.0	5	16.7	2	18.2	6	66.7
その他	1	4.0	2	6.7	0	0.0	0	0.0
何も変わらない	2	8.0	3	10.0	0	0.0	0	0.0
合 計	25	100.0	30	100.0	11	100.0	9	100.0

表3-18 日本人父母とのコミュニケーション：今後

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来ができるほど仲良くしたい	11	42.3	17	53.1	7	63.6	7	70.0
必要なときだけつきあいたい	8	30.8	9	28.1	3	27.3	2	20.0
あいさつする程度でいい	5	19.2	3	9.4	1	9.1	1	10.0
あまりつきあいたくない	2	7.7	2	6.3	0	0.0	0	0.0
つきあわなくていい	0	0.0	1	3.1	0	0.0	0	0.0
合 計	26	100.0	32	100.0	11	100.0	10	100.0

表3-19 日本人の友だちの父母と付き合いはありますか

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
よくしゃべる	6	26.1	6	24.0	1	11.1	2	22.2
あいさつ程度	7	30.4	10	40.0	8	88.9	7	77.8
あまりない	6	26.1	2	8.0	0	0.0	0	0.0
まったくない	4	17.4	7	28.0	0	0.0	0	0.0
合 計	23	100.0	25	100.0	9	100.0	9	100.0

外国人父母同士の関係についても確認しておこう。まず、ブラジル人同士のコミュニケーションをみてみると、家の行き来があるのは父親で37.0%（10人）、母親で40.6%（13人）と半数を切っている（表3-20）。また、今後をみてみても、家の行き来ができるほど仲良くしたいと答えた者は現状と同じ人数しかいない（表3-21）。ブラジル人同士は余り密接なネットワークを作っているわけではないようである。

一方、ペルー人同士で家の行き来があるほどの付き合いをしている者は、ブラジル人より少なく、父母ともに27.3%（3人）ずつである。しかし、今後をみてみると、「家の行き来ができるほど仲良くしたい」と答えた者が父親で54.5%（6人）、母親では81.8%（9人）にもなっている。「あまりつきあいたくない」「付き合わなくていい」という者は父母ともに一人もおらず、ブラジル人以上に、今後の関係性向上を考えている様子が伺える。

ブラジル人で、日本人、ブラジル人以外との付き合いがある者は、父母ともに7割弱となっており、その関係も必要な時に話す程度のものが多い（表3-22）。ペルー人では、回答のあった全員に日本人、ペルー人以外との付き合いがある。付き合いの中身も、「必要な時だけ話す」が父母ともに7割を超え最も多くなっていることはブラジル人と共通しているが、「あいさつする程度」が全くない点は特徴的になっている（表3-23）。

表3-20 ブラジル人、ペルー人同士のコミュニケーション：現在

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来がある	10	37.0	13	40.6	3	27.3	3	27.3
必要なときだけ話す	7	25.9	10	31.3	5	45.5	3	27.3
あいさつする程度	6	22.2	7	21.9	2	18.2	3	27.3
ほとんど話さない	1	3.7	1	3.1	1	9.1	2	18.2
全然話さない	3	11.1	1	3.1	0	0.0	0	0.0
合計	27	100.0	32	100.0	11	100.0	11	100.0

表3-21 ブラジル人、ペルー人同士のコミュニケーション：今後

	ブラジル父親		ブラジル母親		ペルー父親		ペルー母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
家の行き来ができるほど仲良くしたい	10	38.5	13	41.9	6	54.5	9	81.8
必要なときだけつきあいたい	10	38.5	11	35.5	2	18.2	0	0.0
あいさつする程度でいい	3	11.5	2	6.5	3	27.3	2	18.2
あまりつきあいたくない	1	3.8	2	6.5	0	0.0	0	0.0
つきあわなくていい	2	7.7	3	9.7	0	0.0	0	0.0
合計	26	100.0	31	100.0	11	100.0	11	100.0

表3-22 日本人、日系ブラジル人以外とのつきあい

	日本、ブラジル人以外との付き合い			どのようなおつきあいですか												
	あ	る	な	い	合	計	家の行き来 がある	必要なとき だけ話す	あいさつす る程度	そ	の	他	合	計		
父 親	20	9	29	3	11	3	1	18	69.0%	31.0%	100.0%	16.7%	61.1%	16.7%	5.6%	100.0%
母 親	22	11	33	3	11	4	2	20	66.7%	33.3%	100.0%	15.0%	55.0%	20.0%	10.0%	100.0%

表3-23 日本人、日系ペルー人以外とのつきあい

	日本、ペルー人以外との付き合い			どのようなおつきあいですか												
	あ	る	な	い	合	計	家の行き来 がある	必要なとき だけ話す	あいさつす る程度	そ	の	他	合	計		
父 親	11	0	11	2	8	0	1	11	100.0%	0.0%	100.0%	18.2%	72.7%	0.0%	9.1%	100.0%
母 親	11	0	11	1	7	0	2	10	100.0%	0.0%	100.0%	10.0%	70.0%	0.0%	20.0%	100.0%

注

- 1) 2005年の調査については『調査と社会理論 研究報告書22 地域住民の外国人との交流・意識とその変化—群馬県大泉町を事例として—』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2006を参照。

(野崎剛毅)

## 第4章 日本人父母と外国人父母の保育所に対する意識

続いて日本人父母、外国人父母それぞれの保育所に対する意識をみてみよう。その際、外国人父母についてはその教育観も少し掘り下げてみていきたい。

### 第1節 日本人父母の保育所観

前章で、日本人父母の外国人園児受け入れに対する好意的な態度が明らかになった。しかし、このような意識は、外国人園児との交流を望む意識だけが支えているわけではない。保育所や保育士への意識をみてみると、そこには高い満足感がうかがえる。

保護者がこれまでに保育士に相談したことを聞いてみると母親では「子どもの発達について」（41.9%、164人）と「子どもの育て方について」（37.9%、148人）が多くなっている一方で、外国人の親や子どもに関することはほとんど相談されていない（表4-1）。父親にいたっては「相談したことはない」が43.7%（171人）と最も多くなっている。また、今後相談したいことでも父母ともに「相談したいことはない」が最も多くなっている。

表4-1 保育士に相談したこと、今後相談したいこと（複数回答）

	相談したこと				今後相談したいこと			
	日本人父親		日本人母親		日本人父親		日本人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもの育て方について	37	9.5	148	37.9	41	10.5	90	23.0
子どもの発達についての問題	54	13.8	164	41.9	33	8.4	86	22.0
保育所の保育内容について	27	6.9	78	19.9	26	6.6	49	12.5
保育士の子どもへの接し方について	12	3.1	44	11.3	17	4.3	48	12.3
外国人の親とのつきあい方について	0	0.0	1	0.3	3	0.8	5	1.3
子どもと外国人の子どもの仲について	0	0.0	5	1.3	4	1.0	5	1.3
その他	7	1.8	7	1.8	11	2.8	11	2.8
相談したこと・したいことはない	171	43.7	77	19.7	183	46.8	128	32.7
無回答など	117	29.9	38	9.7	112	28.6	63	16.1
合計	391	100.0	391	100.0	391	100.0	391	100.0

保育所への要望をみてみても、保育料（父親39.1%、母親49.6%）や保育時間（父親11.0%、母親19.4%）など、制度的な面に関する要望は目立つものの、実践などに関する要望は少なくなっている（表4-2）。

表4-2 保育所への要望

	父親		母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
もっと熱心やってほしい	20	5.1	21	5.4
保育士が少しポルトガル語を身に付けてほしい	4	1.0	13	3.3
国籍の違いに対する差別のないように配慮してほしい	13	3.3	19	4.9
保育時間を長くしてほしい	43	11.0	76	19.4
保育について相談しやすくしてほしい	14	3.6	55	14.1
保育士ともっと連絡を取り合いたい	21	5.4	82	21.0
保育料をもっと安くしてほしい	153	39.1	194	49.6
その他	10	2.6	29	7.4
特になし	129	33.0	92	23.5
無回答など	66	16.9	9	2.3
合計	391	100.0	391	100.0

運営に関しても日本人父母たちの評価は高いようである。保育所の行っている行事への参加状況は高く（行事に「よく参加する」「ときどき参加する」が父親で78.2%、母親で94.2%）、それでいて要望は時間・開催日に関する要望を挙げる者が父親の17.4%（68人）、母親の18.9%（74人）いるのが目立つほかは、特にないようである（表4-3、4）。実際、「今のままで問題はない」という者は父親の51.7%（202人）、母親の59.6%（233人）と過半数に達している。

その結果、今の保育所に満足している者（「満足」＋「どちらかといえば満足」）は、父親の81.1%（317人）、母親の89.0%（348人）に達している（表4-5）。逆に不満を感じている者（「不満」＋「どちらかといえば不満」）は父親で4.8%（19人）、母親で8.7%（34人）しかいない。このような、保育士や保育所に対する高い評価と満足感が、外国人園児が多いという全国的に見てもめずらしい環境にあっても、そのことに対する不安、不満を感じさせないという結果に結びついていると考えられる。

表4-3 保育所の行事には参加していますか

	父 親		母 親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
よく参加する	160	40.9	297	76.0
ときどき参加する	146	37.3	71	18.2
ほとんど参加しない	29	7.4	4	1.0
参加しない	8	2.0	4	1.0
無回答など	48	12.3	15	3.8
合 計	391	100.0	391	100.0

表4-4 行事に対する要望はありますか（複数回答）

	父 親		母 親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
時間・開催日をもっと考慮してほしい	68	17.4	74	18.9
気軽に参加できる雰囲気を作ってほしい	29	7.4	40	10.2
もっと楽しい企画にしてほしい	25	6.4	39	10.0
行事をできるだけ簡素化してほしい	18	4.6	20	5.1
その他	2	0.5	4	1.0
今のままで問題はない	202	51.7	233	59.6
無回答など	66	16.9	15	3.8
合 計	391	100.0	391	100.0

表4-5 今の保育所に満足していますか

	父 親		母 親	
	度数	パーセント	度数	パーセント
満足している	195	49.9	206	52.7
どちらかといえば満足している	122	31.2	142	36.3
どちらかといえば不満	17	4.3	33	8.4
不満	2	0.5	1	0.3
無回答など	55	14.1	9	2.3
合 計	391	100.0	391	100.0

## 第2節 外国人父母の教育観と保育所観

保護者の意識の最後に、外国人父母の保育所評価を見ていくことにする。ここではまず、外国人父母の教育観から確認しておくことにしよう。

幼児期に身につけるべきことを見てみると、まずほとんどの項目が「とても重要」「やや重要」と考えられていることがわかる(表4-6)。その中でも、特に「基本的なしつけ」や「挨拶や礼儀などのマナー」は「とても重要」と答える者の割合が一際高くなっている。その一方で、「のびのびと自由に遊ばせる」ことは「あまり重要でない」と答える者が、ブラジル人で1人、ペルー人で3人いることが目を引く。

保育所に対しては、設備よりも保育者のレベルや実際の保育内容を重視する者が多くなっている(表4-7)。特に「保育者のレベル」を「とても重要」とする者はブラジル人の90.6%(29人)、ペルー人の83.3%(10人)と多くなっている。一方で、「保育時間の融通がきくこと」や、「休日保育や病後児保育」の充実を挙げる者は、ブラジル人、ペルー人とも相対的に少なくなっている。

表4-6-1 幼児期に身につけるべきこと：ブラジル人 単位：人、%

	とても重要	やや重要	どちらとも いえない	あまり重要 でない	まったく重 要でない	合 計
基本的なしつけ	19(59.4)	13(40.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	32(100.0)
のびのびと自由に遊ばせる	16(48.5)	15(45.5)	1(3.0)	1(3.0)	0(0.0)	33(100.0)
教育の基礎を教える	22(66.7)	11(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	33(100.0)
挨拶や礼儀などのマナー	23(71.9)	8(25.0)	1(3.1)	0(0.0)	0(0.0)	32(100.0)

表4-6-2 幼児期に身につけるべきこと：ペルー人 単位：人、%

	とても重要	やや重要	どちらとも いえない	あまり重要 でない	まったく重 要でない	合 計
基本的なしつけ	11(84.6)	2(15.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	13(100.0)
のびのびと自由に遊ばせる	4(33.3)	5(41.7)	0(0.0)	3(25.0)	0(0.0)	12(100.0)
教育の基礎を教える	7(53.8)	6(46.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	13(100.0)
挨拶や礼儀などのマナー	9(69.2)	4(30.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	13(100.0)

表4-7-1 保育所に必要なもの：ブラジル人 単位：人、%

	とても重要	やや重要	どちらとも いえない	あまり重要 でない	まったく重 要でない	合 計
施設の設備がよい	20(64.5)	11(35.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	31(100.0)
保育者のレベルがよい	29(90.6)	3(9.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	32(100.0)
保育内容がよい	28(84.8)	5(15.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	33(100.0)
保育時間の融通がきく	7(22.6)	15(48.4)	6(19.4)	2(6.5)	1(3.2)	31(100.0)
休日保育や病後児保育が充実	5(16.1)	14(45.2)	7(22.6)	2(6.5)	3(9.7)	31(100.0)

表4-7-2 保育所に必要なもの：ペルー人 単位：人、%

	とても重要	やや重要	どちらとも いえない	あまり重要 でない	まったく重 要でない	合 計
施設の設備がよい	6(46.2)	7(53.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	13(100.0)
保育者のレベルがよい	10(83.3)	2(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	12(100.0)
保育内容がよい	10(76.9)	3(23.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	13(100.0)
保育時間の融通がきく	4(33.3)	6(50.0)	1(8.3)	0(0.0)	1(8.3)	12(100.0)
休日保育や病後児保育が充実	4(40.0)	0(0.0)	2(20.0)	4(40.0)	0(0.0)	10(100.0)

先に確認したように、外国人父母たちはいくつかの選択肢の中から、日本の認可保育所を選んでいる。敢えて日本人園児と同じ環境に子どもたちを置いているわけであり、このことは外国人父母に特有の心配を生んでいる。

認可保育所を選んだ理由でも明らかになっているが、外国人父母たちは日本の保育所に子どもを預けることにより、日本語が身につくこと（表4-8）や日本文化が身につくこと（表4-9）を期待、歓迎している。しかし、その一方で母国の言語や文化の喪失に対する不安もまた抱えている。帰国願望が比較的強いブラジル人父母の場合、父親の48.1%（13人）、母親の45.2%（14人）が母国に戻った時の適応力の低下を特に心配している（表4-10）。また、ポルトガル語を忘れてしまうこと、ブラジル人であることを忘れてしまうことについても、4分の1以上の父母が心配をしている。それに対し、ペルー人の場合には定住志向が強いためか、ブラジル人父母のようにペルーへ帰ったときのことを心配している者は少ない。その代わりに、スペイン語を忘れてしまうことへの不安が父親で63.6%（7人）、母親で55.6%（5人）と多くなっている。

表4-8 子どもに日本語が身につくことについてどう思いますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
とてもよい	27	93.1	28	87.5	8	72.7	7	63.6
どちらかといえばよい	2	6.9	4	12.5	2	18.2	3	27.3
あまりよくない	0	0.0	0	0.0	1	9.1	1	9.1
よくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	29	100.0	32	100.0	11	100.0	11	100.0

表4-9 子どもに日本文化が身につくことについてどう思いますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
とてもよい	25	86.2	26	81.3	6	54.5	6	54.5
どちらかといえばよい	4	13.8	6	18.8	4	36.4	4	36.4
あまりよくない	0	0.0	0	0.0	1	9.1	1	9.1
よくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	29	100.0	32	100.0	11	100.0	11	100.0

このような不安を、外国人父母たちは、一つには自分たちの家庭での努力によって払拭しようと努力している。ブラジル人父母と、ペルー人の父親の8割以上は、母語の映画や絵本を子どもに見せることで、母国の文化を教えようとしている（表4-11）。また、ブラジル人、ペルー人とも、4割以上の父母が、母語をしっかりと教えていると答えている。これらの努力によって、子どもが日本文化に染まりきってしまうことを避け、母語や母国文化を守ろうとしているのである。

表4-10 日本の保育所に預けることに不安はありますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
母語を忘れそう	10	37.0	9	29.0	7	63.6	5	55.6
日本文化ばかりが身につく	6	22.2	5	16.1	1	9.1	2	22.2
ブラジル・ペルー人の友だちができない	3	11.1	3	9.7	0	0.0	0	0.0
帰国したときに対応できなくなる	13	48.1	14	45.2	2	18.2	2	22.2
ブラジル・ペルー人であることを忘れそう	7	25.9	8	25.8	0	0.0	0	0.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	6	22.2	11	35.5	2	18.2	2	22.2

表4-11 母国文化を教えるために何かしていますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
母語の映画、絵本をみせる	22	81.5	27	87.1	9	81.8	6	60.0
母語をしっかり教える	12	44.4	15	48.4	5	45.5	4	40.0
母国についての知識を教える	8	29.6	11	35.5	1	9.1	0	0.0
食事は母国の食べ物	6	22.2	8	25.8	0	0.0	1	10.0
偏見をさせる	3	11.1	4	12.9	0	0.0	0	0.0
その他	1	3.7	1	3.2	1	9.1	1	10.0
合計	27	100.0	31	100.0	11	100.0	10	100.0

次に、外国人父母たちの保育所に対する意識を見ていこう。表4-12は保育所への要望をまとめたものである。まずブラジル人では「国籍の違いに対する差別のないよう配慮してほしい」（父親43.5%、母親44.8%）と「お便りをポルトガル語にしてほしい」（父親34.8%、母親44.8%）の2つが多くなっている。日本人父母の場合に際立って多かった保育料や保育時間に関する要望はそれほど多くない。ペルー人の場合は、「お便りをスペイン語にしてほしい」と考えている者が父親の83.3%（10人）、母親の63.6%と際立って多くなっている。また、「保育士がもう少しスペイン語を身につけてほしい」という者も、父親の半数（6人）、母親の45.5%と多くなっている。

実際に保育士に相談したことをみると、ブラジル人、ペルー人とも、日本人と同様に子どもの育て方や発達についての問題を相談している例が目立つ（表4-13）。また、ブラジル人父母では保育所の保育内容に関する相談が特に父親で多くなっている（41.2%、母親は29.6%）。ペルー人の場合、様々な点に関して満遍なく相談をしているようである。

表4-12 保育所に対する要望（複数選択）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
もっと熱心にやってほしい	1	4.3	1	3.4	2	16.7	3	27.3
保育士に母国語を身につけてほしい	4	17.4	12	41.4	6	50.0	5	45.5
日本語をもっと教えてほしい	1	4.3	2	6.9	1	8.3	1	9.1
お便りを母国語にしてほしい	8	34.8	13	44.8	10	83.3	7	63.6
規則を厳しくしないでほしい	1	4.3	1	3.4	1	8.3	0	0.0
国籍による差別のないよう配慮を	10	43.5	13	44.8	4	33.3	1	9.1
給食のメニューを配慮してほしい	0	0.0	0	0.0	1	8.3	1	9.1
保育時間を長くしてほしい	5	21.7	3	10.3	3	25.0	1	9.1
保育について相談しやすくしてほしい	3	13.0	3	10.3	4	33.3	2	18.2
保育士ともっと連絡をとりあいたい	6	26.1	7	24.1	4	33.3	0	0.0
保育料をもっと安くしてほしい	8	34.8	8	27.6	8	66.7	4	36.4
その他	1	4.3	2	6.9	0	0.0	0	0.0
合計	23	100.0	29	100.0	12	100.0	11	100.0

表4-13 保育士に相談したこと（複数選択）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもの育て方について	9	52.9	11	40.7	6	75.0	3	75.0
子どもの発達についての問題	8	47.1	20	74.1	4	50.0	4	100.0
保育所の保育内容について	7	41.2	8	29.6	3	37.5	1	25.0
保育士の子どもへの接し方について	2	11.8	3	11.1	3	37.5	2	50.0
日本人父母との付き合い方について	3	17.6	2	7.4	4	50.0	1	25.0
子どもと日本人の子どもの仲について	0	0.0	8	29.6	0	0.0	2	50.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
相談することはない	4	23.5	4	14.8	0	0.0	0	0.0
合計	17	100.0	27	100.0	8	100.0	4	100.0

表4-14 今後保育士に相談したいこと（複数選択）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
子どもの育て方について	3	16.7	6	26.1	2	28.6	1	20.0
子どもの発達についての問題	4	22.2	9	39.1	3	42.9	4	80.0
保育所の保育内容について	1	5.6	5	21.7	2	28.6	2	40.0
保育士の子どもへの接し方について	5	27.8	9	39.1	1	14.3	1	20.0
日本人父母との付き合い方について	3	16.7	4	17.4	1	14.3	0	0.0
子どもと日本人の子どもとの仲について	5	27.8	6	26.1	3	42.9	1	20.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
相談したいことはない	5	27.8	6	26.1	0	0.0	0	0.0
合 計	18	100.0	23	100.0	7	100.0	5	100.0

このように、外国人父母は保育所へも多くの要望があり、また、保育士に対しても数多くの相談をしていることがわかる。これは、日本の保育所を信用していないというわけでは決してない。例えば行事では、8割から9割以上という多くの外国人父母が参加しているが、行事に対する不満はほとんどなく、「今のままで問題ない」という者がブラジル人では父親の86.2%（25人）、母親の82.4%（28人）に達している（表4-15、16）。ペルー人でも、やや少なくなはなるものの、それでも父親の58.3%（7人）、母親の70.0%（7人）と過半数を大きく超える父母に支持されている。

また、多くの外国人父母が言語的な問題を訴えているにもかかわらず、保育士とのやりとりができていないと感じている者は、ブラジル人の父親で10.7%（3人）、ペルー人の母親で30.0%（3人）いるだけであり、ブラジル人の母親とペルー人の父親では一人もいなかった。これは、後に詳しくみることになるが、保育士たちの努力による部分が大きいと考えられる。その保育士たちの努力は外国人父母たちにも伝わっているようであり、結果として今の保育所に不満を持っている父母は、ブラジル人、ペルー人とも、一人もいない。

表4-15 行事には参加しますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
よく参加する	10	37.0	17	54.8	8	66.7	6	60.0
ときどき参加する	12	44.4	11	35.5	4	33.3	3	30.0
ほとんど参加しない	4	14.8	2	6.5	0	0.0	0	0.0
参加しない	1	3.7	1	3.2	0	0.0	1	10.0
合 計	27	100.0	31	100.0	12	100.0	10	100.0

表4-16 行事に対する要望（複数選択）

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
時間・開催日を考慮して欲しい	1	3.4	2	5.9	1	8.3	0	0.0
言葉がわかるよう配慮して欲しい	4	13.8	5	14.7	3	25.0	2	20.0
気軽に参加できる雰囲気を作って欲しい	1	3.4	2	5.9	1	8.3	1	10.0
もっと楽しい企画にしてほしい	0	0.0	1	2.9	1	8.3	0	0.0
行事をできるだけ簡素化してほしい	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	10.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
今のままで問題ない	25	86.2	28	82.4	7	58.3	7	70.0
合 計	29	100.0	34	100.0	12	100.0	10	100.0

表4-17 保育士とのやりとり

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
うまくできている	16	57.1	15	45.5	3	27.3	2	20.0
だいたいできている	8	28.6	14	42.4	7	63.6	5	50.0
あまりできていない	1	3.6	4	12.1	0	0.0	1	10.0
全然できていない	2	7.1	0	0.0	0	0.0	2	20.0
わからない	1	3.6	0	0.0	1	9.1	0	0.0
合計	28	100.0	33	100.0	11	100.0	10	100.0

表4-18 今の保育所に満足していますか

	ブラジル人父親		ブラジル人母親		ペルー人父親		ペルー人母親	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
満足	25	83.3	30	88.2	8	72.7	7	63.6
どちらかといえば満足	5	16.7	4	11.8	3	27.3	4	36.4
どちらかといえば不満	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
不満	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	30	100.0	34	100.0	11	100.0	11	100.0

(野崎剛毅)

## 第5章 大泉町の保育士の意識

### 第1節 保育士たちの背景

本調査に協力してくれた対象者は、大泉町の6園の保育士90名である。その内訳は、女性83名、男性4名（不明3）、年齢は20歳から59歳までと幅広い。保育士たちの年齢層で最も多いのは20代であり、全体のおよそ4割程度である。その内訳は、20代前半が19.2%、25歳以上が21.7%となっている。次に多いのは30代であり、全体の23.1%である。40代は2割程度（20.5%）、50代は15.5%と、年齢が上に行くほど少なくなっている（表5-1）。そのため保育士としての仕事の経験も、表5-2のように全体の半数以上が10年以下である（52.3%）。20年以上の経験を持つ、いわばベテランの保育士は全体の2割程度（22.8%）と、多いとはいえない。

表5-1 保育士年齢層

	度数	有効パーセント
25歳未満	25	19.2
25～30歳未満	17	21.7
30～40歳未満	18	23.1
40～50歳未満	16	20.5
50歳以上	12	15.5

表5-2 保育士経験年数

	度数	有効パーセント
5年未満	24	27.3
5～10年未満	22	25.0
10～15年未満	14	15.9
15～20年未満	8	9.1
20～25年未満	10	11.4
25年以上	10	11.4
合計	88	100.0

そのような保育士たちが、「はじめて外国人の子どもにかかわったのは何年前か」という問いに対しては、表5-3のように全体の半数近くが6年前以前と答えている（48.2%）。その内訳をみると「5～6年前」が10.3%、「3～4年前」が16.1%であり、「1～2年前」と答えた者も21.8%となっている。一方で、初めて外国人の子どもにかかわったのが10年よりも前であると答えたものも全体の4割近い（39.0%）。中でも13～14年前が16.1%と多く、15年以上前と答えた者も10.3%存在する。

15年ほど以前といえは90年前後であり、この時期は大泉町に日系ブラジル人が多くなってきた頃である。外国人労働者の増加に伴って、彼らの子どもである外国人児童が保育所に目立つようになってきたことが推察される。また、保育士たちの居住地をみると、6割程度が大泉町に在住しており(58.8%)、隣町である太田市に住んでいる者も2割弱と、調査対象者の多くが外国人比率の多い地域に居住しているといえる(表5-4)。また、外国人の児童に初めて関わった保育所は現在の保育所であると答えた者が6割を超える(62.9%)。つまり、多くの者が現在の保育所に来て、外国人の子どもに対する保育を経験している。

表5-3 何年前にかかわったか(外国籍児童)

	度数	有効パーセント
1～2年前	19	21.8
3～4年前	14	16.1
5～6年前	9	10.3
7～8年前	11	12.6
9～10年前	4	4.6
11～12年前	7	8.0
13～14年前	14	16.1
15年以上前	9	10.3
合計	87	100.0

表5-4 現在の居住地

	度数	有効パーセント
大泉町	50	58.8
太田市	15	17.6
館林、邑楽、板倉、明和、千代田	12	14.1
栃木県	3	3.5
埼玉県	5	5.9
合計	85	100.0

## 第2節 外国人保育の現状と保育士の意識

### 第1項 外国人児童の入園

保育所が初めて外国人の子どもを受け入れたとき、園の様子はどうだったのだろうか。表5-5にあるように最も多かったのは「別に変ったことはなかった」であった(52.3%)。他に目立つ項目としては「外国人園児に手がかかり大変だった」33.7%、「外国人園児の入退園が多く落ち着かなかった」19.8%などがある。しかし、だからと言って「外国人園児を中心に活気付いた」という積極的な見方をしていた者が多いわけではない(2.3%)。保育士たちの多くは、外国人の子どもが入所してきても、園全体の様子が大きく変わることはないという捉え方をしているとみることができる。

園全体の様子は変ることがないとしても、保育士たちは初めての外国人児童の保育に対して何の不安も持たなかったわけではない。はじめて外国人の子どもに接した際に「不安はありましたか」という問に対して、「とても不安があった」「多少不安があった」と答えた者は8割近く(74.5%)、「あまりなかった」(20.0%)、「まったくなかった」(5.6%)を大きく上回っている。保育士たちの多くが、初めて外国人の子どもを前にした際に、不安を持っていたことがわかる(表5-6)。

表5-5 その時の園の様子

	度数	有効パーセント
外国人園児の入退園多く落ち着かない	17	19.8
外国人園児を中心に活気付いた	2	2.3
外国人園児に手がかかり大変だった	29	33.7
別に変った事はなかった	45	52.3

表5-6 不安はあったか

	度数	有効パーセント
とても不安があった	8	8.9
多少不安があった	59	65.6
あまり不安はなかった	18	20.0
全くなかった	5	5.6
合計	90	100.0

それでは、その不安はどのようなものなのだろうか。不安の内容をいくつかの選択肢から選んでもらったところ、「言葉が通じないと思ったから」が最も多く選択されていた（65.2%）。次いで「生活習慣が違うと思ったから」44.9%、「経験がなかったから」33.7%と続く。「子どもはどの国でも同じと思った」や「何とかかなと思った」といった楽観的な考えを選択したものは15%程度しかおらず、多くの保育士ははじめての経験に不安を抱いていたことが明らかになった（表5-7）。

表5-7 不安の理由

	度数	有効パーセント
言葉が通じないと思ったから	58	65.2
文化が違うと思ったから	23	25.8
生活習慣が違うと思ったから	58	44.9
経験がなかったから	30	33.7
子どもはどの国でも同じだと思ったから	13	14.6
何とかかなと思ったから	14	15.7

## 第2項 外国人児童の状況

それでは実際に外国人児童の様子はどうだったのだろうか。保育士が抱いていた不安の中でも多かったものに、言葉の問題があった。実際に児童の使用言語を確認してみると、「日本語」が37.9%、「日本語と少しの外国語」が36.8%と意外にも日本語を中心とした言葉が多い（表5-8）。「外国語」のみは1%程度であり、「外国語と少しの日本語」は2割程度（24.1%）である。だが全体で見れば多くはないとしても、少しでも外国語を使うのは6割を超え、そのうち2割を超えるものは日本語が不得意であると見ることができる。

表5-8 普段の使用言語

	度数	有効パーセント
外国語	1	1.1
外国語と少しの日本語	21	24.1
日本語と少しの外国語	32	36.8
日本語	33	37.9
合計	87	100.0

次に、保育所における生活全般を見てみよう。児童にとって生活の場である保育所では、外国人児童の母国の文化が出ることは、むしろ自然なことでもある。では具体的にどのような場面で多いのだろうか。母国の文化が出やすい場面として多かったのは「給食」（61.2%）、「服装」（38.8%）、「子ども同士のけんか」（27.1%）などである（表5-9）。「自由遊び」（8.2%）、「絵画や造形」（7.1%）、「リズム遊びやお遊戯」（5.9%）などは文化の違いがあまり見られないといえる。

表5-9 母国の文化が出やすい場面

	度数	パーセント
給食	52	61.2
リズム遊びやお遊戯	5	5.9
絵画や造形	6	7.1
午睡	2	2.4
自由遊び	7	8.2
子ども同士のけんか	23	27.1
服装	33	38.8

では、外国人児童は自分が外国人であることをどのように感じているのだろうか。保育士から見て、児童が国籍の違いを「意識している」と答えた者は8%程度であり、「多少意識している」(23.0%)を合わせても3割程度である(表5-10)。多くが「あまり意識していない」(48.3%)、「まったく意識していない」(20.7%)子どもたちが多くと見ている。

そのため子どもたちは、日本人と外国人というように、グループに分かれることがあるかという問に対して「ある」(2.2%)「多少ある」(29.9%)と答えた者は、合わせて3割程度である(表5-11)。「あまりない」(26.4%)、「ほとんどない」(41.4%)と答えた者が多く、子どもたちは外国人、日本人と分かれることなく、自然な交流がみられると言えるだろう。

表5-10 国籍の違いの意識

	度数	有効パーセント
意識している	7	8.0
多少意識している	20	23.0
あまり意識していない	42	48.3
まったく意識していない	18	20.7
合計	87	100.0

表5-11 国籍別にグループに分かれることはありますか

	度数	有効パーセント
ある	2	2.3
多少ある	26	29.9
あまりない	23	26.4
ほとんどない	36	41.4
合計	87	100.0

### 第3項 保育士の配慮

前述したような外国人児童に対して、保育士はどのような保育を行っているのだろうか。まず、外国人児童を保育する上で困難なことを確認してみると、多く選択されている項目では、「日本語が伝わらない」(70.1%)、「食べ物の好みが違う」(72.4%)などが目立っている(表5-12)。他に多く選択されている項目としては、「離乳の時期が遅い」の3割程度である(31.0%)。「集中できない」(13.8%)、「トイレトレーニング」(6.9%)、「午睡の習慣がない」(3.4%)、などはそう多くはない。また、「特に困難なことはない」と答えたものは1割程度(9.2%)しか選択されていないことを考えれば、保育実践上の困難は「言葉」と「食」の2点に集中しているといえよう。

表5-12 保育実践上の困難

	度数	有効パーセント
日本語が伝わらない	61	71.1
離乳の時期が遅い	27	31.0
午睡の習慣がない	3	3.4
トイレトレーニング	6	6.9
食べ物の好みが違う	63	72.4
集中できない	12	13.8

このような外国人児童の実態に対して、61.6%の保育士は子どもたちが保育所で安心して過ごせるような何らかの工夫をしている(表5-13)。

その一つとして、外国人児童の国の言葉を使用することがある。「日常の保育の中で園児の国の言葉を使用することがあるか」との問いに、「ある」「時々ある」と答えたものは4割近い(39.8%)(表5-14)。具体的な場面としては「注意を促すとき」72.2%、「ほめるとき」38.9%などである。高度の言語能力を必要とするであろう「説明するとき」「慰めるとき」などは、そう多くはないものの、乳幼児を相手とした生活において多く発言するような言葉については、外国語を使って伝えることもあるようだ(表5-15)。

表5-13 外国人園児に対する保育の工夫

	度数	有効パーセント
した	53	61.6
しなかった	33	38.4
合計	86	100.0

表5-14 園児の国の言葉を使用すること

	度数	パーセント
よくある	2	2.3
時々ある	33	37.5
あまりない	31	35.2
まったくない	22	25.0
合計	88	100.0

表5-15 園児の母語を使う場面

よくある・時々ある	度数	有効パーセント
ほめる時	14	38.9
注意を促すとき	26	72.2
説明するとき	6	16.7
慰めるとき	3	8.3

さらに保育士たちは、そのような配慮のほかにも様々な工夫を試みている。それらについて、自由記述から見てみよう。

「ゆっくり話しかけてあげたり、表情やジェスチャーを交えて接するようにしていた。」(A園)

「言葉が通じないので、行動や動作でその子の意思を理解しようとした。」(B園)

「食事、睡眠など、園に慣れるまで、その子のペースで行う。言葉はよく使う言葉を先に日本にきている親から聞いていた。」(C園)

「言葉の面では、ポルトガル語の単語(食べ物の名など生活の中でよく出るコトバ)を覚え、日本語の会話の中に混ぜ、少しでも子どもが安心しているよう配慮した。」(D園)

このように、外国人児童の国の言葉を使うだけでなく、動作や表情などの非言語的コミュニケーションを使うなどの配慮を中心として、子どもが安心して過ごせるような工夫をしていることがわかる。

そのほかに外国人児童に対する配慮としては、「給食」32.5%、「子ども同士のけんか」21.7%が、比較的多く選択されている(表5-16)。しかし、外国人児童に対する配慮に関する項目の中で最も多かったのは、「特に(外国人児童だからといった)配慮していない」である(53.0%)。「午睡」、「絵画や造形」「リズム遊びやお遊戯」「自由遊び」などは5%にも満たない程度であり、ほとんど配慮を必要としていないと捉えてよいだろう。

表5-16 外国人園児に対する配慮

	度数	有効パーセント
服装	6	7.2
給食	27	32.5
リズム遊びやお遊戯	2	2.4
絵画や造形	2	2.4
午睡	2	2.4
子ども同士のけんか	18	21.7
特にない	44	53.0

しかし、外国人の児童に対する保育を行なう上で、特に配慮を必要とする場面が多くなっても、それが直ちに外国の文化を知らなくてよいということに繋がるわけではない。表5-17のように「外国語や外国の文化を学ぶ必要性を感じますか」という問に対して、「とても必要だと思う」「多少必要だと思う」と答えた者は合わせて8割近い(78.1%)。「あまり必要はない」「まったく必要はない」と答えた者は5%にも満たない(3.4%)。

表5-17 外国語や外国の文化を学ぶ必要性

	度数	有効パーセント
とても必要だと思う	5	5.7
多少必要だと思う	63	72.4
あまり必要はない	16	18.4
まったく必要はない	3	3.4
合計	87	100.0

#### 第4項 多文化を取り入れた保育

日常の保育に、外国の文化を取り入れることはしているのだろうか。「意識して外国の文化を取り入れることはありますか」という問に対して、「よくある」「時々ある」と答えた者は全体の2割程度である(表5-18)。半数程度が「あまりない」(51.7%)であり、「まったくない」と答えた者も3割近い結果であった(27.6%)。

では、どのような文化を取り入れているのだろうか。保育の中に取り入れている文化の中で多かったのは「リズム遊び・ダンス」72.2%、「音楽」55.6%、「おやつや食事」16.7%などであった(表5-19)。「年中行事」などの、いわば園全体の行事としては取り入れておらず、ほとんどが日常の保育の一コマとして取り入れているという結果である。

表5-18 外国の文化を取り入れること

	度数	有効パーセント
よくある	3	3.4
時々ある	15	17.2
あまりない	45	51.7
まったくない	24	27.6
合計	87	100.0

表5-19 取り入れている外国の文化

よく取り入れる・時々取り入れる	度数	有効パーセント
音楽	8	44.4
リズム遊び・ダンス	13	72.2
年中行事	1	5.6
おやつや食事	3	16.7

### 第3節 保育士からみる保護者について

#### 第1項 園への協力度と教育への関心

つぎに保護者に対する意識について確認していこう。保育士たちは保護者の子育てや園への協力度についてどのように感じているのだろうか。まず、保護者の行事への参加状況を国籍別に見てみると「とてもよい」は日本人47.1%、ブラジル人14.1%であり、「まあまあよい」は日本人51.7%、ブラジル人56.5%となっている(表5-20)。逆に「あまりよくない」は日本人1.1%、ブラジル人23.5%と日本人保護者に比べ、ブラジル人保護者の行事への参加状況が低いと見ている。

では子どもの教育についての意識はどうだろうか。「教育について熱心だと思うか」という問に、日本人に対しては24.7%が、ブラジル人に対しては23.8%が「とても熱心」であると思うと答えている。逆に、4.7%が日本人に対して、20.2%がブラジル人に対して「あまり熱心でない」と感じている。ブラジル人の中には教育について熱心ではない保護者がいると考えているようだ(表5-21)。

表5-20 行事への保護者の参加状況

	日本人		ブラジル人	
	度数	有効パーセント	度数	有効パーセント
とてもよい	41	47.1	12	14.1
まあまあよい	45	51.7	48	56.5
あまりよくない	1	1.1	20	23.5
よくない	0	0.0	5	5.9
合計	87	100.0	85	100.0

表5-21 教育について熱心だと思いますか

	日本人		ブラジル人	
	度数	有効パーセント	度数	有効パーセント
とても熱心	21	24.7	20	23.8
まあまあ熱心	60	70.6	47	56.0
あまり熱心でない	4	4.7	17	20.2
まったく熱心でない	0	0.0	0	0.0
合計	85	100.0	84	100.0

それらの点を「しつけ」という観点から見てみると、しつけについて「とても厳しい」は、日本人3.6%、ブラジル人3.6%、「まあ厳しい」は、日本人42.9%、ブラジル人29.8%であり、「厳しくない」を見ると、日本人1.2%、ブラジル人11.9%と、やはりブラジル人保護者の中には、しつけに「厳しくない」層が日本人に比べて多く存在していると見ていることがわかる（表5-22）。しかしながら、ブラジル人保護者のすべてが、教育に熱心でないと見ている訳ではなく、むしろ教育に「熱心」であり、しつけについても「厳しい」層は、日本人と同程度存在しているといえる。

表5-22 しつけについて

	日本人		ブラジル人	
	度数	有効パーセント	度数	有効パーセント
とてもきびしい	3	3.6	3	3.6
まあきびしい	36	42.9	25	29.8
あまりきびしくない	44	52.4	46	54.8
きびしくない	1	1.2	10	11.9
合計	84	100.0	84	100.0

## 第2項 保護者の交流

日本人保護者と外国人保護者はどのような付き合いをしていると見ているのだろうか。保護者同士の交流について聞いたところ、最も多かったのは「会えば挨拶をする程度」（70.8%）である（表5-23）。「行事の際に話をしているようだ」（21.3%）「子どもを通じて話をしているようだ」は共に2割程度である（20.2%）。だが、僅かであるが「家の行き来をしているようだ」も存在しており（4.5%）、「特に交流している様子はない」（18.0%）と見ている者は2割以下である。それらのことを合わせて考えれば、保育士たちは日本人保護者と外国人保護者の付き合いについて、程度の違いはあるものの、交流があると見ているようだ。

表5-23 保護者同士の交流

	度数	パーセント
日常的に顔を合わせているようだ	9	10.1
会えば挨拶をしているようだ	63	70.8
行事の際に話をしているようだ	19	21.3
子どもを通じて話しているようだ	18	20.2
家の行き来をしているようだ	4	4.5
特に交流している様子はない	16	18

では保育士と保護者の関係はどうだろうか。保育所では日常的に保育や子育てに関する相談の対応をしており、保育所の重要な機能の一つに位置づけられている。「保護者から相談を受けることはありますか」という質問に「相談を受けることはない」と答えた者は1割程度（14.6%）であり、9割近くの保育士は保護者からの相談を受けていることになる（表5-24）。では、外国人保護者も同様に相談しているのだろうか。「日本人からは受ける」と答えた者は14.6%だけであり、多くの保育士は「（日本人、外国人）どちらからも相談を受ける」であった（70.8%）。

その場合、外国人保護者と日本人保護者では相談の内容が異なっているのだろうか（表5-25）。「外国人と日本人で違いはありますか」という質問に対して「多少違う」と答えたのは2割程度（19.3%）で、多くは「あまり違いがない」と受け止めている（75.4%）。「全く違いはない」と答えた者は5%程度とごく僅かであることを考えると、多少の違いはあるものの、同じような内容の傾向であると見ることができる。

表5-24 保護者からの相談

	度数	有効パーセント
どちらからも受ける	63	70.8
日本人からは受ける	13	14.6
相談を受けることはない	13	14.6
合 計	89	100.0

表5-25 相談内容の違い

	度数	有効パーセント
多少違う	11	19.3
あまり違いはない	43	75.4
全く違いはない	3	5.3
合 計	57	100.0

このように、保護者からの相談に対応している保育士たちであるが、外国人の保護者に対して、日本人保護者と同様に保育所での生活を理解し、子どものことについても気軽に相談してもらうために、様々な工夫をしている。次にそれらについて見てみよう。

### 第3項 保護者への配慮

保育所では保護者に対して、園における子どもたちの様子を伝えることや、保育に対して協力を求める内容の配布物（園だより）を出している。一般的には日本語で書かれているが、外国人保護者にとっては理解が難しいこともある。そのため一部の園では、保護者の国の言葉に翻訳することもあるようだ。「配布物を翻訳することがありますか」という問いに、「だいたい翻訳する」（23.9%）、「時々翻訳する」（47.7%）を合わせると、7割以上が配布物を翻訳している（表5-26）。また、「何語に翻訳しているか」という問いには、「ポルトガル語」が最も多く、96.6%とほとんどの園で翻訳されている。また僅かであるが「スペイン語」（15.3%）、「英語」（10.2%）も見られる（表5-27）。

では、それらの配布物は誰が翻訳しているのだろうか。最も多かったのは「保護者」の49.2%である。次いで「保育士」の37.3%、「その他」（多くは役場職員であった）の32.2%である。「卒園児の保護者」は5.1%だけであり、多くは保護者のボランティアと保育士の努力によってそれがなされていることがわかる（表5-28）。

表5-26 園だよりの翻訳

	度数	有効パーセント
だいたい翻訳する	21	23.9
ときどき翻訳する	42	47.7
ほとんどしていない	15	17.0
まったくしていない	10	11.4
合 計	88	100.0

表5-27 翻訳する言語

	度数	有効パーセント
ポルトガル語	57	96.6
スペイン語	9	15.3
英語	6	10.2

表5-28 翻訳者

	度数	有効パーセント
保育士	22	37.3
保護者	29	49.2
卒園児の親	3	5.1
その他	19	32.2

#### 第4項 外国人保護者とのコミュニケーション

前述したように、保育所では、外国人保護者とのコミュニケーションに対して、様々な創意工夫をしていることがうかがえた。保育者たちの工夫を自由記述から見てみよう。

まず、言葉が通じないという問題に対しては、身振り手振りなどのボディ・ランゲージで対応している。

「身振り、手振りでわかりやすくする。」(D園)

「なるべくジェスチャーをつけ、必ず目を見て話す」(D園)

「言葉が通じない分、身体や動きで(オーバーに)表現して伝える。」(A園)

などである。また、そのような動きに加えて、日本語をわかり易く伝える工夫や、外国人保護者の国の言葉で伝えるなどの工夫をしている例も多かった。

「ゆっくり話す。注意など向こうの言葉で話す。手紙にひらがなをつける等」(A園)

「身振り手振り。簡単な言葉をくりかえす」(E園)

「一日の出来事をローマ字英語で手紙にして渡したり、なるべく一言でも保護者と話すようにした。」(E園)

「保護者と連絡を多く取るようにした(直接対話して)。その際、簡単な辞書を使ったり、あとは、図に書いたりジェスチャーで伝えるようにした。」(D園)

「ポルトガル語の辞書や会話の本を購入して参考にした」(A園)

「母親に、おはよう、食べる、ありがとう、などetc…その子の国の言葉、言語の発音など、いろいろなことを聞いた。」(B園)

このように、保育士たちは外国人保護者と積極的に関わるように心がけ、その際には出来るだけ外国人保護者が理解できるように、ゆっくりとした日本語や、ローマ字のふりがな、そして保護者の国の言葉を学習し伝えるなどの努力をしている。

また、次のように通訳を介してコミュニケーションを取っている例も見られた。

「保育園やコミュニケーションに必要な言葉を書き留めたり、単語は覚えるように努力した。ポルトガル語、スペイン語の子が多く、英語が通じなかったため、保育に必要な文章を作成しておいた(通訳の方をお願いした。)」(D園)

「単語帳のようなものを用意した。言葉を、生活に必要な最低限を覚えた。父母と納得のいくまで話をした(通訳を通して。)」(D園)

「日本語がわかる父母に通訳してもらった。」(B園)

このように、通訳を介してコミュニケーションを取っている例は、そう多くはないが、通訳を介することで、具体的な詳しい話が出来るという利点がある。外国人保護者とのコミュニケーションが「あまりうまくいっていない」(14.6%)、「うまくいっていない」(4.5%)理由として、「だいたいのことは通じるが、うまく伝わらないこともあり、トラブルになったことがあった。」(F園)のように、大まかな話は理解できても、詳細な内容を伝えることは難しいとの声が多い。その様な場合、通訳を介して話をする事で、細かい部分までしっかりと伝わる。その結果、外国人保護者が誤解をしてトラブルに発展することを未然に防ぐ効果があると考えられる。

さて、このような現状の中で、保育士たちは外国人保護者との関係をどのように捉えているのだろうか。「外国人保護者とのコミュニケーション」についてどの程度うまく行っているのかを聞いたところ、最も多かったのは「だいたいうまくいっている」であり、全体の7割を超える(75.4%)。「うまくいっている」(6.7%)を加えると8割を超える保育士が外国人保護者との関係が上手くいっていると考えている(表5-29)。

表5-29 外国人保護者とのコミュニケーション

	度数	有効パーセント
うまくいっている	6	6.7
だいたいうまくいっている	66	74.2
あまりうまくいっていない	13	14.6
うまくいっていない	4	4.5
合計	89	100.0

## 第5項 保護者の変化

保育士たちは、これまでに見たような努力をして保護者に対応しているが、保護者に対してはどのような思いを抱いているのだろうか。「現在の保護者と10年前の保護者とでは違いがあるか」と聞いたところ、約半数が「ある」と答えている(52.6%)。「多少ある」(39.5%)を加えると9割以上が現在の保護者が以前とは違ってきていると感じている(表5-30)。

表5-30 日本人保護者の変化

	度数	有効パーセント
ある	20	52.6
多少ある	15	39.5
あまりない	3	7.9
合計	38	100.0

その内容を自由記述から見てみると以下のような指摘が多かった。

「10年くらい前は肝っ玉母さん的なお母さんが多かったが、今はあまり子どもに関心を持たないお母さんが増えた感じがする」(C園)

「子どもにあまり関心がない。自分中心の生活や態度が見られる。」(E園)

「子どもの事に、真剣な人とあまり関心を持たない人と分かれてきている。保護者の普通の話し方では通じなく、わかってもらえることが少なくなってきた。」(D園)

以上のような記述以外にも、子育てや保育所に対する理解が低くなっているように受け止めている記述が多く、保護者との関係に難しい側面が現れてきたと感じている。

このような変化は、外国人保護者に対しても同様である。次に外国人児童を取り巻く変化を見てみよう。外国人保護者について「現在の保護者と10年前の保護者に違いはあるか」との問に対して、「ある」「多少ある」答えた者は表5-31のように7割を超える（32.4%、38.2%）。その内容について自由記述からみてみよう。

表5-31 外国人保護者の変化

	度数	有効パーセント
ある	11	32.4
多少ある	13	38.2
あまりない	10	29.4
合計	34	100.0

「園児の親（保護者）の意識が違ってきているように思う。以前より子どものしつけが出来ていない。日常生活の中での約束事が守られない。最初に出会った頃の保護者は日本の保護者以上にしっかりとしつけや行動をしている人がいた。」（D園）

「親の仕事の都合により転入、転出が多くなった。保育園行事に対し関心がうすい。」（D園）

「平成元年より外国の子供たちを受け入れています。その頃の方々は多少なりとも日本語を学んで来ていましたが、最近の方々はまったく知らなくても平気な様子。1～2年たつと、子どもが通訳をしてくれています。また以前の方が暖かみのある人が多かったようにも思う。」（D園）

このように、以前よりも子育てや保育所への理解と協力が低くなっていると感じている保育士が多いようだ。さらに、外国人保護者の日本語能力が低下していると感じている記述も見られた。しかし、全ての保育士が、否定的な見解を持っているわけではない。中には、外国人保護者について肯定的に捉えている保育士も見られる。

「外国人の入園数が増えたことで、友だち（外国人同士）ができたり、家族ぐるみのお付き合いがあったり、気持ちが安定してきていると思う。（もちろん例外はありますが）」（B園）

「最近では外国人の子の人数が増えたため、外国人の子とばかりではなく、いろんな子と遊びかわっている。」（D園）

このように、先ほどの記述では外国人児童が増加したことでマイナス面が目立っていたが、僅かではあるが外国人児童が増加したことをプラスに捉えている保育士も存在するのである。

#### 第4節 混成保育の評価

では保育士たちは、保育所に外国人児童を入園させることをどのように捉えているのだろうか。「外国人園児が入園することに対して」「とてもよいことだ」と考えている者は25.7%、「どちらかといえばよい」の50.0%と合わせると、7割を超える者が混成保育を肯定的に捉えている（表5-32）。

一方で「あまり望ましくない」23.0%、「望ましくない」1.4%も見られることは、見逃すことが出来ない。

表5-32 外国人園児が入園することに対して

	度数	有効パーセント
とてもよいことだ	19	25.7
どちらかといえばよい	37	50.0
あまり望ましくない	17	23.0
望ましくない	1	1.4
合計	74	100.0

その内容について、いくつかの項目を用意して「とても思う」から「まったく思わない」まで5つの尺度で聞いてみた（表5-33）。

まず混成保育についてのメリットとして考えられる、「子どもたちの国際的な視野が広がる」という項目について尋ねたところ、「とても思う」「やや思う」という肯定的な選択をしたものは2割に満たない結果であった（15.7%）。逆に「あまり思わない」「まったく思わない」を選択したものは3割を超える（34.5%）。しかし、もっとも多く選択されたのは「どちらともいえない」である（47.8%）。

次に子どもたちが保育所で使う言葉について尋ねてみた。まず、「保育所では日本語を使うべき」という項目について、「とても思う」「やや思う」と答えたものは、合わせても2割に満たない（15.7%）。それに反して、「あまり思わない」「まったく思わない」と答えたものは半数近く（46%）、外国人の子どもが無理に日本語を使わなくともよいと考える傾向が多いと見ることができる。ただし、そのことは、外国人児童が母国の言葉を使うことを当然と考えていることと同じではない。なぜなら、「その国の言葉を使うのは当然だ」という項目については、「とても思う」「やや思う」と答えたものは合わせて26.4%と、それほど多く選択されていないからである。ただし、「あまり思わない」「まったく思わない」と答えたものも29.8%と同程度であり、もっとも多いのは「どちらともいえない」である（43.7%）。

そして、外国人児童が「母国の言葉を覚える必要がある」という項目についても、「とても思う」「やや思う」と答えたものは合わせても2割に満たない結果であり（13.7%）。むしろ「あまり思わない」「まったく思わない」は4割近く選択されている（42.5%）。

表5-33 混成保育について

	とても・やや思う	どちらともいえない	あまり・全く思わない
子どもたちの国際的な視野が広がる	16 (17.7)	43 (47.8)	31 (34.5)
保育所では日本語を使うべき	14 (15.7)	34 (38.2)	41 (46.0)
その国の言葉を使うのは当然だ	23 (26.4)	38 (43.7)	26 (29.8)
母国の言葉を覚える必要がある	12 (13.7)	38 (43.7)	37 (42.5)

このような結果を踏まえると、保育所での外国人児童の言葉については、日本語を使うことを強要する訳ではないが、だからと言って外国人児童の母語の習得を重視しているわけではなく、そのことについてはむしろ消極的ともいえる。日本の保育所に入所している外国人児童がどの国の言葉を使うかについては、まだ何が良いのかわからないと考えている者が多いと見ることができる。

それでは混成保育についての是非を自由記述から見てみよう。まず、混成保育に肯定的な意見である。

- ①「外国人園児というのではなく、子どもは子ども同士で育ちあうことが大切だと思うから。」(A園)
- ②「お互いによい刺激を受けて成長している姿が見られる。国は違えど子どもは子ども。それぞれの文化を大切にしながら、相手の習慣を受け入れることは無意味ではないと思う。」(A園)
- ③「子どもの偏見がなくなる。他国の言葉を自然と覚える。」(F園)
- ④「外国人だからということで特別視はしないので、どの子ども入園が必要ならば、入ってくるのは当然だと思う。」(B園)
- ⑤「保育に欠ける児童を保育するのが、私たちの役目なので、外国人だから良いとか、悪いとか感じたことはないです。」(B園)
- ⑥「日本での生活に必要な言葉など、小さいうちに覚えた方がらくだと思う。」(D園)

肯定的な意見を見ると、まず①のように、外国人児童という特別な見方をしないことが肯定の理由という見方がある。また②③のように、異文化交流という意味で、外国人児童との関わり方を肯定的に捉えている見方もある。④⑤は保育所の社会的な機能である「保育に欠ける児童を保育する」という保育の目的を踏まえての発言も見られる。そして、⑥のように、外国人児童の生活を考え、保育所での生活が日本での生活の基礎を作るという考えから肯定している見方がある。

では次に否定的な意見を見てみよう。

- ⑦「年々、外国人園児は増加している。ちゃんとしている家庭もあるが、保育料滞納、親が園行事に無関心、親が日本語を習得しないなど、親への問題が多くあり、それによって子どもにも問題が発生してくる。」(A園)
- ⑧「入園するにあたり親の姿勢を変えるべき。子どもの為にも保育士と一緒に協力してほしい。」(E園)
- ⑨「保育所を必要として入園希望があるのだから、本当は良いことだと思う。しかし、文化や言葉の壁など、不安材料はとても多いので、どちらか決めることは難しい。」(F園)
- ⑩「文化や習慣の違いがある為、慣れるのに時間がかかる。言葉がわからず、ケンカ・トラブルになることがある。」(E園)

否定的な意見では、⑦⑧のように、親の子育てや園への協力についての態度から否定的な考えにつながる場合と、⑨⑩のように、子どもを含めた文化や言葉の違いを理由とすることが多かった。

## 第5節 保育に関する考え

最後に保育に関する考えについて、保育士たちの考えをみてみよう。まず、保育所で重視されることについて「施設の設定が良いこと」「保育士のレベルがよいこと」「保育内容がよいこと」「保育時間の融通がきくこと」「休日保育や病後児保育」の項目を用意し、「とても重要」から「まったく重要でない」まで5つの尺度で選択してもらった(表5-34)。

その結果を見ると、「とても・やや重要」と捉えている項目の中で最も多かったのは、「保育内容がよいこと」(95.4%)、「保育士のレベルがよいこと」(87.0%)などである。一方で「保育時間の融通がきくこと」(58.6%)、「休日保育や病後児保育」(41.7%)は半数程度であり、「とても重要」

と考えるものは少ない。保育士たちは、保育所では保育の内容が重要であり、それを実現するためにも「保育士のレベル」や「施設の設備」は大切であると考えていると捉えられる。

次に、保育の内容について「子どもにとってどの程度重要だと思うか」という視点でいくつかの項目を用意して聞いてみた（表5-35）。「とても・やや重要」と考えている者が多い項目を見ると、「のびのびと自由に遊ばせる」（96.6%）「さまざまな経験をさせる」（98.8%）、「基本的な生活習慣を身につけさせる」（98.8%）などが多く選択されていた。逆に、「教育の基礎を教える」については「とても・やや重要」と考えるものが半数程度しかいない（50.6%）。このことから保育士たちは、保育内容についてのびのびと自由に遊ばせながら、さまざまな経験をさせ、基本的な生活習慣を身につけることが重視されると考えている。

表5-34 保育所において重視されること

	とても重要	やや重要	どちらともいえない	あまり・全く重要でない
施設の設備がよいこと	38 (44.7)	35 (41.2)	11 (12.9)	1 (1.2)
保育士のレベルがよいこと	54 (63.5)	20 (23.5)	11 (12.9)	0 (0.0)
保育内容がよいこと	63 (73.3)	19 (22.1)	4 (4.7)	0 (0.1)
保育時間の融通がきくこと	17 (19.5)	34 (39.1)	31 (35.6)	5 (5.7)
休日保育や病後児保育	10 (11.9)	25 (29.8)	32 (38.1)	17 (20.2)

表5-35 保育所において重視されること

	とても重要	やや重要	どちらともいえない	あまり・全く重要でない
基本的な生活習慣を身につけさせること	64 (74.4)	21 (24.4)	1 (1.2)	0 (0.1)
のびのび自由に遊ばせること	72 (82.8)	12 (13.8)	3 (3.4)	0 (0.2)
教育の基礎を教えること	18 (21.2)	25 (29.4)	33 (38.8)	9 (10.6)
挨拶や礼儀などのマナーを教えること	47 (54.0)	30 (34.5)	8 (9.2)	2 (2.3)
様々な経験をさせること	68 (78.2)	17 (19.5)	1 (1.2)	0 (0.1)

以上のように外国人児童の比率が高い大泉町の保育所では、自らもその地域に生活している保育士が、外国人保育に関わっている。年齢層や経験から言えば、決してベテランばかりではない。多くの保育士は不安を抱きながら外国人児童との保育をスタートしている。保育士たちの不安は、言葉や生活習慣などの文化の違いによるものが多く、実際にも給食や言葉などによる困難が大きい。そのため保育士たちは園児の母国の言葉を使うことや、食べ物などへの配慮をしている。また多くの保育士は外国の文化を学ぶ必要性を感じている。しかし、文化を学ぶ必要性を感じていても、自らの保育に外国の文化を取り入れることはしていない。つまり保育士たちにとって、外国人児童への保育はあくまで日本の保育スタイルに基づいて行われているのである。

また保育士たちの困難は、子どもに対することだけではない。外国人保護者の言葉や生活習慣の違いから、外国人児童の保護者への対応にも苦慮している。保護者とのコミュニケーションをとるため、様々な工夫を行っている。そのためか、コミュニケーションは概ね上手く行っていると捉えているが、一方では外国人保護者に対する厳しい見方も目立つ。

このように保育士たちは、様々な工夫をしながら混成保育を行っている。また外国人児童の入所に対して概ね肯定的な考えを持っている。しかし詳細に見れば、その結果は園によって異なる傾向も見られた。そこで次章ではこの結果を園ごとに確認してみよう。

(品川ひろみ)

## 第6章 保育所別にみた保育士の意識

前章では、保育士から見た外国人保育の実情や意識についての全体平均を見てきた。だが1章で見たように、保育所における外国人児童の比率はA園、B園、F園の3園は3%~6%と低く、C園、D園、E園の3園は20%以上と、外国人児童の比率は園によって異なっている。一般的に外国人児童が多い園と少ない園では、保育のあり方や保育士の意識に違いが見られることが予測される。

そのことを踏まえて外国人保育の実情や保育士の意識を園ごとに見てみると、外国人児童の多寡によって異なる傾向が見られる一方で、同じように外国人児童が多い園であっても、保育のあり方や保育士の意識には違う面も確認された。そこで本章では、外国人児童の比率に留意しながら、保育所別に保育の実情や保育士の意識を確認していきたい。

### 第1節 保育士たちの背景

はじめに保育士たちの背景を見てみよう。保育士の年齢層を園別にみると、園によってかなりの違いがあることがわかった(表6-1)。20代を見ると、A園は平均に近い41.2%であるが、B園、E園、F園はそれを上回っている。特にF園は80%とかなり高い比率になっている。一方でC園、D園は平均を下回っており、中でもD園は1割にも満たない(9.1%)。また、40代以上の保育士は、E園、F園では18.2%、10.0%と2割以下であるが、C園では46.2%、D園では72.8%と多く、保育士の年齢構成は園によって大きく異なることがわかる。

表6-1 保育士年齢

	20代		30代		40代		50代	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	7	41.2	4	23.6	3	17.7	3	17.7
B園	8	50.1	3	18.9	3	18.9	2	12.6
C園	3	23.1	4	30.8	3	23.1	3	23.1
D園	1	9.1	2	18.2	4	36.4	4	36.4
E園	5	45.5	4	36.4	2	18.2	0	0.0
F園	8	80.0	1	10.0	1	10.0	0	0.0

そのことは、保育士としての経験年数にも表れている。保育士経験が10年未満の園を見ると、E園とD園は64.1%、80.0%と、経験年数の少ない保育士が多い(表6-2)。一方でC園とD園では10年未満の保育士は35.5%、30.8%と、経験年数が少ない保育士の比率は低い。逆にこの2園では、10年以上のベテラン保育士が6割以上となっている(C園63.9%、D園69.3%)。

このように、年齢層や保育士としての経験年数が異なる各園であるが、外国人の子どもに対する保育経験は、どうだろうか。全体では6年前後と答えた者が多かった。外国人の児童に初めてかかわった時期を、今から「6年程度」「7~12年」「13年以上前」の3つの時期に分けて見てみたところ、やはり経験の少ない保育士が多いE園、F園では6年程度が53.9%、72.7%と、外国人児童とかかわった経験年数が少なく、C園、D園のように経験年数が多い保育士の比率が高い園では、13年以上前と答えた者が30.8%、46.2%と他の園と比較しても多い結果であった(表6-3)。

また、「その際の園は現在の園か？」との問いには、D園、E園、F園はそれぞれ92.3%、78.6%、100%と高い比率で選択されていた(表6-4)。E園、F園については、これまで見てきたように、

若く経験の少ない保育士が多いということから、当該園に来て初めて外国人児童に関わったことが考えられるが、ベテランが多いD園の保育士たちも、当該園に来て初めて外国人の児童と関わったと見ることができる。

表6-2 保育士経験

	5年未満		5～10年未満		10～20年未満		20年以上	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	2	11.1	8	44.6	3	16.7	5	27.9
B園	6	31.7	4	21.1	6	31.7	3	15.9
C園	4	28.4	1	7.1	5	35.5	4	28.4
D園	2	15.4	2	15.4	3	23.1	6	46.2
E園	4	28.5	5	35.6	5	35.6	0	0.0
F園	6	60.0	2	20.0	0	0.0	2	20.0

表6-3 外国人児童の保育経験

	1～6年前程度		7～12年前程度		13年以上前	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	8	44.4	6	33.3	4	22.3
B園	8	42.1	6	31.6	5	25.8
C園	6	46.2	3	23.1	4	30.8
D園	5	38.5	2	15.4	6	46.2
E園	7	53.9	4	30.8	2	15.4
F園	8	72.7	1	9.1	2	18.2

表6-4 現在の保育所か

	現在の園である		現在の園ではない	
	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	10	58.8	7	41.2
B園	7	35.0	13	65.0
C園	5	35.7	9	64.3
D園	12	92.3	1	7.7
E園	11	78.6	3	21.4
F園	11	100.0	0	0.0

## 第2節 外国人児童の現状と保育士の意識

### 第1項 外国人児童の入園

はじめて外国人の子どもに接した際の、保育士たちの意識についても、園によって異なる結果であった（表6-5）。「不安はありましたか」という問に対して、「とても不安があった」「多少不安があった」と答えた者は平均では8割近かったが、園別に見てみると、A園、B園、C園、F園では6～7割であるのに対して、外国人比率が高いD園とE園は共に9割を超える保育士が不安を抱いていた。また、同じように外国人比率が高いC園は「多少不安があった」と答えた者が6割程度と、他の2園と比較すると不安が少ない結果となっている。ではどのようなことに不安を抱いたのだろうか。その理由を見てみると、D園では「言葉が通じないと思った」（84.6%）、「経験がなかった」（61.5%）が他と比べて高い比率になっている（表6-6）。一方E園は「言葉が通じないと思った」が他と比較して多く選択されている（78.6%）。またC園では、はじめて外国人児童に接した際の不安は、特に高い比率ではなかったが、その内容では「経験がなかったから」と答えたものがE園以上に高い結果であった（92.9%）。このことから、一言で不安を抱くといっても、不安の質については園によって異なっており、外国人比率の高さだけでは説明することができないといえる。

一方で不安とは対照的な意識である、「子どもはどこの国でも同じだと思った（だから不安はな

かった)」「何とかなると思った」という選択肢はD園とE園ともに、ほとんど選択されず「何とかなると思った」について、E園で僅か1名だけが選択しているという結果と、この2園では外国人保育に対して慎重な意識が見られた(表6-7)。

表6-5 不安はあったか

	あった		多少あった		あまりなかった		なかった	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	14	77.8	4	22.2	0	0.0
B園	2	10.0	10	50.0	5	25.0	3	15.0
C園	0	0.0	9	64.3	4	28.6	1	7.1
D園	3	23.1	9	69.2	1	7.7	0	0.0
E園	2	14.3	11	78.6	0	0.0	1	7.1
F園	1	9.1	6	54.5	5	36.4	0	0.0

表6-6 不安の理由

	言葉が通じない		文化が違う		生活習慣が違う		経験がなかった	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	10	55.6	13	72.2	9	50.0	13	72.2
B園	11	55.0	17	85.0	13	65.0	12	60.0
C園	7	50.0	11	78.6	8	57.1	13	92.9
D園	11	84.6	7	53.8	4	30.8	8	61.5
E園	11	78.6	9	64.3	8	57.1	4	28.6
F園	8	80.0	9	10.0	7	70.0	9	90.0

表6-7 外国人児童に対する意識

	子どもはどこの国でも同じ		何とかなると思った	
	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.6	3	16.7
B園	4	20.0	6	30.0
C園	5	35.7	3	21.4
D園	0	0.0	0	0.0
E園	0	0.0	1	7.1
F園	3	30.0	1	10.0

それでは、保育所が初めて外国人の子どもを受け入れたときは、園による違いはあったのだろうか(表6-8)。全体で見たときは半数程度が、「別に変ったことはなかった」と捉えていた(52.3%)。だが園ごとに見てみると、それも異なっていることがわかった。全体では2割程度であった「外国人園児の入退園が多く落ち着かなかった」は、外国人児童が多いD園では38.5%、E園では61.5%も選択されている。また、「外国人園児に手がかかり大変だった」もE園では半数程度(53.8%)、C園、D園でもそれぞれ4割近くの保育士がそう答えている(38.5%)。逆に「別に変わったことはなかった」は、外国人児童の少ない園、特にA園やF園では7~8割と高い割合で選択されていた。

表6-8 園全体の雰囲気

	外国人園児の入退園が多く落ち着かなかった		外国人園児を中心に活気づいた		外国人園児に手がかかり大変だった		別に変わりはなかった	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	0	0.0	5	29.4	12	70.6
B園	2	10.5	0	0.0	5	26.3	11	57.9
C園	2	15.4	0	0.0	5	38.5	6	46.2
D園	5	38.5	2	15.4	5	38.5	5	38.5
E園	8	61.5	0	0.0	7	53.8	2	15.4
F園	0	0.0	0	0.0	2	18.2	9	81.8

## 第2項 外国人児童の状況

それでは実際に外国人児童はどのような様子だったのだろうか。はじめに外国人児童の使用言語を確認してみよう（表6-9）。外国人児童の使用言語をみると、園ごとに異なる傾向を示していた。「外国語のみが多い」を選択したものは僅かだが、「外国語と少しの日本語」を合わせると、C園は42.8%、D園は46.2%、E園が50%とやはり、外国人児童の比率が高い園で多くなっている。

表6-9 外国人児童の使用言語

	外国語		外国語と少しの日本語		日本語と少しの外国語		日本語	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	1	5.9	9	52.9	7	41.2
B園	0	0.0	0	0.0	7	38.9	11	61.1
C園	1	7.1	5	35.7	5	35.7	3	21.4
D園	0	0.0	6	46.2	3	23.1	4	30.8
E園	0	0.0	7	50.0	4	28.6	3	21.4
F園	0	0.0	2	18.2	4	36.4	5	45.5

つぎに、外国人児童の母国の文化が出やすい場面を園ごとに見てみた。その中で、多く選択されており、園ごとに異なる傾向だった項目としては「給食」「子ども同士のけんか」「自由遊び」「リズム遊びやお遊戯」「絵画や造形」などがある。特に「給食」などは平均では60%前後であるが、外国人児童の多いC園、D園、E園ではすべて7割を超える（表6-10、11）。また、「子ども同士のけんか」もE園ではさほど多くないものの、C園、D園では5割前後と多くなっている。

このように、母国の文化に関する違いを見ると、外国人児童が多い園と少ない園というように、分類される。それでは外国人児童の様子はどのようなのだろうか。保育所の中で園児が「国籍別にグループに分かれることはあるか」という問いに対して、「ある」「多少ある」と答えた者は、他の園が10%前後であるのに対して、外国人比率が高いC園、D園、E園では5割～8割近くと（53.9%、76.9%、50.0%）、非常に高くなっている（表6-12）。

では、園児たちは国籍の違いを意識しているのだろうか。園児たちが国籍の違いを意識しているかどうかについて「意識している」から「意識していない」まで4つの尺度で聞いたところ、「意識している」「多少意識している」と答えたものは、A園（35.2%）、C園（30.8%）、D園（46.2%）、E園（42.9%）で多い結果となった（表6-13）。

表6-10 母国の文化が出やすい場面

	服装		給食		自由遊び	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	3	17.6	9	52.9	1	5.9
B園	6	35.3	10	58.8	0	0.0
C園	5	35.7	11	78.6	3	21.4
D園	10	83.3	9	75.0	1	8.3
E園	6	42.9	10	71.4	2	14.3
F園	3	27.3	3	27.3	0	0.0

表6-11 母国の文化が出やすい場面

	子ども同士のけんか		絵画や造形	
	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.9	2	11.8
B園	7	41.2	0	0.0
C園	6	42.9	1	7.1
D園	6	50.0	2	16.7
E園	2	14.3	1	7.1
F園	1	9.1	0	0.0

表6-12 国籍別のグループに分かれることはあるか

	ある		多少ある		あまりない		全くない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	2	11.8	5	29.4	10	58.8
B園	0	0.0	2	10.5	4	21.1	13	68.4
C園	2	15.4	5	38.5	2	15.4	4	30.8
D園	0	0.0	10	76.9	2	15.4	1	7.7
E園	0	0.0	7	50.0	7	50.0	0	0.0
F園	0	0.0	0	0.0	3	27.3	8	72.7

表6-13 国籍を意識しているか

	意識している		多少意識している		あまりしていない		全くしていない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	3	17.6	3	17.6	5	29.4	6	35.3
B園	1	5.3	4	21.1	9	47.4	5	26.3
C園	1	7.7	3	23.1	5	38.5	4	30.8
D園	2	15.4	4	30.8	6	46.2	1	7.7
E園	0	0.0	6	42.9	8	57.1	0	0.0
F園	0	0.0	0	0.0	9	81.8	2	18.2

### 第3項 保育士の配慮

そのため、保育士たちは様々な工夫をするが、それについても、表6-14のように外国人園児数が多い保育所の比率が高かった（D園、E園共に69.2%）。

では、具体的にどのような工夫をしているのだろうか。保育における工夫として、「園児の国の言葉を使用することはあるか」という項目を、園ごとに比較してみると、D園だけが「よくある」「時々ある」を合わせ84.6%と、非常に高い割合となっている。他は「よくある」「時々ある」を合わせても50%に満たない園が多い。また、D園と同様に外国人園児が多いE園は、7.1%と少なく、「あまりない」「全くない」を合わせて9割以上とまったく逆の傾向を示していた（92.9%）（表6-15）。そのため、D園では子どもを「ほめる時」や「注意を促すとき」などにはそれぞれ35%、61.5%の保育士が園児の母国の言葉を使うことがあるが、同じように外国人が多いC園ではどちらも2割程度であり（21.4%）、E園ではそのどちらも僅か7.1%しか選択されていない（表6-16）。

表6-14 外国園児に対する工夫

	した		しなかった	
	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	11	64.7	6	35.3
B園	11	57.9	8	42.1
C園	6	46.2	7	53.8
D園	9	69.2	4	30.8
E園	9	69.2	4	30.8
F園	7	63.6	4	36.4

表6-15 園児の国の言葉を使うことがあるか

	よくある		時々ある		あまりない		全くない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	6	35.3	7	41.2	4	23.5
B園	0	0.0	7	36.8	7	36.8	5	26.3
C園	0	0.0	4	28.6	6	42.9	4	28.6
D園	2	15.4	9	69.2	2	15.4	0	0.0
E園	0	0.0	1	7.1	6	42.9	7	50.0
F園	0	0.0	6	54.5	3	27.3	2	18.2

表6-16 園児の母語を使う場面

	ほめるとき		注意を促すとき		説明するとき		慰めるとき	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.6	5	29.4	0	0.0	0	0.0
B園	1	5.3	7	36.8	1	5.3	0	0.0
C園	3	21.4	3	21.4	1	7.1	1	7.1
D園	5	38.5	8	61.8	2	15.4	2	15.4
E園	1	7.1	1	7.1	0	0.0	0	0.0
F園	3	27.3	2	20.0	2	18.2	0	0.0

それでは、外国人児童の母語以外に保育の中で「意識して外国の文化を取り入れること」はあるのだろうか。この間を園別に見てみると、「よくある」「時々ある」と答えた者は、2割前後が多い中でB園は36.9%であった。一方で、E園は0%となっていた（表6-17）。

また、それ以外に外国人児童に対する配慮として多く選択され、園による傾向が異なる項目では「給食」「服装」「子ども同士のけんか」がある（表6-18）。「給食」では、ほとんどが2割前後であるのに対して、D園とE園は多く選択されていた（72.2%、50.0%）。また、「服装」では、D園とE園だけが2割程度選択されている（18.2%、21.4%）。「子ども同士のけんか」では、D園が6割を超えている（63.6%）。一方で外国人児童に対する配慮を「特にない」との選択肢を「違う」とした者は、D園で81.8%、E園で71.4%と多くなっており、やはり、外国人児童が多い園では園児に対する配慮を行っていることが明らかになった（表6-19）。

そのため、「外国語や外国の文化を学ぶ必要性」を「とても感じる」と答えたものは、全体で見れば0～5%前後だが、D園では15.4%、E園では7.1%となっている（表6-20）。

それでは保育実践上の困難は園ごとに異なっているのだろうか。全体に多く選択されている項目として「日本語が伝わらない」があるが、平均すると5割前後が多い中で、C園（84.6%）、E園（92.9%）が特に高くなっている（表6-21）。「食べ物の好みが違う」は、A園（82.4%）、D園（92.3%）で多く選択されている。また、「集中できない」「トイレトレーニング」はE園のみが、42.9%、28.6%と他の園と比較して特に高い傾向を示している。

表6-17 外国の文化を取り入れること

	よくある		時々ある		あまりない		ない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.9	3	17.6	7	41.2	6	35.3
B園	1	5.3	6	31.6	6	31.6	6	31.6
C園	1	7.7	2	15.4	7	53.8	3	23.1
D園	0	0.0	3	23.1	8	61.5	2	15.4
E園	0	0.0	0	0.0	9	64.3	5	35.7
F園	0	0.0	1	9.1	8	72.7	2	18.2

表6-18 外国人園児に対する配慮

	給食		服装		子ども同士のけんか	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	4	23.5	0	0.0	2	11.8
B園	2	11.1	0	0.0	0	0.0
C園	3	25.0	1	8.3	3	25.0
D園	8	72.7	2	18.2	7	63.6
E園	7	50.0	3	21.4	2	14.3
F園	3	27.3	0	0.0	4	36.4

表6-19 特に外国人園児に配慮はしていない

	違う		その通り	
	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	6	35.3	11	64.7
B園	2	11.1	16	88.9
C園	6	50.0	6	50.0
D園	9	81.8	2	18.2
E園	10	71.4	4	28.6
F園	6	54.5	5	45.5

表6-20 外国語や外国の文化を学ぶ必要性

	とても感じる		多少感じる		あまり必要ない		全く必要ない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.9	11	64.7	5	29.4	0	0.0
B園	1	5.3	13	68.4	3	15.8	2	10.5
C園	0	0.0	11	84.6	2	15.4	0	0.0
D園	2	15.4	9	69.2	2	15.4	0	0.0
E園	1	7.1	10	71.4	2	14.3	1	7.1
F園	0	0.0	9	81.8	2	18.2	0	0.0

表6-21 保育実践上の困難

	日本語が伝わらない		食べ物の好みが違う		集中できない		トイレトレーニング	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	10	58.8	14	82.4	0	0.0	0	0.0
B園	11	57.9	14	73.7	3	15.8	0	0.0
C園	11	84.6	8	61.5	2	15.4	0	0.0
D園	9	69.2	12	92.3	1	7.7	1	7.7
E園	13	92.9	11	78.6	6	42.9	4	28.6
F園	7	63.6	4	36.4	0	0.0	1	9.1

### 第3節 保護者の様子

#### 第1項 保育所への協力度

つぎに保護者たちの子育てや園への協力度について、園ごとに違いはあるのかを確認してみよう。まず、日本人の保護者について見ていこう。

「行事への参加状況」について、「とてもよい」から「よくない」まで4つの尺度で聞いたところ、「とてもよい」と見ている保育士は、F園で72.7%、A園で58.8%と多かった（表6-22）。一方でB園、E園はその半数程度であり（31.6%、35.7%）、園によって保護者の参加状況に違いがあることがわかる。では日本人保護者の教育への意識はどうだろうか（表6-23）。「教育について熱心だと思いますか」という問いに対しては、「とても熱心」から「熱心でない」まで4つの尺度で聞いたところ、「とても熱心」と見ている者は、A園、C園、D園では2割に満たない少なさであるが、F園では4割を超えている（45.5%）。

また、「しつけに厳しいと思うか」という問いにも「とても厳しい」から「まったく厳しくない」まで4つの尺度で聞いたところ、「とても厳しい」保護者が多くと見ている者は少ないものの、「多少厳しい」を合わせると、多い園では7割近く、少ない園でも3割程度は選択されている（表6-24）。しかし、E園では30.8%と多い園の半数以下であり、こちらも園によって違いが見られる。

表6-22 行事への参加状況：日本人

	とてもよい		まあよい		あまりよくない		よくない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	10	58.8	7	41.2	0	0.0	0	0.0
B園	6	31.6	13	68.4	0	0.0	0	0.0
C園	6	46.2	7	53.8	0	0.0	0	0.0
D園	6	46.2	7	53.8	1	7.1	0	0.0
E園	5	35.7	8	57.1	0	0.0	0	0.0
F園	8	72.7	3	27.3	0	0.0	0	0.0

表6-23 教育に熱心か：日本人

	とてもよい		とても熱心		まあ熱心		あまり熱心でない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	3	17.6	13	76.5	1	5.9	0	0.0
B園	6	30.0	14	70.0	0	0.0	0	0.0
C園	2	16.7	10	83.3	0	0.0	0	0.0
D園	2	16.7	9	75.0	1	8.3	0	0.0
E園	3	23.1	8	61.5	2	15.4	0	0.0
F園	5	45.5	6	54.5	0	0.0	0	0.0

表6-24 しつけに厳しいか：日本人

	とても厳しい		多少厳しい		あまり厳しくない		全く厳しくない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	0	0.0	7	41.2	10	58.8	0	0.0
B園	0	0.0	9	47.4	10	52.6	0	0.0
C園	0	0.0	9	69.2	4	30.8	0	0.0
D園	1	9.1	5	45.5	4	36.4	1	9.1
E園	0	0.0	4	30.8	9	69.2	0	0.0
F園	2	18.2	2	18.2	7	63.6	0	0.0

では外国人保護者はどうだろう。外国人の中でも多いブラジル人保護者について答えてもらったところ、「行事への参加状況」について「とてもよい」と見ている保育士は、F園では5割を超えるものの(54.5%)、1割に満たない園も多く、特にD園、E園の外国人児童が多い園では0%と厳しい現状であった(表6-25)。しかし、「教育についての熱心度」をみると、「とても熱心」と見ている者はそれよりは高い(表6-26)。行事への参加が高いF園では6割を超え(63.6%)、他の園でも16%~31%程度となっている。しかし、E園だけは行事への参加度と同様に0%と低い結果となっている。また、「しつけに厳しいと思うか」という問にも、日本人保護者と同様、「とても厳しい」と答えたものはさほど多くはないものの、「多少厳しい」を合わせると、多いところではF園の54.5%、A園の41.2%であり、他の園でも3割を超えるところが多い(表6-27)。しかし、ここでもE園だけは、しつけについて「厳しい」「多少厳しい」保護者が多いと見ているものが0%と、しつけについて「あまり厳しくない」と見ている保育士が多いという結果であった。

表6-25 行事への参加状況：ブラジル人

	とてもよい		まあよい		あまりよくない		よくない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	4	23.5	11	64.7	1	5.9	1	5.9
B園	1	5.6	12	66.7	5	27.8	0	0.0
C園	1	7.7	9	69.2	3	23.1	0	0.0
D園	0	0.0	2	16.7	8	66.7	2	16.7
E園	0	0.0	9	64.3	3	21.4	2	14.3
F園	6	54.5	5	45.5	0	0.0	0	0.0

表6-26 教育に熱心か：ブラジル人

	とても熱心		まあ熱心		あまり熱心でない		熱心ではない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	3	17.6	11	64.7	3	17.6	0	0.0
B園	6	31.6	10	52.6	3	15.8	0	0.0
C園	2	18.2	8	72.7	1	9.1	0	0.0
D園	2	16.7	5	41.7	5	41.7	0	0.0
E園	0	0.0	9	64.3	5	36.7	0	0.0
F園	7	63.6	4	36.4	0	0.0	0	0.0

表6-27 しつけに厳しいか：ブラジル人

	とても厳しい		多少厳しい		あまり厳しくない		全く厳しくない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.9	6	35.3	6	35.3	4	23.5
B園	1	5.6	5	27.8	10	55.6	2	11.1
C園	0	0.0	5	38.5	6	46.2	2	15.4
D園	1	9.1	3	27.3	6	54.5	1	9.1
E園	0	0.0	0	0.0	13	92.9	1	7.1
F園	0	0.0	6	54.5	5	45.5	0	0.0

## 第2項 保護者同士の交流

保育士たちは日本人と外国人保護者の付き合いについて、程度の違いはあるものの、交流があると見ていた。それでは、そのような両保護者の付き合いに、園による違いは見られるのだろうか。外国人保護者と日本人保護者の付き合い方について、多く選択されているもの、園によって違いが大きいものを見てみると、多く選択されている項目としては、「会えば挨拶をしているようだ」であり、6～7割の園が多く、中でもC園、F園では9割を超える（表6-28）。しかし、E園では50%と他と比較すると低い数値になっている。しかし、それ以外の項目をみると、「行事の際に話をしているようだ」では、多くが2割～3割前後の中でA園だけが0%であり、「子どもを通じて話しているようだ」は、ほとんどが2割台であるが、A園は5.6%と目立った低さである。このような結果を裏付けるように、外国人保護者と日本人保護者が「特に交流している様子はない」と見るものは、平均では2割に満たないが、A園では33.3%である。また、E園も28.6%と、この2園だけが、他と比較して低い数値になっていることがわかる。しかしE園は「行事の際に話をしている」「子どもを通じて話している」について2割程度は選択されており、A園ほどの低比率ではないことを考え合わせれば、実際には交流があると見てよいだろう。

表6-28 外国人と日本人保護者の交流

	会えば挨拶している		行事の際に話をしている		子どもを通じて話している		特に交流している様子はない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	11	61.1	0	0.0	1	5.6	6	33.3
B園	14	70.0	6	30.0	4	20.0	3	15.0
C園	12	92.3	4	30.8	3	23.1	0	0.0
D園	9	69.2	4	30.8	3	23.1	2	15.4
E園	7	50.0	3	21.4	4	28.6	4	28.6
F園	10	90.9	2	18.2	3	27.3	1	9.1

## 第3項 保護者との関係

保育士と外国人保護者の関係は園によって違いがあるのだろうか。保育所では外国人保護者に様々なことを伝えるために、入園のしおりや園便りの翻訳などの工夫をしている。配布物の翻訳は、「だいたい翻訳する」「時々翻訳する」を合わせると、7割以上が配布物を翻訳しているという結果

であったが、園による違いをみてみよう。

配布物を翻訳することが多い園を見ると、C園（69.3%）、D園（100%）、E園（92.8%）、F園（82.9%）と、F園以外は外国人児童の比率が高い園である（表6-29）。一方で外国人児童の比率が低いA園、B園では、配布物の翻訳を「まったくしていない」と答える者が2～3割存在している（33.3%、21.1%）。また配布物の翻訳者で、最も多いのは「保護者」であるが、保護者が翻訳すると答えた者は、特にC園（66.7%）、D園（58.3%）、E園（100%）で多く、やはり外国人児童の多い園であった（表6-30）。しかし、「翻訳するのが保育士」と答えた園をみると、F園で9割近く、D園でも7割近い（66.7%）。それ以外の4園は、1～2割前後である。また、D園では「卒園児の親」も確認された（25.0%）。他では「その他」がA園、B園で7割程度選択されていたが（共に77.8%）、具体的には「役場」という結果であった。

表6-29 配布物の翻訳

	だいたい翻訳する		時々翻訳する		ほとんどしていない		全くしていない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.6	9	50.0	2	11.1	6	33.3
B園	2	10.5	7	36.8	6	31.6	4	21.1
C園	3	23.1	6	46.2	4	30.8	0	0.0
D園	6	46.2	7	53.8	0	0.0	0	0.0
E園	5	35.7	8	57.1	1	7.1	0	0.0
F園	4	36.4	5	45.5	2	18.2	0	0.0

表6-30 誰が翻訳するか

	保育士		保護者		卒園児の親		その他	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	11.1	1	11.1	0	0.0	7	77.8
B園	2	22.2	3	33.3	0	0.0	7	77.8
C園	2	22.2	6	66.7	0	0.0	2	22.2
D園	8	66.7	7	58.3	3	25.0	2	16.7
E園	1	9.1	11	100.0	0	0.0	0	0.0
F園	8	88.9	1	11.1	0	0.0	1	11.1

このように、保育所では保護者とのコミュニケーションを円滑にするための工夫をしており、それは園によって異なる傾向を示していた。それでは実際に保護者との関係はどのようなのだろうか。「保護者から相談を受けることがあるか」という項目を見ると、「どちらからも受ける（日本人・外国人）」と答えた比率がD園で高いという傾向を示していた（表6-31）。F園は「どちらからも相談をうける」という割合が低かった（54.5%）。

また、相談の内容について「外国人と日本人の違い」をどのように受け止めているのかについては、ほとんどの園で「あまり違いはない」と受け止めている（表6-32）。平均すると7割前後であるが、F園だけはすべての保育士が「あまり違いはない」と考えていた。また、A園、D園、E園は「多少違う」とする者が他の園より多く、3割前後であった。

その結果「外国人保護者とのコミュニケーションはうまくいっているか」という問に対して、「うまくいっている」「だいたいうまくいっている」と考えるものは平均で7割前後であるのに対し、F園では100%、A園では94.5%と特に多く選択されていた（表6-33）。

表6-31 保護者から相談をうけるか

	どちらからも受ける		日本人からは受ける		相談を受けることはない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	14	77.8	3	16.7	1	5.6
B園	13	65.0	3	15.0	4	20.0
C園	11	78.6	1	7.1	2	14.3
D園	10	83.3	0	0.0	2	16.7
E園	9	64.3	3	21.4	2	14.3
F園	6	54.5	3	27.3	2	18.2

表6-32 違いはあるか

	多少違う		あまり違いはない		全く違いはない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	4	30.8	9	69.2	0	0.0
B園	2	15.4	10	76.9	1	7.7
C園	1	10.0	7	70.0	2	20.0
D園	2	25.0	6	75.0	0	0.0
E園	2	28.6	5	71.4	0	0.0
F園	0	0.0	6	100.0	0	0.0

表6-33 外国人保護者とのコミュニケーション

	うまくいっている		だいたいうまく		あまりうまくない		うまくいっていない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	1	5.6	16	88.9	1	5.6	0	0.0
B園	2	10.0	13	65.0	3	15.0	2	10.0
C園	2	14.3	8	57.1	3	21.4	1	7.1
D園	1	8.3	8	66.7	2	16.7	1	8.3
E園	0	0.0	10	71.4	4	28.6	0	0.0
F園	0	0.0	11	100.0	0	0.0	0	0.0

#### 第4節 混成保育の評価

保育士たちは、保育所に外国人児童を入園させることをどのように捉えているのだろうか。全体では「外国人園児が入園することに対して」「とてもよいことだ」「どちらかといえばよい」と、混成保育を肯定的に捉えているものは7割を超える一方で、「望ましくない」「あまり望ましくない」という回答も見られる結果であった（表6-34）。ところがこの項目を園ごとに見てみると、かなり大きな違いが見られた。

E園を除く5つの園では、8割前後～10割の保育士が外国人園児の入園に肯定的な捉え方をしており、「望ましくない」「あまり望ましくない」と否定的に捉えている者は2割以下と少数である。ところがE園だけは、それとはまったく異なる結果となっている。外国人園児が入園することに肯定的だと答えたものは2割程度であり、否定的に捉えているものが8割程度なのである。つまり、この質問からは、E園とそれ以外の園で、外国人保育に対する評価が大きく異なっていることがいえるだろう。

なぜこのような違いが現れているのだろうか。これまでも見たように、E園は他と比較して、外国人児童の比率が高い園であった。しかしE園と同程度に外国人比率が高いC園とD園は、外国人園児の入園に否定的なものはわずかで、「とてもよい」「どちらかといえばよい」と肯定的に捉えたものが9割という結果である。

また、混成保育に関連する項目を評価してもらったところ、「国際的な視野が広がる」では、F園、A園が高く、実際に外国人児童が多いC園、D園、E園は2割台と低かった（表6-35）。また、保育所では「日本語を使うべき」という考え方については、A園、F園では3割前後と低いが、やはり外国人児童が多いC園、D園、E園では5割～6割前後であった。また、児童が保育所で「母

語を使うのは当然」と考えるものは、D園、E園、F園で多かった。しかし、児童が「母語を覚える必要がある」と考えているものが多い園は、A園、D園、F園であった。外国人児童が多いE園は2割程度と低かった。

表6-34 外国人園児が入園の評価

	とてもよい		どちらかといえばよい		あまり望ましくない		望ましくない	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	6	35.3	9	52.9	2	11.8	0	0.0
B園	3	23.1	7	53.8	2	15.4	1	7.7
C園	3	30.0	6	60.0	1	10.0	0	0.0
D園	3	30.0	6	60.0	1	10.0	0	0.0
E園	0	0.0	3	21.4	11	78.6	0	0.0
F園	4	40.0	6	60.0	0	0.0	0	0.0

表6-35 混成保育について（とても・やや思う）

	国際的な視野が広がる		日本語を使うべき		母語を使うのは当然		母語を覚える必要がある	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	8	44.4	6	33.4	7	38.9	11	61.1
B園	5	35.0	8	42.1	2	11.1	7	38.9
C園	4	28.5	8	57.1	0	0.0	4	28.6
D園	3	23.1	7	53.9	6	50.0	7	58.3
E園	3	21.4	9	64.3	6	42.9	3	21.4
F園	8	72.8	3	27.3	5	45.5	5	45.5

## 第5節 保育に関する考え

保育に対する考え方について、園ごとに見てみた。まず、保育所においてどの程度重要だと思うかという問に対して、全体的な項目をいくつか用意して尋ねたところ、多く選択され、違いが見られた項目としては「施設の設定がよいこと」「保育士のレベルがよいこと」「保育内容がよいこと」などがあつた（表6-36）。その中で違いを見ると、D園が比較的低い数字であることがわかる。例えば「施設の設定がよいこと」という項目では、E園が100%、A園、B園、F園も90%前後であるのに対して、D園は54.6%と半数程度である。また、この項目に対して「あまり重要でない」と答えたものは他では皆無であったのに、この園では一人の保育士がそれを選択している。他の項目についても、この項目ほどの差はないが、同様の傾向を示しており、D園の回答が全体に分散した傾向であると見ることができ、それが差として現れている。

また、「子どもにとってどの程度重要か」という保育内容に関する選択肢について、「とても重要」「やや重要」と肯定的に捉えている者を見ると、全体に重視されている項目として、「基本的な生活習慣を身に付けさせる」「のびのびと自由に遊ばせる」「さまざまな経験をさせる」などが、90~100%と全ての園で高い比率で選択されている（表6-37）。

しかし、全体で見ればそれほど高い比率で重視されていない項目では、詳細にみれば園ごとの違いが確認される。例えば、「挨拶や礼儀などのマナー」では、肯定的か否定的かという見方であれば8割から9割前後と大きな違いはないが、「とても重要」と答えたものだけに着目すると、B園、C園では3割前後（31.6%、28.6%）であるのに対してD園、E園では8割を超える（81.8%、85.7%）。また、「教育の基礎を教える」でもC園は0%、A園、F園でも2割に満たないのに対し（16.7%、18.2%）、D園、E園では3割前後となっている（36.4%、28.6%）。

表6-36 保育所における重要度

	施設の設備がよい		保育士のレベルがよい		保育内容がよい		保育時間の融通がきく		休日保育や病後児保育	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	17	94.4	16	88.9	17	94.4	13	72.3	11	61.1
B園	17	89.5	18	94.7	18	94.8	10	52.6	6	33.3
C園	10	76.9	11	84.6	14	100.0	8	57.1	5	35.7
D園	6	54.6	8	72.8	9	81.8	6	54.6	3	30.0
E園	13	100.0	12	92.3	13	100.0	7	50.0	6	46.2
F園	10	90.9	9	81.8	11	100.0	7	63.7	4	36.4

表6-37 保育における重要度

	基本的な生活習慣		のびのびと自由に遊ぶ		教育の基礎を教える		礼儀や挨拶などのマナー		様々な経験をさせる	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
A園	18	100.0	17	94.5	12	66.7	17	94.4	18	100.0
B園	19	100.0	18	94.8	8	44.5	15	79.0	19	100.0
C園	13	100.0	14	100.0	2	15.4	11	78.6	13	92.8
D園	11	100.0	11	90.9	5	45.5	10	90.9	10	90.9
E園	13	92.9	14	100.0	11	78.6	14	100.0	14	100.0
F園	11	100.0	11	100.0	5	45.5	10	90.9	11	100.0

以上のように、保育に関する考えにおいては、外国人比率が高いD園とE園は他と異なる傾向を示している半面で、同じように外国人児童が多いC園は、D園やE園と同様の傾向ではないことが確認された。つまり、保育士の意識には外国人児童の多寡で説明できる部分はあるが、それが全てではなく、同じように外国人比率が高くても異なる意識の場合もあるということが言えよう。

## 第6節 まとめ

以上のように、保育所別に外国人保育の実態と保育士の意識を比較してみると、外国人児童の比率によって、その違いが説明できる項目と、外国人児童の比率では説明できない項目があった。

外国人児童の比率によって説明できる項目としては、外国人児童の保育そのものに関わることがある。例えば、はじめて外国人児童の保育に関わった時の不安な思いや、文化の違いとして表れる外国人児童の行動面などである。また、それによって保育士が配慮する点についても、外国人児童が多い園では、配慮せざるを得ない現実が、実態として現れていた。このことは子どもへの保育だけでなく、保育者への配慮でも同様である。外国人が多い園では、広報誌の翻訳などの配慮が他の園と比較して多い結果であった。

一方で、保育士の意識については、外国人園児の比率によって説明できる部分と、できない部分が見られた。例えば、外国人児童が多く保育が大変であるという意識や、難しさを感じるということでは、同様の傾向であっても、外国人児童受け入れの是非や、外国人児童の母国の文化に関する考え方については、異なる傾向であった。

具体的に言えば同じように外国人児童の比率が高い、C園、D園、E園の、外国人保育受け入れに対する評価は、全く異なっていた。C園とD園は、外国人園児の入園に否定的なものは僅かで、「とてもよい」「どちらかといえばよい」と肯定的に捉えたものがほとんどであるが、E園では、「どちらかといえばよい」と答えたものが僅かで、多くは否定的な意識を有している。また、混成保育に関連する評価のなかでも、「国際的な視野が広がる」とはあまり考えていないことや、保育所ではできるだけ「日本語を使うべき」との考えについては、3園とも同傾向であったが、児童が保育所で「母語を使うのは当然」と考えるものは、D園、E園で、「母語を覚える必要がある」については、D園のみが多いなど、特にD園とE園の違いが際立っていた。

この2園についての違いを考えてみよう。外国人児童の入園について肯定的な意識を抱いていたD園は、年齢層も幅広く経験も豊富な保育士たちが、保護者や卒園児の親などの協力を得て、外国人児童の国の言葉を使うなど、いわば文化を尊重した保育を取り入れている。一方で、外国人児童の入園に消極的なE園では、比較的年齢層の若い保育士が、限られた経験をもとに、外国人保護者などの協力も少ない中で保育を行っている様子であった。そこで行う保育は日本的な保育が中心であり、外国人児童だからという意識よりも、配慮を必要としている児童に対して、ジェスチャーなどを使って懸命に配慮している様子がうかがえた。

このように、外国人児童受け入れの是非については、保育士の年齢層や経験、さらに外国人保育を取り巻くサポート状況などの保育環境の違いや、行われている保育の方針の違いなどいくつかの要因が折り重なって影響を与えていることが推察された。つまり外国人児童受け入れに消極的なのは、それらの要因が関連し合っただけの結果であり、単純に一つの原因に由来するものではないと言えるだろう。

(品川ひろみ)

## 第7章 保育士意識の時系列的变化

前章では、各園の違いや特色を中心に見てきたが、その結果の一つとして外国人児童の比率によって保育士の意識が異なることが明らかになった。だが、外国人児童の比率が同じように高くても、保育士の意識が異なっていることも明らかになった。その中の一つであるE園は、今回の調査の4年ほど前にも、保育士全員に対する聞き取り調査を行っている。ところが、今回の調査結果の分析を進めるなかで、E園の保育士の意識に4年前とは異なる傾向があることが確認された。中でも違いを感じたのは、外国人児童の保育所入所に関する是非である。今回の調査で、「外国人園児が入園することに対して」「とてもよいことだ」「どちらかといえばよい」と混成保育を肯定的に捉えている保育士は、平均すると7割前後であった。しかし、当該園では、「とてもよい」「どちらかといえばよい」を合わせても2割程度であり、「とてもよい」と考える者は一人もいなかった。

しかし、4年前の調査における本園の外国人保育の印象を一言で述べると、自然体で無理のない保育を行っており、それが結果として上手く行っている様子であった。外国人園児入園の状況は、入園当初は大変だが、すぐに慣れる。保護者は保育所に協力的であり、行事の時には日本人保護者よりも活発な部分もあることや、日本語に不慣れな保護者に対する通訳をしてくれるなど、好ましいエピソードが語られていた。さらにこれまで大きなトラブルもなく、特に問題を感じていない。総合的に見て、上手く行っているという状況であった。しかし今回の調査結果は、そのような肯定的な見方とは相反する面が目立っていた。

このようなE園の変化はなぜ生じたのだろうか。そこで本章では、当該園について今回の調査と4年前の違いを自由記述を中心に明らかにし、そこから問題点を導き出したい<sup>1)</sup>。

## 第1節 調査の概要と保育士の背景

4年前の調査について概要を述べておこう。調査は2001年9月10～12日、在籍する保育士11名全員に対して面接調査をおこなった。調査の方法は、調査者が保育所に出向き、午睡の時間を利用して行った。そのため、園の全体的な雰囲気や、外国籍児童と保育士のかかわり、子ども同士のかかわりなどを見ることもできた。当時本園には84名の園児が在籍しており、うち23名が外国籍の児童であった。一方2005年度の調査は保育士14名に対する質問紙調査を中心としている。園児数は100名であり、そのうち外国人児童は23名であった。

はじめに、保育士の年齢を比較してみよう。4年前の調査では、回答者11名の年齢層は、20代5名、30代4名、40代2名と、若い保育士は多いものの、30代40代も半数程度見られ、全体にバランスの取れた年齢構成になっている。今回の年齢層を見てみると、20代5名、30代4名、40代2名とほとんど同じ年齢構成になっている<sup>2)</sup>。

外国人児童の比率はどうだろう。先にもみたように4年前の調査では在籍児童84名の中で、外国人児童は23名、比率は27.3%であった。今回は、在籍児童100名のうち、23名の外国人児童が在籍しており、比率は23.0%となっており、外国人児童の数は同様であるが、比率としてはやや低くなっている。

表7-1 児童数と保育士数

	2001年	2005年
児童数	84名	100名
外国人児童	23名	23名
外国人児童比率	27.3%	23.0%
保育士数	11名	14名

## 第2節 外国人保育における困難と配慮

次に外国人児童たちの園での状況を見てみよう。日常の保育の中で外国人児童に対する配慮として重視されているのが、言葉の問題である。前回の調査においても、外国人児童との意思疎通が難しいことが述べられていた。

「言葉が通じにくいこと。意思疎通に手間がかかる。哺乳瓶をずっと使っている」(01年)

「外国人園児を叱ったとき、言葉で理由を説明したとき、うまく伝わったか不安になる」(01年)

このように、前回の調査では先に見たような難しさが語られる一方で、実際に保育を行ってみると、考えていたほど難しくないということも語られていた。

「最初は大変かと思ったけれど、慣れてきたらさほどでもなかった」(01年)

「差は感じない、わたしは今でも区別がつかない(日本人児童と外国人児童)」(01年)

「新しく入った子とはコミュニケーションが大変。あいさつなどから日本語を教えていく」(01年)

一方、今回の調査において外国人児童の状況はどう捉えられていたのだろうか。保育を行う上で困難として多く選択されていたのは、「日本語が伝わらない」(92.9%)、「食べ物の好みが違う」(78.6%)、「集中できない」(42.9%)であった(表7-2)。やはり言葉の問題は多く選択されている。そこで、外国人児童の使用する言語は何が多いと感じているのかを見てみると、「外国語」のみは

表7-2 保育を行う上での困難

	度数	パーセント
日本語が伝わらない	13	92.9
食べ物の好みが違う	11	78.6
集中できない	6	42.9
トイレトレーニング	4	28.6
午睡の習慣がない	0	0.0

表7-3 外国人児童の使用言語

	度数	パーセント
外国語	0	0.0
外国語と少しの日本語	7	50.0
日本語と少しの外国語	4	28.6
日本語	3	21.4

存在しないものの、「外国語と少しの日本語」と答えた者が半数（50.0%）にのぼる（表7-3）。

そのため、自由記述の欄にも保育者と外国人児童の意思疎通の難しさが記されていた。

「言葉が通じないので、身振り手振りで顔をみてしっかり伝えるよう心がけた」（05年）

「言葉が通じないときは、ジェスチャーを使って説明した」（05年）

また、言葉が通じにくいということに由来するのか、外国人児童の様子に落ち着きがなく、配慮を必要とする児童であるという見方のものも存在する。

「落ち着きがなく、話を聞こうとする姿勢が見られない」（05年）

「落ち着きがない。赤ちゃんばい」（05年）

それでは、保育士たちは外国人児童に対してどのような配慮をしているのだろうか。4年前の調査の結果では、給食などに対する配慮や、言葉に対する配慮を行っていた。特に言葉については、ジェスチャーを用いて伝え、言葉かけをたくさんし、日本語を覚えさせるなどの働きかけをしている。

「言葉かけをたくさんして日本語を覚えてもらう」（01年）

「分け隔てない。言葉が足りない分、ものや絵本の絵を使う」（01年）

「あまり身構えない」（01年）

「あくまで日本のスタイル。具合の悪いときにわかってあげられないのが残念」（01年）

「言葉がわからないので手振りで教えたり、できないところを補助してあげる」（01年）

「入って間もない子に強制はしない。2歳からお箸を使い始めている」（01年）

このように前回の調査では、外国人児童に対する保育の際、「あまり身構えない」という発言に象徴されるように、特別な配慮としてではなく、通じない言葉をどのように補うのかという視点に立った保育をしている。それは、通常日本の保育で一般的に行っている、いわば個別的な配慮のように見える。つまり保育士たちは、意識する、しないにかかわらず、結果として日本的な保育の実

践を行っているのである。

では、今回はどうだったのだろうか。外国人児童に対する配慮として、言語面をみてみよう。

「身振り手振りをわかりやすくする」(05年)

「なるべくジェスチャーをつけて伝え、必ず目を見て話す」(05年)

「身振り手振り、簡単な言葉を繰り返す」(05年)

「ポルトガル語を少し覚えた（トイレや食事などの簡単な言葉）」(05年)

ポルトガル語を少し覚えたとする保育士は見受けられるが、全体としてみればそれは少数であり、多くの者は、身振り手振り、つまりジェスチャーによって、伝わらない日本語を補っている者が大多数である。それ以外の配慮としては、「給食」(50.0%)などが目立つが、言葉に対する配慮に比べると多少低くなる。

このように、外国人児童の保育に関する配慮を4年前と比較すると、多少言語の面では、ジェスチャーを使う面に特化しているような印象はあるものの、外国人児童だから特別というような配慮はしていないという点では、変化がないように感じる。それは、以下のような記述にも現れている。

「保育園においては、外国人、日本人の子どもだからという意識（区別）を持って保育することはない。言葉が通じないので誤解をまねいたり、気持ちに通じないことがおきてしまうと、少しさびしいと思うことがあるので、時間をかけて、少しずつ信頼関係を築いていけたらと思います」(05年)

このように、保育士が行っている外国人児童への保育は4年前と大きな変化は見られなかった。配慮を必要とする児童に、個別的な配慮をするという意味で、外国人児童に対応している。

### 第3節 保護者との関係

混成保育全体に対する困難をあげてもらったところ、先に述べたような言葉の問題のほかでは、保護者に関するものが多かった。そこで次に、保護者との関係についてみていこう。まず、4年前の調査から、保護者に対する意識の中でも代表的なものを確認してみよう。

「親の生活環境・生活習慣の違い。親の考え方。家で哺乳瓶、おむつをさせている」(01年)

「日本語の文字や勉強に対する親の興味・関心の差。途中入園の子の大変さ」(01年)

「子どものことは大丈夫。外国人の親は保育士を頼ってくれる(A)。日本人の親の一部で日本人同士なら何でもないと、外国人だからといって過敏に反応する人がいる」(01年)

ここでも、言葉の問題と生活習慣などの違いによる問題が見られる。しかしながら、注目されるのは、下線Aで示した部分「外国人の親は保育士を頼ってくれる」である。保育士たちの様々な配慮に対して、外国人保護者が頼ってくれるという態度は、保育士にとってみれば、一つの評価として受け取れるだろう。

では、今回はどうだったのだろうか。外国人保護者に関する記述を見てみよう。

「文化、生活の違いがあり、親の努力が見られず、いいかげんな姿が見られることが多いため (B) (時間にルーズ、金銭面など)」(05年)

「言葉が通じなかったり、文化の違いからコミュニケーションが取りづらい」(05年)

「中にはしっかりした親もいるが、時間にルーズで困ることがある」(05年)

「入園するにあたり、親の姿勢を変えるべき。子どものためにも保育士と一緒に協力してほしい」(05年)

「生活・文化・習慣が違うことを理解していない親が多い」(05年)

「保護者が送迎も他人にまかせ、全く園に顔を出さない(C)。落ち着いてすわっていることができない。言葉がわからないとごまかす」(05年)

「生活習慣の違いがある為、なれるのに時間がかかる。言葉が分からず、ケンカ・トラブルになることがある」(05年)

このように、非常に否定的な記述が目立っている。特に、文化や生活習慣が違うことに対して、外国人保護者が無理解であると捉えている。また、言葉の問題からか、コミュニケーションが取りにくいことや、「いいかげん」な親の存在、さらに保育所に非協力的であることが述べられている。

しかし、文化や習慣が違うことは、前回の調査でも認識されていた。また、言葉の壁の問題も同様であった。しかし、先に見たように前回の調査では、保育士の配慮に対して、「頼ってくれる外国人保護者」の存在が見られた。一方今回の調査では、下線Cのように、子どもの送迎も他人任せであり、保育所には全く顔を出さない例もあるという。これでは保護者とのコミュニケーションも難しいだろう。

そこで、前回の調査から「文化の違い」「教育への関心」「園への協力度」に絞って、さらに確認していこう。

#### 第4節 文化の違いと教育への姿勢

まず「文化の違い」についてである。これまでも見たように、当該保育所ではごく一般的な、いわば日本的な保育を行っている。保育所は子どもにとって「生活の場」であるといわれるように、一つひとつの行為が日本の文化に基づいている。そのため、日本人にとって何でもないことが、外国人にとっては珍しく、驚きの連続である。

保育士たちは、外国人が感じる文化の違いは認識している。しかし問題は、それをどのように受け止めているかである。前回の調査によれば、保育士が日本的な保育を行う理由として、日本語や日本の文化を覚えることは、外国人児童にとってもメリットがあると捉えていることがあった。また、保護者に対しては、子どものために園の保育に協力してほしいと考えている者が多かった。

そのため、外国人保護者から「お箸がつかえないからどうしよう」「梅干買ってっていわれるけど…」(01年)のように、文化の違いに関する相談を受け、それに応えることは、保育士にとって、外国人保護者との望ましい関係であり、相談する外国人保護者は、教育熱心であると捉えられる。

しかし今回は「文化、生活の違いがあり、親の努力が見られず、いいかげんな姿がみられることが多い (時間にルーズ、金銭面など)」の発言に代表されるように、「違う」だけでなく、第3節の

下線Bに示したように「いい加減」「努力が見えない」と捉えられている。

そのことは、子どもの教育への関心の低さという認識にも繋がっている。01年度の調査では外国人保護者から、「文字の勉強をいつから始めるか、練習させてほしい」などや、中には2歳児のときから文字の学習を求めるものもいるなどの発言があり、外国人保護者が教育熱心であると捉えられていた。

しかし今回の調査では、「外国人保護者が教育に熱心か」という問に対して見てみると、「とてもよい」と見ている保育士はほとんどおらず、僅かにペルー人保護者の中に1名存在するだけであった。

しつけはどうだろうか。「しつけに厳しいと思いますか」という問では、「とても厳しい」はもちろん、「多少厳しい」と答えた者もほとんど見られなかった。ペルー人保護者の中に「多少厳しい」と答えた者が1名見られるだけであった。

また、記述を見ても前述したように否定的なものが多く、外国人保護者に対する好意的な見方は確認できなかった。

そのような保護者の教育への考えは、園への協力度にも現れている。まず前回の保護者の様子を確認しよう。前回の調査を見ると、外国人保護者は積極的に活動してくれると捉えられていた。

「教育熱心で、行事にも参加する人が多い」(01年)

「両親みな遠足に参加。トリムバレーの時は言葉関係ない。友だちが友だちを呼ぶ」(01年)

「ブラジル人には協力的な人も多い。草取りや発表会での親の出し物にも熱心。運動会には家族や友達大勢が来る。お祭りでブラジルのダンス（を披露したこともある）。」(01年)

このように、保育所で行われる行事、特に運動会やトリムバレーのように、日本語がそれほど上手くなくてもコミュニケーションが取れる行事は特に参加率が高い。また、それ以外に保育所で行われる行事も比較的協力的であると捉えられていた。さらに保育所の保護者会は、2名の外国人リーダーを中心として他の父母への連絡やお世話をするという外国人父母のネットワークも見られ、保育所の行事について非常に協力的であると好感を持たれていた。

それでは、今回はどうだろうか。ブラジル人、ペルー人保護者の行事への参加状況を保育士はどのように見ているのだろうか。行事への参加状況を、「とてもよい」から「よくない」まで4つの尺度で答えてもらった結果をみると、「とてもよい」と見ている保育士はゼロであった<sup>3)</sup>。さらに既に見たような、保育所への理解や教育への関心が薄いなどの記述が多く見られ、01年の時のような好意的な捉え方は確認できなかった。

## 第5節 保育所における環境の変化

先に保育所の配慮として、外国人児童や保護者に対する直接的な関わりを既に確認してきたが、保育所の配慮はそれだけではない。保護者に対して情報を伝えるために、入園のしおりや園便りを翻訳していることがある。

前回の調査では、「入園のしおり」のポルトガル語版を作成しており、「保育所だより」も毎回ポルトガル語版を作っていた。

しかし、今回の調査結果を見ると、「だいたい翻訳している」が35.7%、「時々翻訳する」が57.1%と、前回より低くなっているようだ。だが、入園のしおりについては、4年前の調査時よりもさらに詳しく見やすいポルトガル語版が作られていた。このようなポルトガル語版の入園のしおりを用意しているのは、大泉町内の保育所の中でも本園だけである。

また、翻訳者については、数年前に卒園した子どもの母親で、小学校の日本語教室の嘱託教員をしているブラジル人に、ボランティアでお願いしているということであった。つまり、前は卒園児の母親という、いわば外部のサポートがあったが、今回は「保護者」が100%であり、「卒園児の親」や「その他」も確認できなかった。

このように、保育所と外国人保護者のいわば繋ぐ役割をしている広報について、前回と今回では、内容としては多少の減少が見られ、それをサポートする面としても減少していると見ることができる。

## 第6節 まとめ

E園における4年前と現在の違いをまとめると、まず、変わらない部分として、保育士の年齢層と保育方針をあげることができる。外国人の子どもに対して、外国人だからという特別な配慮は行わず、通じない日本語を補うため、あるいは慣れない文化に対して、いわば個別的な配慮で対応している。その点に関しては前回と今回の違いは見られなかった。

それに反して、変化した部分もいくつか見られた。まずあげられるのが保護者との関係である。前回の調査において外国人保護者は、教育熱心であり、保育所にも協力的であった。また、保育士に対しても自ら相談を持ちかけるなど、非常によい関係が作られていた。ところが今回の調査では、子どもの教育に関心が低く、保育所の行事の参加率が低い保護者や、保育所の送迎さえも他人任せにしているなどの記述が目立った。

次に外部のサポートによる違いがあった。園便り等の翻訳の際、前は保育士や保護者といういわば保育園の中だけではなく、卒園児の親という外部にもサポートが見られたが、今回それは確認できなかった。

最後に変化したこととして、外国人比率の低下がある。しかしこれは高かった比率が低くなったのであり、否定的な要因とは結びつきにくいと考えられる。

このように、E園ではこの4年の中で、外国人児童に対する日々の保育を、保育士の個別的な配慮と努力によって行ってきた。だが、外部のサポートも減少する中で、外国人保護者の協力が得られなくなったことは、大きな変化である。これが、外国人児童の入園に否定的になった最大の要因だと推察される。

### 注

- 1) 2001年の調査結果については、以下の2冊の文献から引用している。品川ひろみ・新藤慶・小野寺理佳「認可保育所の実態と保育士の意識」小内透編著『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店、2003。北澤梅英「保育者の混成保育に関する実践と意識」『調査と社会理論19 外国人多住地域の教育と国際交流活動』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2002。
- 2) 無回答が3名いるが、保育士経験では、5年未満4名、10年未満5名、20年未満5名という結

果になっている。

3) 日本人保護者に対して「とてもよい」と見ている者は3割を超える(35.7%)。

(品川ひろみ)

## 終章 父母と保育士の意識

これまで、大泉町の保育所に子どもを預けている日本人父母、ブラジル人父母、ペルー人父母と保育士の、保育に対する意識や交流の実態をみてきた。最後に、これまでの知見をまとめ、今後の課題を提示しておきたい。

### 第1節 父母の意識

日本人父母の意識を見た結果、第1に外国人児童受け入れに対する寛容な態度が明らかになった。その背景には、外国人児童とふれあうことが自分の子どもたちの国際的視野を広げるなどのメリットをもたらすという意識がある。また、それ以外にも、保育所に対する高い満足感が、外国人への寛容性につながっていることがわかった。

この外国人児童に対する寛容性は、単に子どもの世界だけにとどまらず、外国人父母との交流へもつながりうる。これが第2の知見である。そもそも、子どもを保育所に預けている日本人父母は、一般の大泉町民に比べて外国人との交流を望んでいる人が多いようであった。その上で、子どもに外国人の友だちがいるという父母は、よりいっそう外国人との関係の向上を望んでいるものが多かった。このことは、保育所が日本人と外国人の交流を促進する可能性を秘めていることを示している。

では、外国人父母の意識からは何が見えてきただろうか。

第1に確認できることは、日本で生活していくうえでの窓口として保育所を活用しようとする意識の強さである。ブラジル人学校やブラジル人託児所などがあるにもかかわらず、日本の認可保育所を利用している理由では、その安さと並んで日本文化にふれさせる、日本語が覚えられるなどの理由が選ばれている。

また、第2に日本人との交流を強く望む意識も確認できる。現状としてこの希望はなかなか叶えられておらず、日本人との交流は希薄である。しかし、日本人父母の意識に関する第2の知見からは、外国人父母のこのような期待が、今後よい方向へ向かう可能性が見て取れる。

第3に、外国人父母の間でも、ブラジル人とペルー人との間には確かな意識の違いが存在した。その最たるものとして、帰国願望の強さが挙げられる。ブラジル人は、2001年におこなった調査と比較すれば日本への定住志向が表れはじめてきているといえるものの、基本的にはブラジルへの帰国を前提として日本に滞在している。それに対し、ペルー人の多くははじめから日本に定住するつもりで様々な戦略を練っている。しかし、それが日本への同化を目指しているものではなく、あくまでもペルー人としての定住であるという点もまた、彼らの大きな特徴となっている。

## 第2節 保育士の意識

保育士への調査からは、保育士たちが外国人の子どもたちの保育に不安や困難を感じながらも、これまで日本人の子どもたちをみてきた中で培った経験を生かし、様々な工夫を凝らしながら保育している姿が浮かび上がってきた。保育士たちのこのような努力によって、先に見たような、父母たちからの絶大な信頼は確立しているといえる。ただし、これら保育士たちの意識は、保育士たちのおかれた環境に大きく左右されていることが明らかになった。

一つ目に、外国人園児がどれだけその園にいるかどうかによって、保育士たちの意識や実践は大きく異なる。しかし、外国人園児の多い保育所であれば、ある程度共通した意識が持たれているかといえば、決してそうではない。同様に外国人園児の多い保育所であっても、様々な条件の違いによって、保育士の意識は大きく異なっていた。

その条件を整理してみると、まず保育士の年齢層や経験がある。保育士の年齢層が偏っている園と分散している園では、分散している園の方が多様な考えが見られた。また保育に対するサポート体制の有無も重要な点だと考えられる。その中でも大きな要因だと考えられるのが、保護者の協力である。保育士にとって保護者の存在は、「保護者に対する保育に関する指導」<sup>1)</sup>を行う際の対象であるが、場合によっては日本語が通じない保護者の通訳や全体のまとめ役など、サポート役になる可能性を秘めている。さらに保育所や育児に対する協力的・積極的な態度は、個々の外国人保護者だけでなく、外国人保護者全体に対する評価にも影響を与える。

また保育における文化の捉え方の違いも重要な条件の一つである。日本語が通じない児童に対して、どのような方法で必要なことを伝えるのか、その方法には、外国人児童に対する保育をどのように捉えるのかという、いわば園の方針が表れている。それによって、保育士たちの外国人児童への関わり方や意識が形成されるといってよい。そのため、外国人保育を実践するためには、どのように行うのかという方針をしっかりと持ちすすめるのが望ましい。だが現実には、外国人保育に対する準備を十分に取る時間はない。日々の保育の中で、ある日外国人児童が入所し、それに対応する中で、気がついたら多くの外国人児童がいたと考えるのが現実に近い。しかし、その部分を検討せずに進めると、当初はうまく行っているように思えても、置かれている環境が変化すると、うまく行っているように見えた保育そのものに影響するのである。

このように、保育士たちの意識や実践はそれぞれの園の環境や、保育方針によって大きく異なっていた。それに対して父母の意識は、日本人、外国人とも国籍や、父親、母親間での違いはあるものの、園による違いというのはほとんど出ていない。本来ならば、保育士の実践が違えばそれに対する父母の意識、対応も変わってきてしかるべきである。しかし、父母たちの意識に差が表れないのはなぜなのか、外国人保育を総合的に捉えるためには、その点をさらに明らかにする必要があるだろう。その上で、日本人、外国人両者にとっての望ましい保育のあり方を探ることができると考える。

### 注

- 1) 児童福祉法が規定する保育士とは「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育の指導を行うことを業とするもの」であり、保護者に対

する対応は日々の保育の中でも主要な業務の一つとなっている。

(品川ひろみ、野崎剛毅)